

山武郡芝山町宝永作遺跡

—芝山第2工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 2

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

さんぶぐんしばやままちほうえいさくいせき
山武郡芝山町宝永作遺跡

—芝山第2工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書—

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県東部、栗山川の支流高谷川と木戸川に開析される台地は、先土器時代から歴史時代に至る遺跡が多く知られており、なかでも国指定史跡の殿塚・姫塚に代表される、芝山古墳群をはじめとする大小10余りの古墳群が所在し、古くからの人々の生活が明瞭にうかがえる地域です。

このたび、千葉県企業庁では、千葉県が策定した「ふるさと千葉5か年計画」及び「千葉県工業立地振興ビジョン」に基づき、千葉県の工業構造の質的転換と高度化を図るとともに、雇用の場を創出し、併せて地域経済の活性化を図るために、新東京国際空港を中心とした臨空ゾーンに3か所の工業団地の建設を計画しました。

このうち芝山第2工業団地建設予定地内の台地上には、山田古墳群、山田出口遺跡、宝永作遺跡が所在しており、千葉県教育委員会では、これら埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県企業庁と慎重に協議を重ねた結果、現状保存については計画変更が困難であるため止むを得ず記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、昭和56年度に第1次、昭和63年度に第2次調査を実施しました。既に第1次調査の成果について「芝山町山田古墳群・山田出口遺跡」として報告書を刊行しているところです。

今回報告する宝永作遺跡の発掘調査の結果では、先土器時代石器集中地点、縄文時代炉穴・陥穴状遺構、奈良・平安時代の祭祀遺構等が検出でき、長期にわたる人々の営みのあったことがあきらかとなり、当時の人々がどのように生活し、現在の私たちの暮らしにどう影響を与えたのかをひも解く貴重な手掛かりとなることでしょう。

本報告書を刊行するに当たり、本書が学術資料としてはもとより、広く一般に活用され、埋蔵文化財の重要性を知っていただくとともに、文化財保護への理解が深まることを切に期待するものです。

終りに、発掘調査から整理作業に至るまで御指導・御協力をいただいた千葉県教育委員会、千葉県企業庁、芝山町教育委員会及び関係諸機関、並びに発掘調査、整理作業等に御協力いただいた調査補助員、地元の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩 瀬 良 三

凡 例

1. 本書は、芝山第2工業団地造成に伴い事前調査した、山武郡芝山町宝永作遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施は、千葉県企業庁の依頼により、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受け、財団法人千葉県文化財センターが行なった。
3. 宝永作遺跡のコード番号は、行政管理庁指定統計コード、千葉県文化財センター遺跡コードを使用し、409-024とした。
4. 本書の第2図は、国土地理院発行の1:50,000地形図、「成田」を使用した。
5. 本書で使用した遺構番号は発掘調査時のものを踏襲するが、整理作業の段階で先土器時代ブロックの名称を一部変更した。
6. 本報告書内の遺構平面図中のスクリーントーンは、すべて焼面および焼土分布を表わすものである。
7. 縄文時代土器拓影図断面のスクリーントーンは、胎土中に繊維が混入していることを表わす。
8. 発掘調査から報告書の刊行にあたり、下記の諸機関の御指導・御協力を賜りました。記して謝意を表します。

千葉県企業庁、千葉県教育委員会、芝山町教育委員会。

本文目次

序文	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

序章 経過と環境

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過と組織	1
第3節 遺跡の環境	2

第1章 調査の方法と経過

第1節 層序	9
第2節 概要	11

第2章 遺構と遺物

第1節 先土器時代	15
第2節 縄文時代	36
第3節 奈良・平安時代	79

第3章 小結

第1節 先土器時代	88
第2節 縄文時代	92
第3節 奈良・平安時代	98

挿 図 目 次

第1図	宝永作遺跡位置図・周辺地形図	3
第2図	宝永作遺跡周辺遺跡位置図	6
第3図	宝永作遺跡土層柱状図	10
第4図	宝永作遺跡確認・本調査範囲及びグリッド配置図	12
第5図	宝永作遺跡遺構配置図	14
第6図	ブレ1遺物分布図	16
第7図	ブレ1出土遺物実測図	17
第8図	ブレ2遺跡分布図	18
第9図	ブレ2出土遺物実測図	19
第10図	ブレ3出土遺物実測図	19
第11図	ブレ3遺物分布図	20
第12図	ブレ4遺物分布図	21
第13図	ブレ4出土遺物実測図	22
第14図	ブレ5遺物分布図	23
第15図	ブレ5出土遺物実測図	24
第16図	ブレ6遺物分布図	25
第17図	ブレ6出土遺物実測図	27
第18図	ブレ7遺物分布図	28
第19図	ブレ7出土遺物実測図	29
第20図	ブレ8遺跡分布図	30
第21図	ブレ8出土遺物実測図	31
第22図	ブレ9・10出土遺物実測図	31
第23図	ブレ9・10遺物分布図	32
第24図	接合資料実測図(1)	33
第25図	接合資料実測図(2)	34
第27図	炉穴平面図(2)	37
第28図	002号炉穴出土遺物実測図	38
第29図	陥穴状遺構平面図(1)	39
第30図	陥穴状遺構平面図(2)	43
第31図	包含層出土遺物時期別分布図	45・46

第32図	第1群I類土器拓影図(1)	47
第33図	第1群I類土器拓影図(2)	48
第34図	第1群I類土器拓影図(3)	49
第35図	第1群I類土器拓影図(4)	50
第36図	第1群I類土器拓影図(5)	51
第37図	第1群I類土器拓影図(6)	52
第38図	第1群I類土器拓影図(7)	53
第39図	第1群I類土器拓影図(8)	54
第40図	第1群I類土器拓影図(9)	55
第41図	第1群I類土器拓影図(10)	56
第42図	第1群I類土器拓影図(11)	57
第43図	第1群II類土器拓影図	58
第44図	第2群I類土器拓影図(1)	60
第45図	第2群I類土器拓影図(2)	61
第46図	第2群I類土器拓影図(3)	62
第47図	第2群I類土器拓影図(4)	63
第48図	第2群II類土器拓影図(1)	65
第49図	第2群II類土器拓影図(2)	66
第50図	第2群III類土器拓影図	67
第51図	第3群I類土器拓影図	68
第52図	第3群II類土器拓影図	69
第53図	第4群I類土器拓影図	69
第54図	第4群II類土器拓影図	70
第55図	第5群I類土器拓影図	72
第56図	第5群II類土器拓影図(1)	73
第57図	第5群II類土器拓影図(2)	74
第58図	グリッド出土石器実測図(1)	76
第59図	グリッド出土石器実測図(2)	77
第60図	第1祭祀遺構出土遺物実測図	81
第61図	第2祭祀遺構出土遺物実測図	81
第62図	グリッド出土遺物実測図	82
第63図	グリッド出土鉄器実測図	85
第64図	分郷八崎遺跡ブロック概念図(1:200)	90

第65図	接合状況図(1:200)	90
第66図	花輪台式土器出土遺跡位置図	93
第67図	花輪台式土器文様別組成図(1)	96
第68図	花輪台式土器文様別組成図(2)	97
第69図	宝永作遺跡・宮門遺跡形態別環比較図	100
附図1	石材別分布及び接合状況図	
附図2	第1・2祭祀遺構遺物分布図	

表 目 次

第1表	宝永作遺跡周辺遺跡表	7・8
第2表	ブレ5・8遺物番号対応表	15
第3表	ブレ1出土石器表	17
第4表	ブレ2出土石器表	18
第5表	ブレ4出土石器表	21
第6表	ブレ5出土石器表	25
第7表	ブレ6出土石器表	26
第8表	ブレ7出土石器表	28
第9表	ブレ8出土石器表	30
第10表	接合資料石器表	35
第11表	グリッド出土石器表	78
第12表	第1祭祀遺構出土土器表	83
第13表	第2祭祀遺構出土土器表	84
第14表	グリッド出土土器表(1)	86
第15表	グリッド出土土器表(2)	87
第16表	花輪台式土器出土遺跡表	94

図 版 目 次

図版1	2. 先土器時代ブロック(1)
1. 調査風景	図版3
2. 土層柱状図(3A-08 東壁)	先土器時代ブロック(2)
図版2	図版4
1. 先土器時代ブロック全景	先土器時代ブロック(3)

- 図版 5
先土器時代出土石器(1)
- 図版 6
先土器時代出土石器(2)
- 図版 7
先土器時代出土石器(3)
- 図版 8
先土器時代出土石器(4)
- 図版 9
縄文時代炉穴(1)
- 図版 10
縄文時代炉穴(2)
- 図版 11
縄文時代炉穴(3)
- 図版 12
1. 縄文時代炉穴(4)
2. 002号炉穴出土遺物
- 図版 13
縄文時代陥穴状遺構(1)
- 図版 14
縄文時代陥穴状遺構(2)
- 図版 15
縄文時代陥穴状遺構(3)
- 図版 16
1. 第1群I類1種土器
2. 第1群I類2種土器(1)
- 図版 17
第1群I類2種土器(2)
- 図版 18
1. 第1群I類2種土器(3)
2. 第1群I類3種土器
- 図版 19
1. 第1群II類土器
2. 第2群I類土器(1)
- 図版 20
第2群I類土器(2)
- 図版 21
1. 第2群I類土器(3)
2. 第2群II類土器
1. 第2群III類土器
2. 第3群I類土器
- 図版 23
1. 第3群II類土器
2. 第4群I類土器
3. 第4群II類土器(1)
- 図版 24
1. 第4群II類土器(2)
2. 第5群I類土器
3. 第5群II類土器(1)
- 図版 25
1. 第5群II類土器(2)
- 図版 26
グリッド出土石器
- 図版 27
1. 奈良・平安時代祭祀遺構
2. 第1祭祀遺構出土土器
- 図版 28
第2祭祀遺構出土土器(1)
- 図版 29
1. 第2祭祀遺構出土土器(2)
2. グリッド出土土器
- 図版 30
グリッド出土鉄器

序章 経過と環境

第1節 調査に至る経過

千葉県企業庁は、千葉県で策定した「ふるさと千葉5か年計画」及び「千葉県工業立地進出ビジョン」に沿って、新東京国際空港を中心とした臨空ゾーンに、空港南部工業団地、横芝工業団地、芝山第2工業団地の3か所の工業団地の建設を計画した。これは千葉県の工業構造の質的転換と高度化を図るとともに、雇用の場を創出し、併せて地域経済の活性化を図ることを目的としたものである。

このうち芝山第2工業団地建設予定地内の台地上には、当初遺跡は存在しないとされていたが、工業団地建設に伴う地山掘削が開始された時点で、焼土を伴う遺構が検出されたため、昭和57年7月6日に工業団地建設予定地162,000㎡の範囲内における埋蔵文化財の所在有無について千葉県教育委員会に照会をした。

このため千葉県教育委員会は照会地の現地踏査を行なったところ、縄文時代に属する土器及び土師器の散布地を一か所確認するに至り、昭和57年7月28日付けで埋蔵文化財が所在する旨の回答をした。この埋蔵文化財の取り扱いについて千葉県教育委員会と協議したところ、建設計画を変更し、遺跡の現状保存をすることは難しいため、やむをえず記録保存の措置を講ずることに決定した。

記録保存にあたっては、当千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、千葉県教育委員会の指導により、千葉県企業庁との間に発掘調査の委託契約を締結し、調査を実施することとなった。調査対象面積は6,000㎡とされ、遺跡名は遺跡の立地する地番の字名を使用し、宝永作遺跡と命名された。

第2節 調査の経過と組織

1. 発掘調査

宝永作遺跡の発掘調査は昭和63年5月16日から同年11月30日の期間で行なわれた。本調査総面積は3,600㎡に及ぶ。

上層遺構確認調査

昭和63年5月16日～6月30日

上層遺構本調査

昭和63年7月1日～10月11日

下層遺構確認調査

昭和63年10月12日～11月11日

下層遺構本調査

昭和63年11月12日～11月30日

昭和63年度担当職員

調査部長 堀部 昭夫

部長補佐 古内 茂

班 長 矢戸 三男

主任調査研究専門員

斎木 勝

主任調査研究員

小久貫 隆史・西口 徹

調査研究員 石橋 宏克・渡辺 高弘

2. 整理作業

整理作業は平成2年6月1日から平成3年3月31日の期間で行なわれた。作業内容は遺物の水洗・注記から原稿執筆までである。

平成2年度担当職員

調査部長 堀部 昭夫

部長補佐 阪田 正一

班 長 藤崎 芳樹

技 師 落合 章雄

第3節 遺跡の環境

宝永作遺跡は千葉県山武郡芝山町大台字宝永作3155-1に所在する。

遺跡の所在する芝山町は千葉県東部に位置し、大栄町東部より栗源町、多古町、横芝町、光町を経て、九十九里浜にて太平洋に流入する栗山川の西岸に位置し、同じく太平洋に流入する木戸川と、栗山川の支流である高谷川に挟まれる。木戸川と高谷川との距離は、最も短い地点でわずかに2km程であり、台地は両河川の支流により複雑に開析される。現在の主要地方道成田・松尾線は、この両河川の分水嶺にあたる位置に建設されており、木戸川の左岸にかなり近接しているため、高谷川の支流による開析度が、木戸川のそれを上回っているといえるで



第1図 宝永作道跡位置図・周辺地形図

あろう。台地の標高はほぼ均一に44m前後を測る。

宝永作遺跡は芝山町のほぼ中央部の、高谷川の支流により開析された、東に向かって延びる舌状台地の北側に位置する。付近には数多くの遺跡が所在し、特に山田宝馬古墳群に代表される大小10余りの古墳群が木戸川東岸を中心とした台地上にみられる。国指定史跡である殿塚・姫塚が属する芝山古墳群は、行政区画を越えた横芝町に所在するが、同じ木戸川の東岸に位置するものであり、これらと一連の古墳群として考えられる。以下、時代をさかのぼり宝永作遺跡周辺に所在する遺跡をもとに若干の歴史的環境を考えてみたい。

縄文時代

早期縄文系土器の出土をみる遺跡は、高谷川流域の台地よりもむしろ木戸川流域に多く所在する。特に木戸川右岸、新井田付近より西に向かって伸びる小支谷の台地縁辺部に顕著にみられる。これに対峙する木戸川の左岸では、主要地方道成田・松尾線建設に先駆けて千葉県文化財センターが発掘調査を行なった、小池麻生遺跡に代表される遺跡群が所在するが、この期に属する遺物は出土しておらず、むしろ木戸川の左岸ではこれより上流に遺物の散布が見られる。ただし、木戸川流域は畑地が多いのに比べ、高谷川流域は山林が多いため、遺跡自体の存在が見逃されている可能性が大きく、宝永作遺跡の例の様に周知の遺跡として紹介されていない遺跡も多いであろう。

早期縄文系土器の分布は縄文系土器と比較すると、河川流域よりも内陸に移る傾向が見られ、特に高谷川右岸に侵入する支川により複雑に開析された舌状台地上、宝永作遺跡を中心とした近辺に所在しており、標高もかなり高い位置に移動しているのがわかる。

縄文前期繊維土器に関しても早期縄文系土器の分布と同様のことが言え、宝永作遺跡の北側、東に向かって伸びる舌状台地上に特に顕著にみられる。

中期の段階に入ると、上記の台地に加え、木戸川の左岸、小池麻生遺跡を中心としたかなり広範囲から遺物の出土がみられるようになり、また、木戸川、高谷川両河川を臨む台地上に多く見られる傾向があることも指摘できる。特に木戸川流域では『主要地方道成田・松尾線』の発掘調査報告書で紹介されているように、加曽利E式土器が多く出土しており、今後さらに資料の増加が予想される。

縄文後・晩期で特筆できるのは高谷川流域の低湿地である。第2章2節で詳細を述べるが、宝永作遺跡における遺物包含層の時期別遺物集中心地点についても、後期・晩期の遺物集中心地点は他の時期より標高の低い位置に移る傾向があり、縄文時代中期以後に、高谷川を中心とした低湿地に強く関係した何らかの生活基盤が生じたのではないかと思われる。高谷川のみならず栗山水系系の低湿地より出土している独木船の多いことから、おそらく漁撈に関係したものとと思われるが、この点は推測の域を越えられず、以後の発掘成果に期待したい。

古墳時代

芝山町における古墳時代の遺跡は、多くは6世紀後半から7世紀にかけての集落跡であり、木戸川左岸の台地上に多く分布している。5世紀段階での住居跡も確認されているが、集落の規模は不明であり、さらに5世紀以前の集落、あるいは遺構等に関する詳細は不明である。芝山町では前述したように大小10余りの古墳群が確認されているが、古墳群はやはり木戸川の左岸に集中しており、この時期に属する住居跡が検出している遺跡や、遺物の出土をみる周知の遺跡は古墳群を取り囲むような分布を呈している。

芝山町のはば中央部、木戸川左岸の台地上に広範囲に分布している山田・宝馬古墳群は、消滅した古墳を含め179基（前方後円墳11、円墳168）もの古墳が確認されており、分布範囲・古墳の基数などからも最大級のものである。山田・宝馬古墳群の位置する台地は、木戸川左岸に展開する台地の中でも最大の平坦面をもつものであり、おそらくこの広大な台地を基城として活用したものと思われる。

山田・宝馬古墳群より南、木戸川沿岸を下流に下ると、小池上人塚古墳、下ノ内古墳群、三田古墳群、船塚古墳群を経て、殿塚・姫塚を含む芝山古墳群に到達する。これらの古墳群は一連のものと考えられるが、高谷川の右岸、竜が塚付近から西に深く侵入する谷津により、在郷周辺で極端に台地が狭まる地点が見受けられる。この地点は山田・宝馬古墳群と小池上人塚古墳群との境界部分であり、地理的な要因のみの理由であるが、あるいは一連の古墳群の中でも単位が存在するのかもしれない。

奈良・平安時代

古墳時代に属する遺跡が古墳群の周辺に分布するのに比べ、奈良・平安時代の遺跡は高谷川方向に展開する傾向がみられ、各々の規模も矮小する感がある。だが、成田・松尾線建設に伴い調査された小池地藏遺跡、三田遺跡、宮門遺跡などは大規模の集落であり、おそらく古墳時代から継続する遺跡であると言ってもよからう。

小規模で点在する集落が、上記の大規模な集落とどのように結び付くのか、あるいは派生したものなのかは現時点ではわからないが、大規模集落と小規模集落の分布する様相からこの時期の様相として指摘できる。



第2図 宝永作遺跡周辺遺跡位置図

1:50,000 成田



連珠名	原 題 名	所 在 地	種 別					備 考
			漢文歌	漢文詩	漢文中	漢文雜	漢文俳、諧	
1	宮 中 連 珠	聖山阿六郎守室宅跡	○	○	○	○		
2	大 宮 連 珠	大宮大御所	○	○	○	○		
3	大 宮 御 所 連 珠	大宮御所					内儀6	
4	藤 原 野 宮 連 珠	大宮御所跡					内儀1	
5	八 倉 連 珠	八倉戸	○	○				
6	藤 原 連 珠	大宮御所跡 藤十若	○					
7	藤 原 連 珠	大宮跡		○		○		
8	内 膳 連 珠	大宮御所			○	○		
9	中 膳 連 珠	大宮御所				○		
10	高 倉 御 所 連 珠	大宮高御所跡						
11	光 善 連 珠	大善光寺	○			○		
12	藤 原 連 珠	大宮御所	○					
13	五 十 五 宮 連 珠	聖山五十宮					前方後円形、内儀	
14	藤 原 山 連 珠	聖山山崎山	○					
15	藤 原 山 連 珠	聖山山崎山	○					
16	藤 原 山 連 珠	聖山山崎山	○					
17	藤 原 山 連 珠	聖山山崎山	○					
18	大 宮 連 珠	聖山六郎	○	○	○	○		
19	新 連 珠	聖山守室	○					
20	上 野 皇 土 連 珠	聖山上皇土	○					
21	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○	○				
22	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
23	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
24	平 野 連 珠	聖山平野	○					
25	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
26	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
27	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
28	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
29	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
30	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
31	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
32	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
33	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
34	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
35	小 藤 皇 土 連 珠	聖山小藤皇土	○					
36	小 藤 皇 土 連 珠	聖山小藤皇土	○					
37	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
38	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
39	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
40	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
41	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
42	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○				前方後円形、内儀14	
43	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
44	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
45	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
46	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
47	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
48	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
49	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
50	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
51	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
52	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
53	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
54	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
55	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
56	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
57	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
58	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
59	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
60	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
61	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
62	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
63	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
64	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
65	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
66	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					

連珠名	原 題 名	所 在 地	種 別					備 考
			漢文歌	漢文詩	漢文中	漢文雜	漢文俳、諧	
67	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
68	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
69	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土	○					
70	小 藤 皇 土 連 珠	聖山小藤皇土					内儀8	
71	小 藤 皇 土 連 珠	聖山小藤皇土						
72	小 藤 皇 土 連 珠	聖山小藤皇土					内儀2	
73	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土						
74	藤 原 皇 土 連 珠	聖山皇土						
75	大 宮 連 珠	大宮御所						
76	大 宮 連 珠	大宮御所						
77	大 宮 連 珠	大宮御所						
78	大 宮 連 珠	大宮御所						
79	大 宮 連 珠	大宮御所						
80	大 宮 連 珠	大宮御所						
81	大 宮 連 珠	大宮御所						
82	大 宮 連 珠	大宮御所						
83	大 宮 連 珠	大宮御所						
84	大 宮 連 珠	大宮御所						
85	大 宮 連 珠	大宮御所						
86	大 宮 連 珠	大宮御所						
87	大 宮 連 珠	大宮御所						
88	大 宮 連 珠	大宮御所						
89	大 宮 連 珠	大宮御所						
90	大 宮 連 珠	大宮御所						
91	大 宮 連 珠	大宮御所						
92	大 宮 連 珠	大宮御所						
93	大 宮 連 珠	大宮御所						
94	大 宮 連 珠	大宮御所						
95	大 宮 連 珠	大宮御所						
96	大 宮 連 珠	大宮御所						
97	大 宮 連 珠	大宮御所						
98	大 宮 連 珠	大宮御所						
99	大 宮 連 珠	大宮御所						
100	大 宮 連 珠	大宮御所					前方後円形、内儀4	

第1表 宝永作遺跡周辺遺跡表

第1章 調査の方法と経過

第1節 層 序

宝永作遺跡は北に向かって伸びるやせ尾根状の台地に所在するため、調査区を南北に縦断する土層断面は、北に向い緩やかに傾斜しているような堆積状態を示す。

下総台地における立川ローム層の細分は、武蔵野台地の立川ローム層に対比し、現在のものに至っている。しかし、ローム層を形成する火山灰の供給源から距離をおくため、武蔵野台地のような良好な堆積状態を呈してなく、また、同じ下総台地の中でもその差は大きい。よってまだまだ武蔵野台地との比較、あるいは下総台地の中での遠隔地域相互の対比には検討を要する点が多々あり、特に鍵層となるATパミスを含む層から上部にかけての層序区分に問題が多い。

ひとまずこの点は保留とし、宝永作遺跡の層序区分及び各層について説明したいと思う。

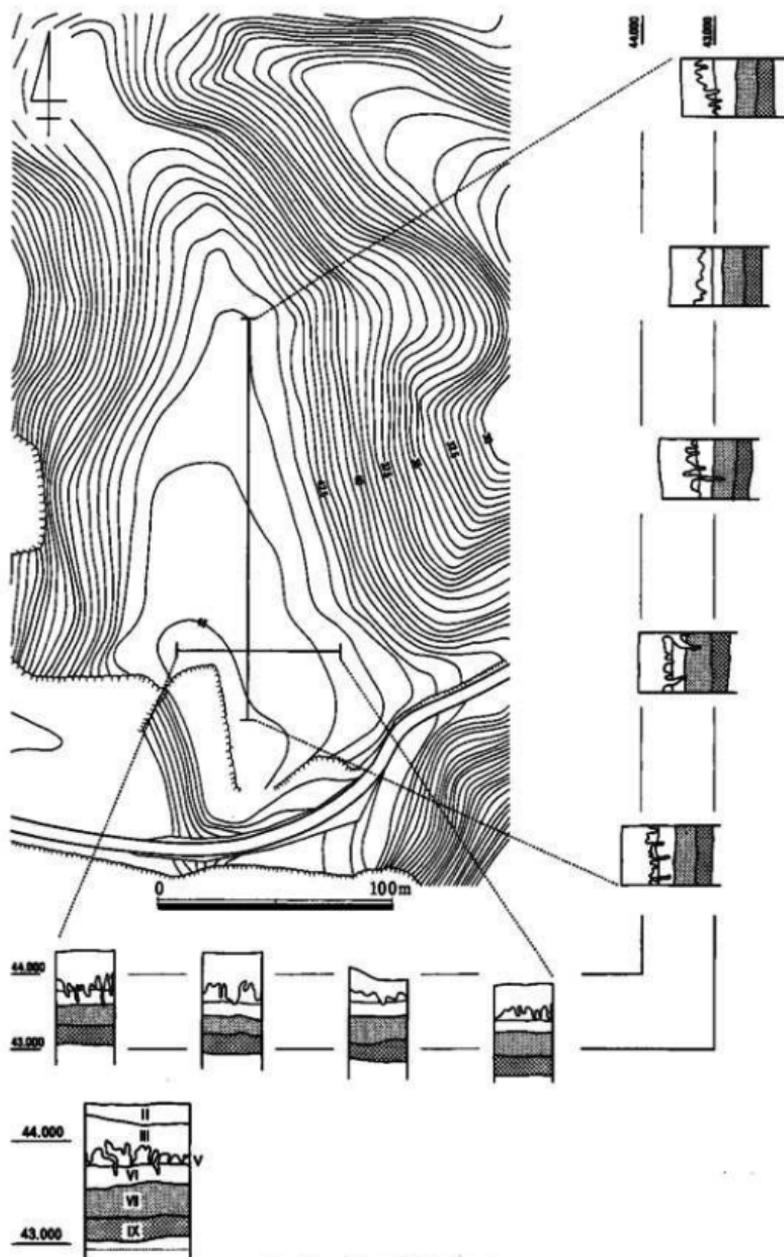
なお、下総台地における層序の呼称法で、第2黒色帯上部をVIIa層、下部をVIIc層とする例もみられるが、最近この層に所属する石器群の比較・検討資料が多く確認されており、結論を導き出せうる段階に入りつつあるため、本書では武蔵野台地の呼称法に則し、第2黒色帯上部をVII層、下部をIX層とする。

図3の土層柱状図は、宝永作遺跡調査範囲のうち、最も標高が高い3A-80グリッド付近の土層柱状図である。

各層の特徴は柱状図横に記したとおりであるが、調査時の土層観察によるとソフトローム層下部より第2黒色帯までを2枚の層とし、ATパミスを含む層(VI層)としている。土層写真を見ると上部は下部に比べやや暗色を呈する。下総台地のVI層に含まれるATパミスは、相模野・武蔵野両台地にみられるようにブロック状に列を成して含まれておらず、拡散して含まれているのが通常である。よってこの2枚の層については、上部を拡散したATパミスを若干含むV層(第1黒色帯)、下部を所謂本来のATパミスを含む層であるVI層として考えるのが妥当と思われる。

また、第2黒色帯を上部・下部の2枚に分層可能なことは先に述べたが、この2枚の層の間にブロック状、もしくは完全に1枚層が入るのが通常である。しかし、土層断面図にはこの間層帯に該当するものはみられず、写真を見た限りでも同様である。下総台地でも立川ローム層の堆積が薄い地域では同様のことがいえ、第2黒色帯より検出される資料が増加している現在では検討を要するところである。

今回の調査では、第2黒色帯の下部に存在する粘土の混在した層で掘削を終了している。下総台地では第2黒色帯の下部、あるいは第2黒色帯の下面を確認できる前に、この青灰色の層



第3图 宝永作遺跡土層柱状图

が検出されることが多く、比較的立川ローム層の堆積の厚い中心部から西にかけての地域でも台地縁辺部ではソフトローム層の直下から検出される。同一の台地でこの青灰色層の上面の標高を計測すると、ほぼ同一の標高になり、風成層というよりは水成層に近い堆積状態を示すといえる。緩斜面に立地する遺跡の先土器時代の調査の際、緩斜面に平行する方向の土層断面に於て、斜面なりに傾斜している第2黒色帯が、この青灰色の層に入り込むように消えていく状態が確認されている例も少なくない。また、この青灰色層よりIX層段階の遺物も出土している例も見受けられる。

この層に対しては様々な見解があるが、ローム層の下部に存在する所謂常総粘土層の影響である。という見解が一番有力であろう。一般にローム層のグライ化等といわれているものである。よって下総台地において 層段階の資料が増加しつつある今日では、ただ単に色調による分層を行なうのではなく、上方あるいは下方に位置する層との相関関係をも念頭に置かなければならない。

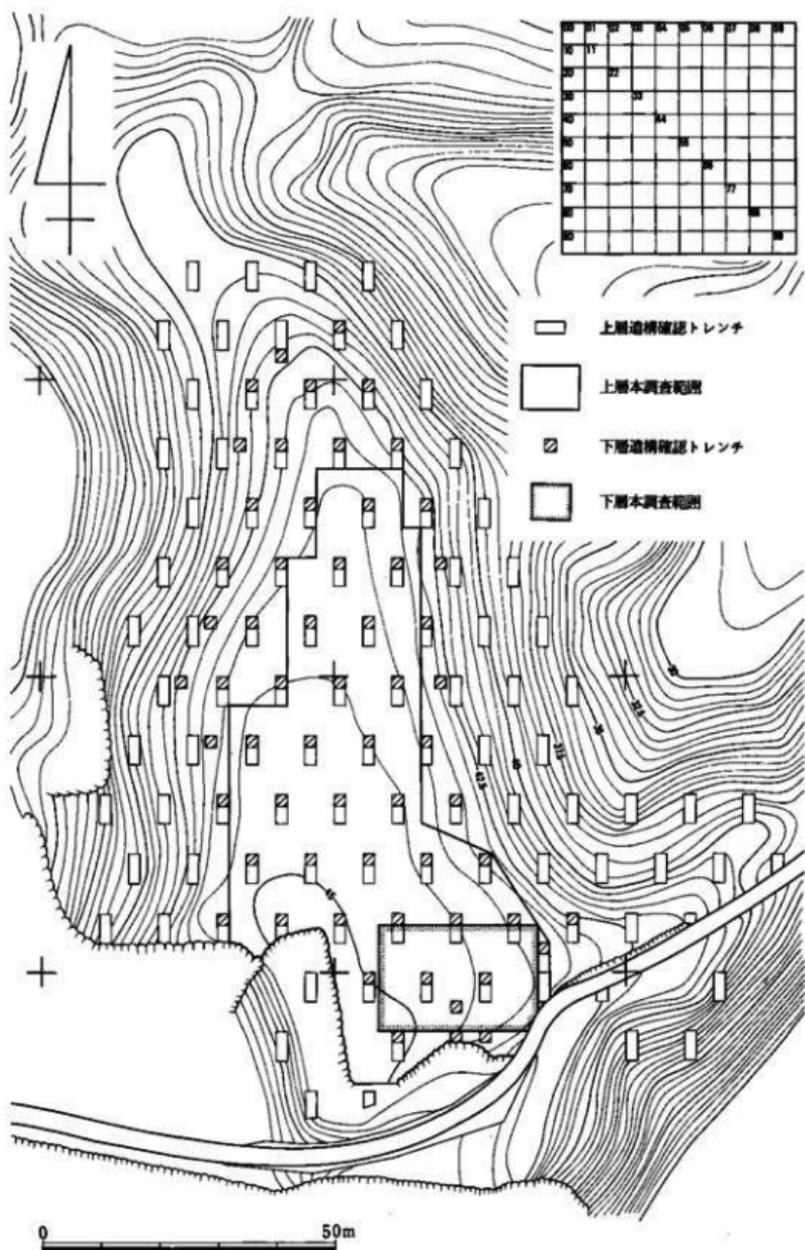
第2節 概 要

今回の発掘調査の対象となったのは、芝山第2工業団地建設予定地の南西に位置する台地の、南北方向150m、東西方向100mにわたる部分である。このうち標高38m以上の6,000㎡について調査を実施した。

調査の方法はグリッド方式とし、発掘調査に先行して公共座標を基に、遺跡の所在する台地全体を覆うように大グリッド50m×50mを設定した。グリッド名称は、北西を基準に東へA・B・C、南へ1・2・3・4とした。さらに大グリッドを5m×5mの小グリッドに分割し、北西を00とし、東に向かい01・02・03・・・99とした。よってグリッドの呼称方は1A-00、4C-99等となる。

調査はまず調査対象地に対して小グリッド毎に5m×2mのトレンチを設定し、上層遺構の有無を確認するため、遺構確認面までの人力による掘削を行なった。この結果新期テフラ上部より小型の環形土器の集中地点が2か所、および縄文時代早期・前期の遺物包含層が確認された。また焼土を伴う遺構が複数検出し、縄文時代早期から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物の存在が明らかとなった。このため発掘調査範囲6,000㎡のうち3,100㎡を上層遺構本調査範囲とし、台地の平端部ほぼ全域の、標高43m以上が調査対象となった。この範囲の表土層を重機により除去し調査を開始した。遺構番号は遺構の性格に応じて分類し、検出した順に001からの番号付けを行なった。

上層遺構の調査が終了した後、引き続き下層遺構の確認調査へ移行した。



第4図 宝永作遺跡確認・本調査範囲及びグリッド配置図

下層遺構の確認グリッドは、上層遺構確認調査のトレンチ北側の2m×2mの範囲に設定され、掘削深度は立川ローム層を完掘し、武蔵野ローム層の上面を確認するまでの深さを目安とした。

下層遺構の確認調査の結果、調査区南側の3か所のグリッドで、VI層付近から石器の出土がみられた。よって遺物の出土した3か所のグリッドを中心に、500㎡の範囲を下層遺構本調査の対象とした。

出土した遺物は1点づつ番号付けを行なったが、小グリッド単位内の続き番号ではなく、そのブロック内での続き番号で付けることとした。またブロックの命名は、検出された順にブレ1、ブレ2とし、最終的には2か所の石器単独出土地点と、8か所の石器集中地点が確認された。

11月後半に入り調査終了実際になった時点で不順な天候が続いたものの、調査は順調に進捗し、写真撮影、遺物取り上げを終了、11月30日には発掘機材を撤収し、予定通り調査を終了した。

最終的に検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

先土器時代

石器集中地点（VI層）

8地点

石器単独出土地点（VI層）

2地点

総計 540点

縄文時代

炉穴（早期）

14基

陥穴状遺構

8基

遺物包含層（早期～後期）

土器・石器

奈良・平安時代

祭祀遺構

2地点



第5図 宝永作遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 先土器時代

宝永作遺跡では、8ヶ所の石器集中地点と2ヶ所の石器単独出土地点が検出された。分布層位は10ヶ所とも同一で、VI層下部を中心にV層からVII層上部にかけて分布している。

8ヶ所の石器集中地点は、プレ4を中心とし、弧状に巡るような平面分布をみせている。調査区南西が工業団地造成のために削平されており、弧状に巡る石器集中地点の一部をかすめているため、環状に巡っている可能性も考えられる。そうなると直径20m前後の環状に石器集中地点が分布することとなり、平面分布のみに着目した場合、最近南関東で事例の増加しているIX層段階での一様相である環状ブロック群に非常に類似している。石器集中地点の属する層は先に述べたとおりVI層と考えられ、各石器集中地点とも同様である。また附図1にみられるように、各石器集中地点相互に接合関係も確認できる。IX層段階からのつながりは現時点では全くないと考えられるが、IX層段階以外の文化層で、こうした同一時期に形成されたと思われる石器集中地点が、環状に巡るような分布状況を呈していることは、先土器時代の生活様式を知ろうと貴重な資料となろう。

本文中のプレ5・プレ8は、調査時には同一のブロックとされていたが、遺物整理時に分割した。よってプレ8の遺物番号はプレ5の続き番号となっている。プレ5、プレ8をそれぞれ構成する石器の遺物番号は次のとおりである。

	プレ5	プレ8
調整痕ある割片	11, 13, 31, 167, 196,	66, 166,
折断割片	6, 41, 106,	59, 62, 65, 90, 136,
割片利用石核		109,
割片	1, 3, 5, 8, 10, 16, 17, 18, 19, 29, 45, 48, 51, 93, 96, 105, 112, 137, 188,	52, 67, 70, 74, 87, 89, 92, 93, 102, 129, 132, 138, 143, 144, 150, 151, 156, 157, 163, 175, 190, 191,
砕片	2, 4, 7, 12, 14, 15, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 30, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 42, 43, 44, 45, 47, 49, 50, 54, 95, 97, 98, 99, 100, 107, 110, 111, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 125, 160, 168, 169, 182, 183, 189, 192, 193, 194, 196, 197,	53, 54, 55, 57, 58, 59, 60, 61, 64, 66, 69, 71, 72, 73, 75, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 84, 85, 86, 88, 91, 101, 103, 104, 108, 126, 128, 130, 133, 134, 135, 136, 139, 140, 142, 145, 146, 147, 148, 149, 152, 153, 155, 158, 159, 161, 162, 164, 166, 170, 171, 172, 173, 174, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 384, 185, 186, 187,

第2表 プレ5・8遺物番号表

宝永作遺跡から出土している石器の石材は黒曜石で大半を占め、他には流紋岩、頁岩、珪質頁岩などがある。黒曜石に関しては数個体あるものと思われるが、石質の特徴は全て同じであり、個体別に分類は不可能である。他の石材に関しては石器の点数が少なく、また石質も同一であるため、各々1個体であると思われる。以下に各石材の石質を表記する。

黒曜石：半透明の黒色を呈し、節理はあまりみられないが、色調の濃淡が縞模様に見える。

0.5mm以下の狭雑物を含むが、それほど多く含むとは思えない程度のものである。原石面は敲打されたような細かい凹凸が一面にみられ、露頭から採取されたものではなく、河原石であると思われる。

流紋岩：薄いクリーム色を呈し、黒い微細な斑点状のものが無数にみられる。質感に反し、持った感じが重い。剥離面は光沢はないがすべすべしている。拳大の大きさの原石と思われる。

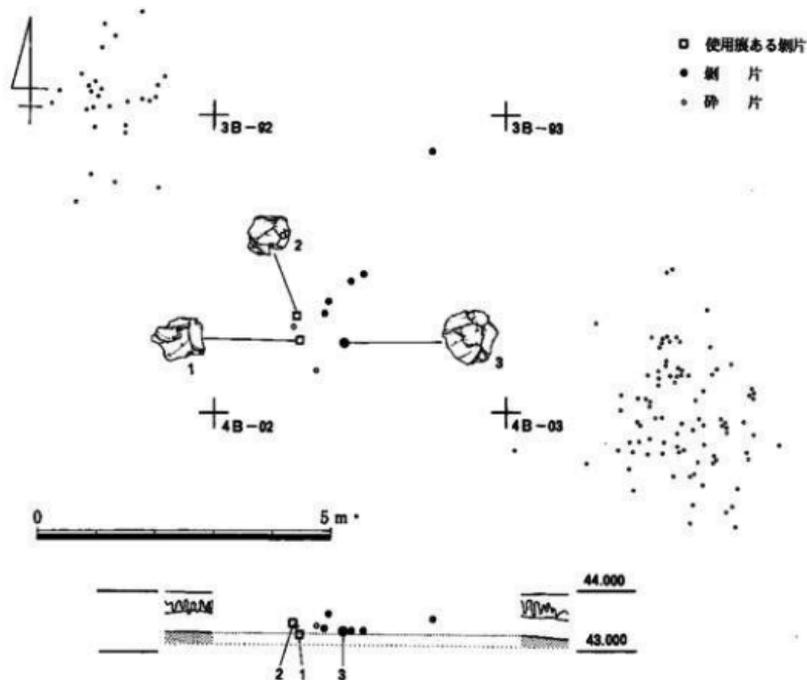
頁岩：原石面は黄土色、剥離面はこげ茶色を呈する。狭雑物はほとんどみられない。剥離面は光沢はないがすべすべしている。数量的に少ないため原石の大きさははっきりしないが、それほど大きくはないものと思われる。

珩質頁岩：色調は薄い緑色を呈し、一部白色を呈する部分もみられる。剥離面は光沢があり、すべすべしている。

メノウ：半透明のオレンジ色、あるいは乳白色を呈する。

砂岩：石材を構成する粒子の大きさは細かく、硬質である。原石面はすべすべしている。

石英斑岩：被熱しているため表面は赤黒い。硬質で、原石面はすべすべしている。



第6図 プレ1遺物分布図

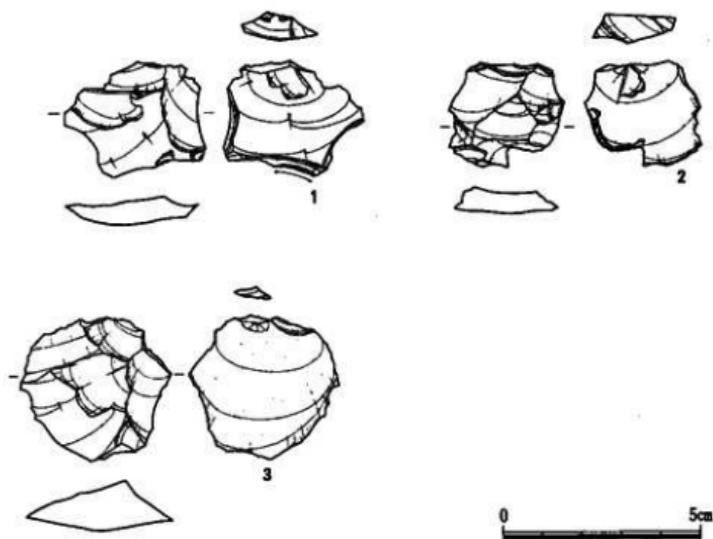
プレ1 (第6・7図, 第3表, 図版2・5)

石器集中地点としては、他のものと比べ小規模なものであり、長径5m、短径1.5mの範囲に分布している。石器の出土点数は11点で、黒曜石と珪質頁岩で占められる。定型的な石器はなく、使用痕の認められる剥片2点の他は、剥片、砕片である。

遺物

1・2は使用痕の認められる剥片である。1は黒曜石製で幅広い剥片の末端部に微細な使用痕がみられる。2は珪質頁岩製で、やはり剥片末端部の主要剥離面側に微細な使用痕がみられる。

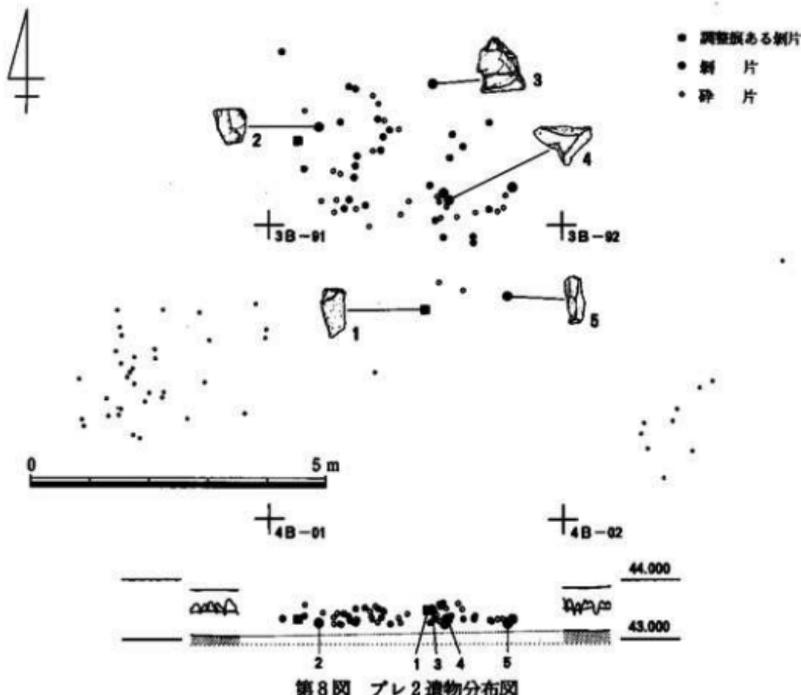
3は珪質頁岩製の剥片である。表面にみられる剥離は全て同一方向であり、単一打面に打撃を加え作出された剥片であろう。



第7図 プレ1出土遺物実測図

押図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
7図1	プレ1, 8	使用痕ある剥片	黒曜石	2.85	3.55	0.7	7.15	末端部に使用痕
7図1	プレ1, 10	使用痕ある剥片	珪質頁岩	2.7	3.0	0.9	5.93	末端部に使用痕
7図3	プレ1, 6	剥片	珪質頁岩	3.6	3.8	1.5	18.24	

第3表 プレ1出土石器表



第8図 プレ2 遺物分布図

図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
9図1	プレ2, 52	調整痕ある剥片	黒曜石	3.4	1.6	1.3	5.17	
9図2	プレ2, 35	剥片	黒曜石	2.5	2.2	0.8	5.37	
9図3	プレ2, 62	剥片	黒曜石	3.9	3.0	0.7	9.15	
9図4	プレ2, 20	剥片	頁岩	2.8	3.9	5.5	4.37	
9図6	プレ2, 56	剥片	頁岩	3.3	1.2	0.6	2.98	
9図6	プレ2, 7	剥片	流紋岩	2.7	4.0	1.2	11.70	
	プレ2, 65	砕片	流紋岩				0.89	
	プレ2, 34	調整痕ある剥片	流紋岩	3.2	3.1	1.2	8.55	

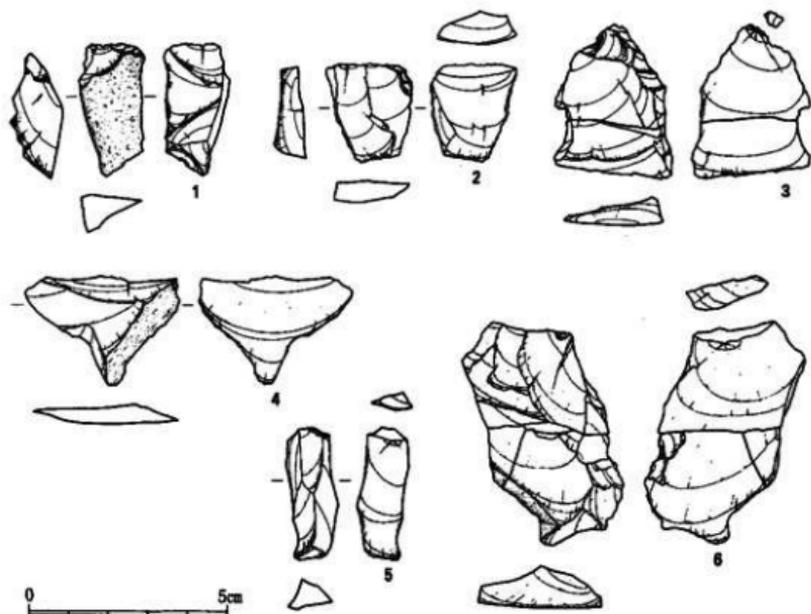
第4表 プレ2 出土石器表

プレ2 (第8・9図, 第4表, 図版2・5)

黒曜石を主体とし, 他には砂岩, 珪質頁岩, 流紋岩等で構成される。長径6m, 短径5mの範囲に分布している。プレ1と同様に定型的な石器を含まず, 調整痕の認められる剥片が2点出土するのみで, 他は剥片, 砕片のみである。

遺物

1は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。側縁部を折断し, 表面側より粗い調整が施

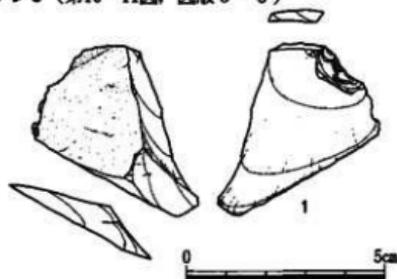


第9図 プレ2出土遺物実測図

されている。原石面を残す。

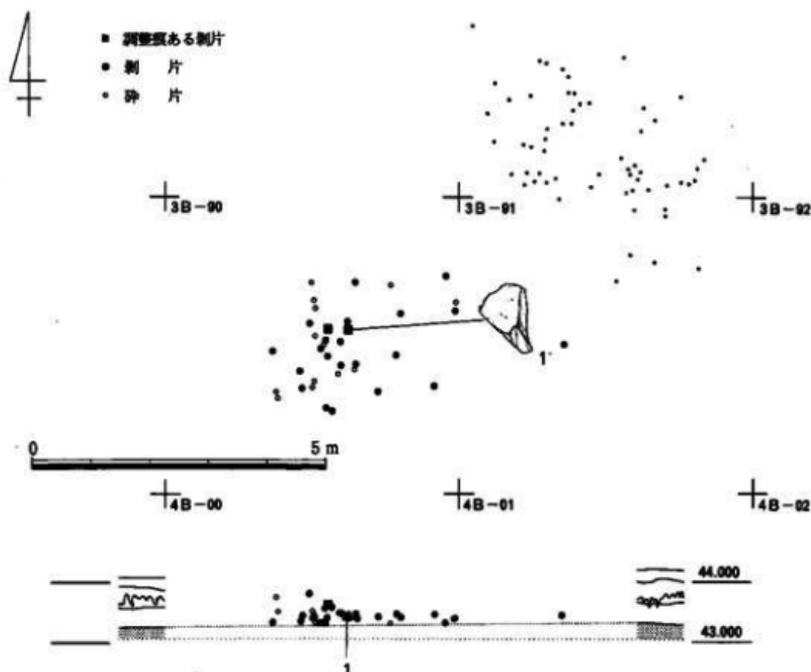
2～6は剥片である。2は黒曜石製の剥片の側縁および打面側を折断している。3も2と同様に黒曜石製の剥片を折断している。4は頁岩製であり、打面側を折断している。原石面を残す。5は頁岩製の縦長剥片であるが、表面にみられる剝離は一定方向ではなく、石刃技法によるものではない。6は流紋岩製の大型剥片を折断し、末端部側に調整を加えている。主にプレ3ブロックに属している流紋岩製の接合資料と同一の石材である。

プレ3 (第10・11図, 図版3・5)



第10図 プレ3出土遺物実測図

黒曜石、流紋岩を主体とし、第24・25図の流紋岩の接合資料のほとんどの石器はこのブロックに属している。分布範囲は長径5m、短径3m程であり、定型的な石器はなく、調整痕の認められる剥片が2点出土している以外はすべて剥片、碎片である。



第11図 プレ3遺物分布図

遺物

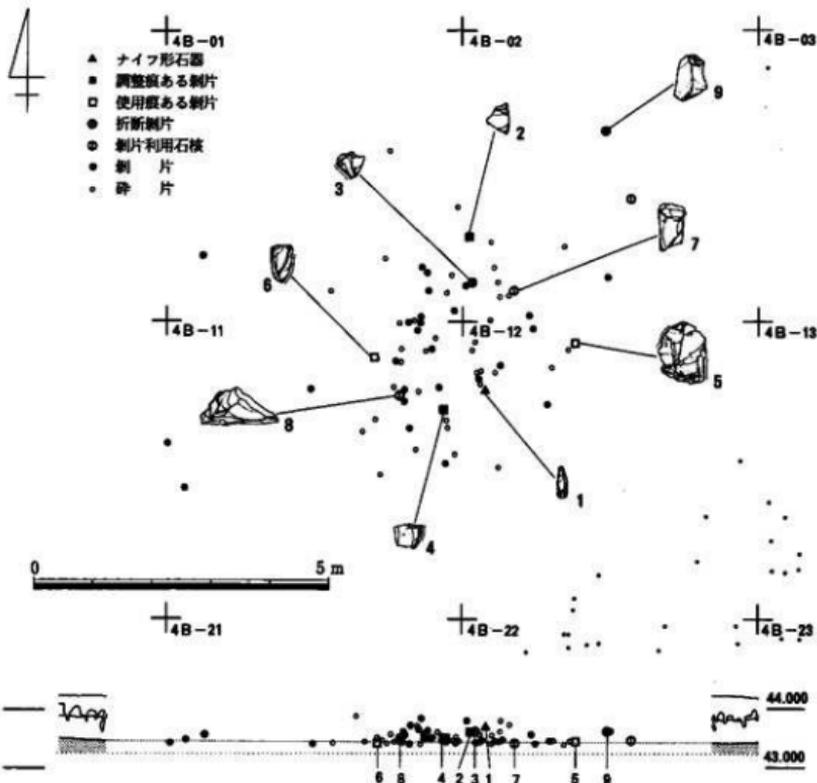
1は頁岩製の調整痕の認められる剥片である。原石面を有し、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片であろう。末端部側を折断している。主要剥離面に刃部作出の調整が施されている。長さ4.8cm、幅3.3cm、厚み0.9cm、重量12.94gを測る。

プレ4 (第12・13図, 第5表, 図版3・6)

長径10m、短径6mの範囲で石器が分布し、弧状に巡るブロック群の中心に位置する。他のブロックと比べて散漫な分布状態を示す。石器の石材は黒曜石が大半を占め、珪質頁岩、メノウなどが混在する。数量的に少ないが、流紋岩が混在し、プレ3との接合関係が確認された。石器の器種は多様であり、珪質頁岩製のナイフ形石器が1点出土する他、調整痕の認められる剥片、使用痕の認められる剥片、折断剥片、剥片利用石核などがみられる。

遺物

1は珪質頁岩製のナイフ形石器である。小型の剥片を素材とし、片側縁にブランディングが



第12図 プレ4 遺物分布図

調査番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
13図 1	ブレ4, 23	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.1	0.7	0.5	0.82	
13図 2	ブレ4, 12	調整痕ある割片	黒曜石	2.0	2.0	0.8	3.15	
13図 3	ブレ4, 40	調整痕ある割片	黒曜石	1.8	2.0	0.8	1.77	
13図 4	ブレ4, 28	調整痕ある割片	黒曜石	1.7	2.0	0.5	1.58	
13図 5	ブレ4, 4	使用痕ある割片	黒曜石	4.3	3.6	0.9	11.66	
13図 6	ブレ4, 61	使用痕ある割片	黒曜石	2.55	1.5	0.6	2.41	
13図 7	ブレ4, 66	割片利用石核	黒曜石	3.3	1.9	1.1	7.41	
13図 8	ブレ4, 46	割片利用石核	頁岩	2.7	4.5	3.0	21.06	
13図 9	ブレ4, 1	割片	珪質頁岩	3.1	2.3	0.5	3.73	
13図 10	ブレ6, 20	割片	珪質頁岩	2.0	4.5	1.9	10.11	
	ブレ4, 48	割片	珪質頁岩	3.06	2.6	0.86	4.43	
13図 11	ブレ4, 5	割片	黒曜石				0.28	
	ブレ4, 16	調整痕ある割片	黒曜石	3.9	1.2	0.3	2.83	

第5表 プレ4 出土石器表



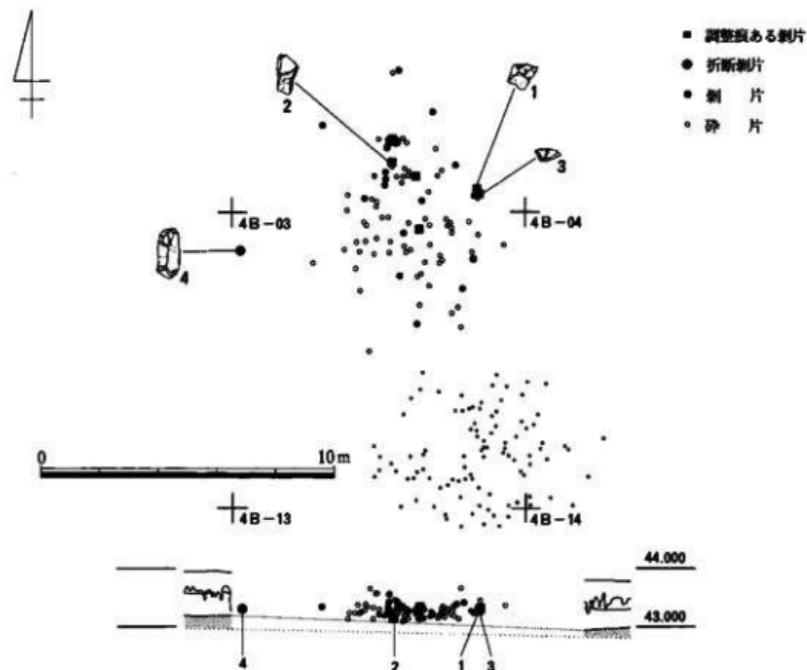
第13図 プレ4 出土遺物実測図

施される。

2～4は調整痕の認められる剥片である。いずれも黒曜石製のもので、2は剥片の打面側と末端部側を折断し、末端部側の折断面を打面として調整が加えられている。3は剥片の打面側が折断され、また、側縁部に微細な調整を施すものである。4は剥片の打面側を折断し、折断面より数回調整を加えている。打面がほとんど残っていないが、剥片剥離時に消失したものであり、剥片が作出された後に調整により除去されたものではない。6は剥片の片側縁に使用痕が認められる。

7・8は剥片利用石核である。7は黒曜石製で、剥片の打面側と末端部側を折断し、側縁部より剥片を作出しているものである。8は頁岩製の大型の剥片を利用し、剥片の主要剥離面を打面とし、剥片を作出しているものである。

9～11は剥片である。9は珪質頁岩製で、表面にみられる剥離から、単一打面より連続して剥片が作出されていることが窺える。10は珪質頁岩製の剥片が接合している。両剥片の打点は離れているが、打面は同一である。11は黒曜石製の剥片が接合しているものである。おそらく剥片利用石核より作出されたものであろう。



第14図 プレ5遺物分布図

ブレ5 (第14・15図, 第6表, 図版3・6)

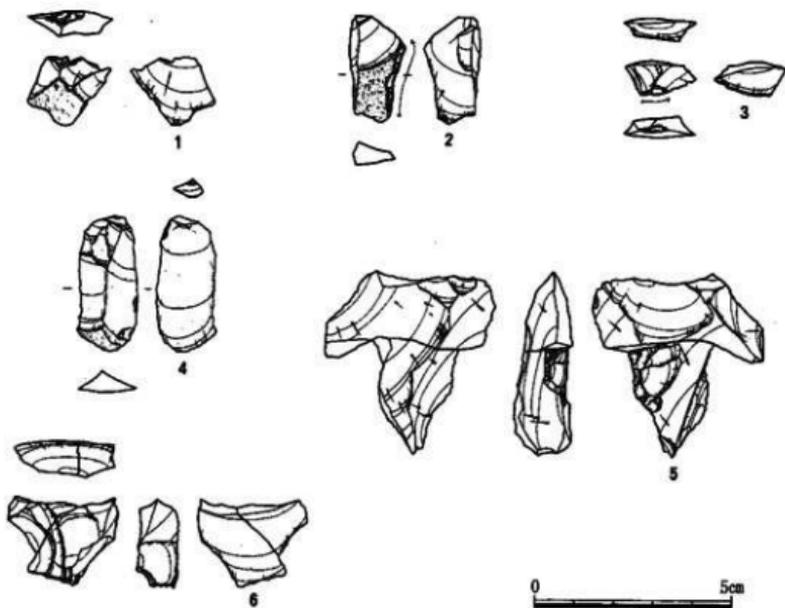
径5mの範囲に分布し、黒曜石が石器の石材の大半を占め、他に珪質頁岩、頁岩、メノウが混入する。石器の器種は調整痕の認められる剥片が数点出土するが、定型的な石器はみられない。

遺物

1～3は調整痕の認められる剥片である。いずれも黒曜石製で、1は剥片作出後に打面を除去する調整が加えられている。2は剥片の片側縁に微細な調整が施される。一方の側縁は折断面ではなく、剥片作出の際に打点より分離した痕跡である。3は折断された剥片の末端部に微細な調整が施されるものである。

4は珪質頁岩製の剥片である。表面の剥離は全て一定方向であり、同一の打面より連続して剥片を作出しているのが窺える。しかし、石刃技法によるものと端的に結び付けるのは疑問が残る。

5・6は剥片利用石核である。5は黒曜石製で、剥片の側縁部と末端部を折断し、剥片剥離を行なっている。実測図主要剥離面側にみられる細かい剥離痕は調整ではなく、頭部調整痕であろう。6は珪質頁岩製で、5と同様に剥片を折断し、主要剥離面を打面として小型の剥片を作出している。接合面は剥片剥離時に分割したものである。



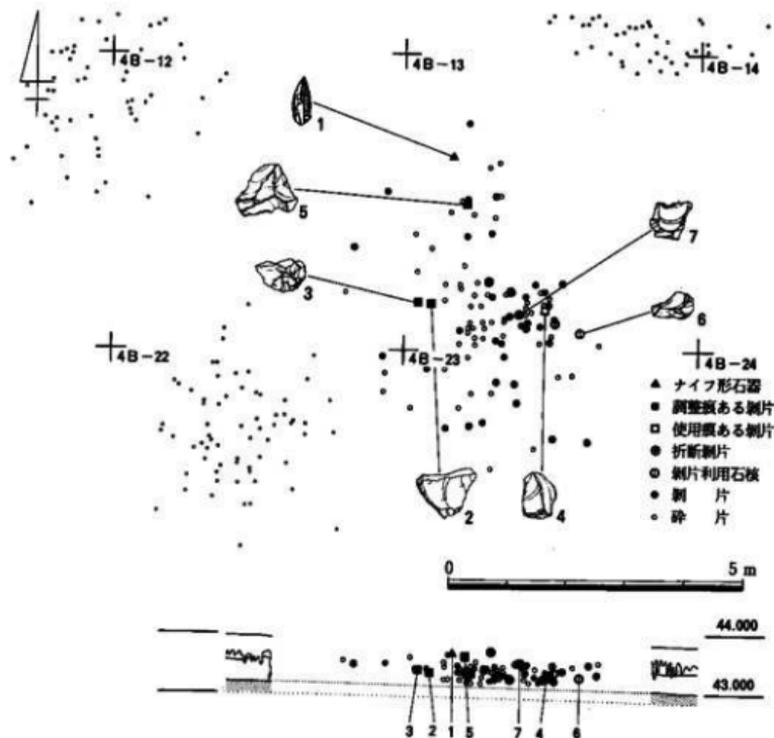
第15図 ブレ5出土遺物実測図

図号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
15図 1	ブレ5.11	調整痕ある製片	黒曜石	1.8	1.7	0.5	1.52	
15図 2	ブレ5.167	調整痕ある製片	黒曜石	2.7	1.5	0.6	2.01	
15図 3	ブレ5.106	調整痕ある製片	黒曜石	0.9	1.8	0.5	0.69	
15図 4	UN-1.3	製片	珪質頁岩	3.3	1.6	0.6	3.34	
15図 5	ブレ5.31	製片利用石核	黒曜石	2.3	4.3	1.3	9.72	
	ブレ5.13			2.9	2.8	1.3	7.85	
15図 6	ブレ5.5	製片利用石核	珪質頁岩	1.5	1.7	0.8	1.40	
	ブレ5.196			2.9	1.56	1.06	4.35	

第6表 ブレ5出土石器表

ブレ6 (第16・17図, 第7表, 図版4・7)

長径6m, 短径4mの範囲に分布し, 黒曜石, 珪質頁岩によって構成され, 黒曜石が大半を占める。珪質頁岩製のナイフ形石器が1点出土している。



第16図 ブレ6遺物分布図

遺物

1は頁岩製のナイフ形石器である。横長の剥片を素材とし、打面部と末端部に調整を加え製品としている。

2・3は調整痕の認められる剥片で、いずれも黒曜石製である。2は剥片の打面側を折断除去し、片側縁に微細な調整を加えたものである。3は打面側を折断ではなく調整で除去し、末端部から側縁にかけて、主要剥離面側より調整を加えたものである。

4・5は黒曜石製の使用痕の認められる剥片である。4は剥片の片側縁に使用痕がみられ、他の部位には調整、使用痕はみられない。5は剥片の末端部に使用痕が確認できる。

6は黒曜石製の剥片利用石核である。剥片を折断し、折断面を打面として小型の剥片を作出している。

7・8は珪質頁岩製の剥片である。7・8ともに表面の剥離は一定方向であり、単一打面から連続して作出されたものであろう。だが、所謂石刃技法であるかどうかは定かではない。

探検番号	遺物番号	器 種	石 材	計 測 値				備 考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
17区 1	ブレ6. 2	ナイフ形石器	頁 岩	3.3	1.25	0.8	2.85	
17区 2	ブレ6. 15	調整痕ある剥片	黒 曜 石	3.2	4.1	0.9	9.88	
17区 3	ブレ6. 14	調整痕ある剥片	黒 曜 石	2.3	3.4	1.2	7.74	
17区 4	ブレ6. 93	使用痕ある剥片	黒 曜 石	3.2	2.7	0.8	5.58	
17区 5	ブレ6. 5	使用痕ある剥片	黒 曜 石	3.35	4.2	0.9	10.76	
17区 6	ブレ6. 84	剥片利用石核	黒 曜 石	1.9	2.8	1.4	5.52	
17区 7	ブレ6. 26	剥片	珪質頁岩	2.5	2.8	0.3	2.69	
17区 8	ブレ6. 81	剥片	珪質頁岩	3.2	1.2	0.3	1.42	
	ブレ7. 48	剥片	珪質頁岩	3.1	1.5	0.6	3.01	

第7表 ブレ6出土石器

ブレ7 (第18・19図, 第8表, 図版4・7)

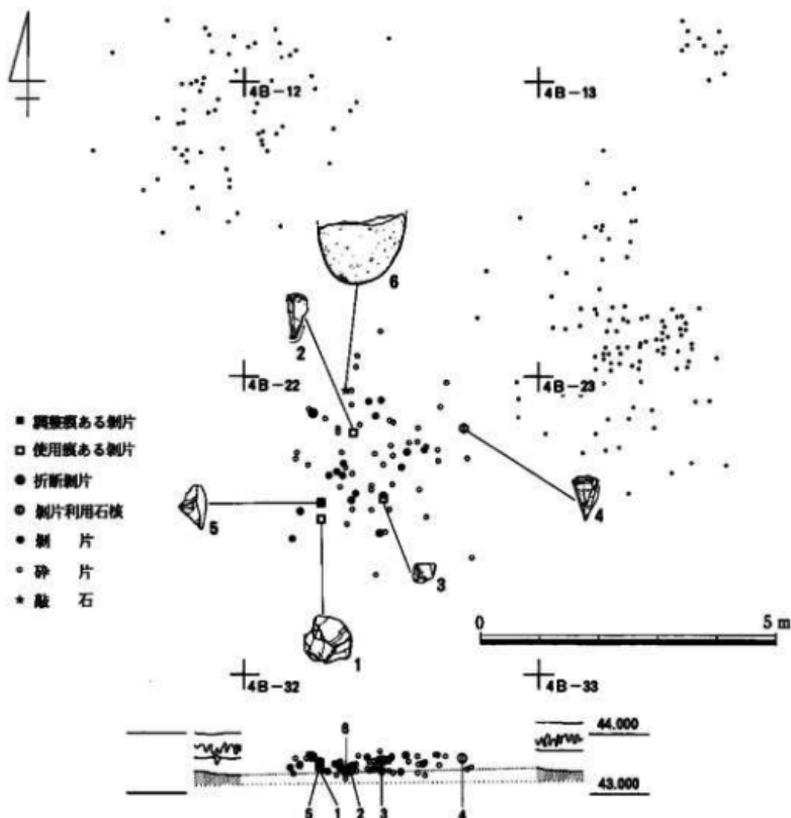
径4mの範囲に分布し、黒曜石が石材の大半を占める。調整痕の認められる剥片、使用痕の認められる剥片が数点出土している。また当遺跡のブロック群の中で唯一石英斑岩製の敲石が出土する。

遺物

1～3は使用痕の認められる剥片である。石材はいずれも黒曜石である。1は剥片の側縁部に使用痕が認められる。残存する打面の剥離の様子から、剥片剥離時に打面再生が頻繁に行なわれていたことが推測できる。2は剥片の末端部から側縁部にかけて使用痕が認められる。打面が残存するが、1のように打面再生の痕跡は認められない。3は小型の剥片の打面に使用痕が認められる。4は黒曜石製の剥片利用石核である。大型剥片が作出された時点の打面を利用し、打面再生と剥片作出を繰り返していることが窺える。5は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。剥片の側縁部と末端部を折断し、主要剥離面側より調整が施される。6は石英斑



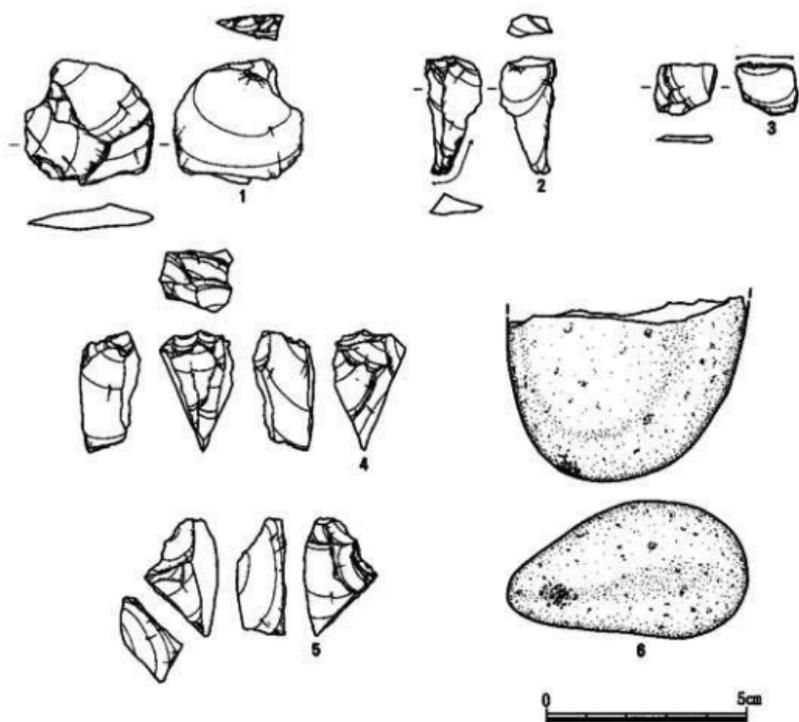
第17図 プレ6 出土遺物実測図



第18図 ブレ7 遺物分布図

探検番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	
19図 1	ブレ7. 45	使用痕ある割片	黒曜石	3.2	3.3	0.8	7.57	片側縁に使用痕
19図 2	ブレ7. 6	使用痕ある割片	黒曜石	3.0	1.4	0.7	2.18	末端部に使用痕
19図 3	ブレ7. 32	使用痕ある割片	黒曜石	1.8	1.4	0.2	0.49	打面部に使用痕
19図 4	ブレ7. 17	割片利用石核	黒曜石	3.0	1.7	1.5	6.97	
19図 5	ブレ7. 44	調整痕ある割片	黒曜石	2.8	2.0	1.1	4.78	
19図 6	ブレ7. 3	敲石	石英斑岩	4.5	6.1	3.6	122	

第8表 ブレ7 出土石器表



第19図 プレ7出土遺物実測図

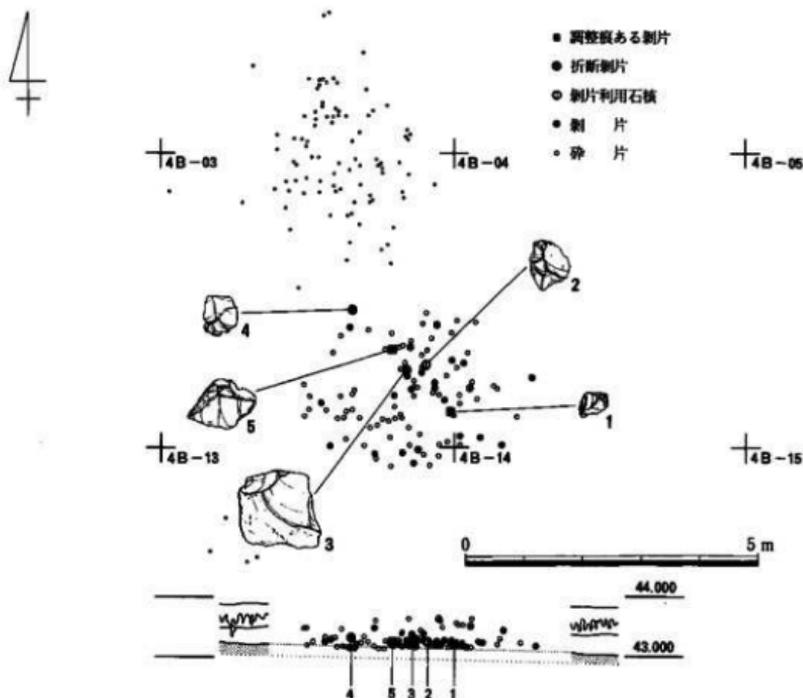
岩の槽円礫を利用した敲石である。表面は被熱しているものと思われ、赤色を呈する。微細ではあるが敲打痕が確認できる。

プレ8 (第20・21図, 第9表, 図版3・8)

長径4m, 短径3mの範囲に分布し、黒曜石が大半を占める。他には珪質頁岩, 頁岩, メノウなどが混在する。石器の器種は調整痕の認められる剥片, 剥片利用石核等がみられるが, 典型的な石器は出土していない。

遺物

1・5は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。1は両側縁に微細な調整痕がみられ, 削器的な使用目的で調整を施されたものと思われる。調整を施す前に打面側を折断している。5は剥片の末端部と側縁部を折断し, 打面を除去するように粗い調整を加えている。あるいは剥片利用石核となる可能性もある。



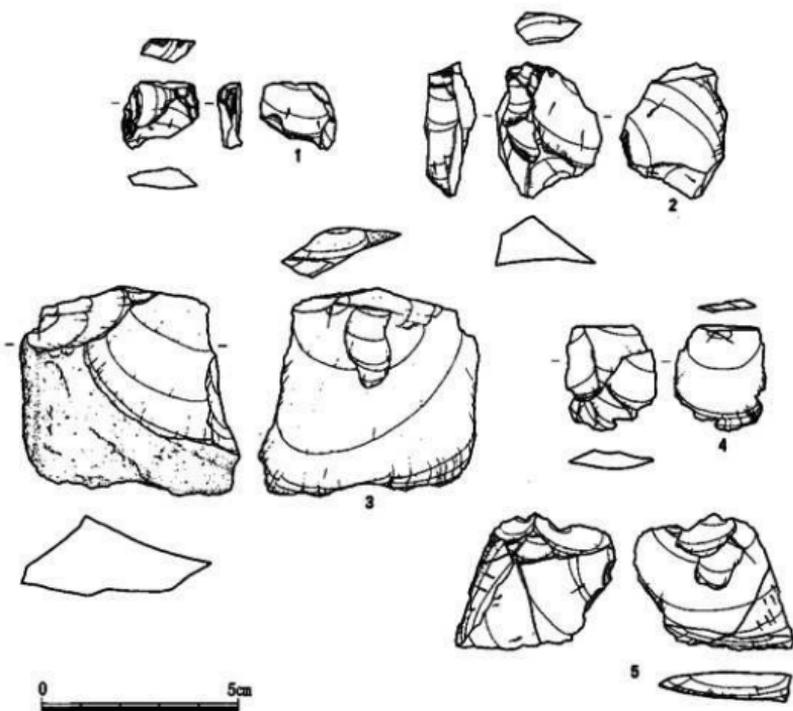
第20図 プレ8 遺跡分布図

検出番号	遺物番号	器 種	石 材	計 測 値				備 考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	
21図 1	プレ5, 166	調整痕ある剥片	黒曜石	1.8	1.9	0.5	1.93	側縁部に微細な調整痕
21図 2	プレ5, 109	剥片利用石核	黒曜石	2.7	3.5	1.3	8.87	
21図 3	プレ5, 129	剥片	頁岩	5.2	5.8	2.0	45.34	原石面残る
21図 4	プレ5, 62	剥片	綠頁岩	2.7	2.3	0.5	3.18	
21図 5	プレ5, 66	調整痕ある剥片	黒曜石	3.6	3.9	1.3	14.97	打面除去

第9表 プレ8出土石器表

2は黒曜石製の剥片利用石核である。剥片の末端部及び片側縁を折断し、折断面を打面として数回剥片剥離を行なっている。

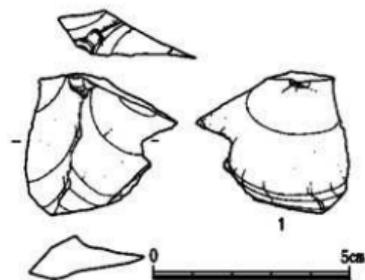
3は頁岩製の大型の剥片である。打面部と石器表面に原石面を留めている。剥片剥離工程初期の段階に作出された剥片であろう。石器表面にみられる剥離は90°交差しており、剥片剥離工程初期の段階では複数の打面が設定され、石核整形を目的としたのであろうか、数回の剥片作出を行なっているのが窺える。また、打面の様子から打面再生も行なわれていたことが判断



第21図 ブレ8 出土遺物実測図

できる。4は珪質頁岩製の剥片である。表面にみられる剥離はすべて同一の方向である。

ブレ9・10 (第22・23図, 図版8)



第22図 ブレ9・10出土遺物実測図

ブレ9・10は石器が単独で出土しており、ブロックを形成していないが、石材等でのブロックと共通性がみられるため、敢えてここではブロックとして扱った。

ブレ9は黒曜石製の碎片、ブレ10は頁岩製の剥片が出土しており、おそらくブレ9はブレ5に、ブレ10はブレ8に帰属するものと思われる。

遺物

ブレ9から出土した頁岩製の剥片は、長さ3.5



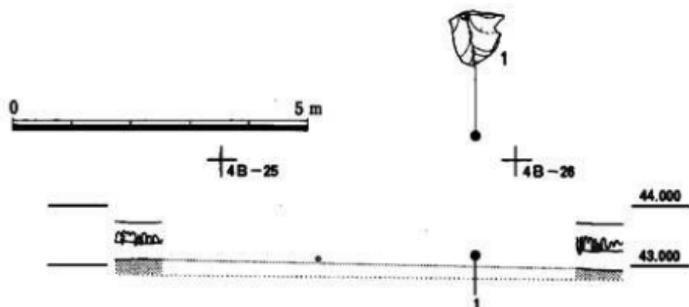
+4B-05

+4B-06

- 剥片
- 砕片

+4B-15

+4B-16



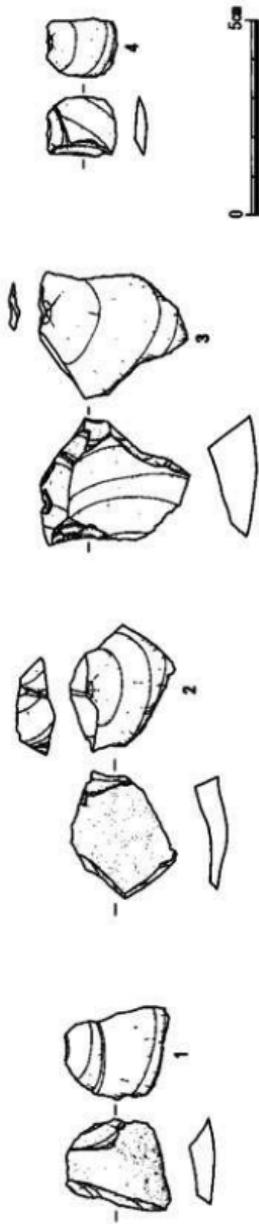
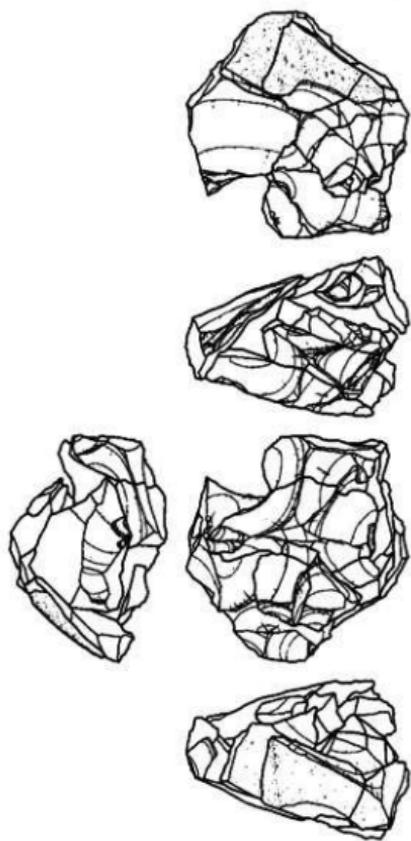
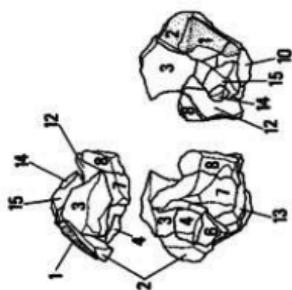
第23図 プレ9・10遺物分布図

cm、幅4.0cm、厚さ1.2cm、重量12.1gを測り、他のブロックから出土している頁岩と同一の石材である。わずかに頭部調整痕が確認できる。

接合資料（第24・25図、第10表）

宝永作遺跡からは流紋岩製の接合資料が確認された。プレ3ブロックを主体に石器が接合しており、一部プレ2ブロック、プレ4ブロックに渡っている。この資料の石核はプレ4ブロックで出土している。ブロック間で石器の受け渡しがあったのであろうか。

流紋岩の母岩は、現存する原石面から推測すると、ほぼ拳大の大きさと思われ、何度も打面の位置を変えながら剥片を作出しているのがわかる。作出された剥片は小型のものが多く、剥片主要剥離面のネガティブ面を、そのまま打面として活用しているものが多い。よって目的



第24圖 接合資料実測図(1)



第25图 接合資料実測图(2)

実測番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長cm	幅cm	厚cm	重量g	
24図 1	ブレ3, 24	剥片	流紋岩	2.5	2.5	0.8	4.73	
24図 2	ブレ3, 14	剥片	流紋岩	2.7	3.1	0.7	5.49	
24図 3	ブレ3, 11	剥片	流紋岩	3.8	3.25	1.3	12.92	
24図 4	ブレ4, 34	剥片	流紋岩	1.8	1.6	0.3	0.87	
25図 5	ブレ3, 33	剥片	流紋岩	1.4	1.6	0.3	1.01	
25図 6	ブレ2, 58	剥片	流紋岩	2.4	2.3	1.1	5.08	
25図 7	ブレ3, 5	剥片	流紋岩	4.5	2.4	0.9	8.19	
25図 8	ブレ3, 3	剥片	流紋岩	3.6	2.3	0.75	6.18	
25図 9	ブレ3, 29	剥片	流紋岩	2.5	1.9	0.7	2.63	
25図 10	ブレ4, 2	剥片	流紋岩	2.6	1.7	0.9	4.46	
25図 11	ブレ3, 21	剥片	流紋岩	2.9	1.9	0.45	1.84	
25図 12	ブレ3, 7	剥片	流紋岩	3.0	2.1	0.6	2.96	
25図 13	ブレ3, 6	剥片	流紋岩	3.7	2.9	0.7	7.73	
25図 14	ブレ3, 20	碎片	流紋岩	1.3	1.0	0.3	0.38	
25図 15	ブレ3, 8	剥片	流紋岩	2.3	1.8	0.8	2.42	
25図 16	ブレ4, 73	石核	流紋岩	2.8	2.7	2.0	12.50	

第10表 接合資料石器表

剥片作取と打面再生を兼ねている感もある。

実測図の石器個々の番号は剥片剥離工程に則し、作出された順に付けられており、よって16の石核が最終番号となっている。

以下、剥片剥離工程を追いつながりながら説明を加える。

遺物

接合した状態を観察すると、実測図裏面にあるように、1回の打撃によりできたネガティブ面が確認できる。おそらく準大の母岩を半砕するように分割し、剥片を作出する足掛かりをつかもうとしているのであろう。1はこの剥離面を打面として作出されている。続く2も1と同じように、石核成形と打面作出の両方を意図して作出された剥片と思われる。1を作出した後に打面を90°変換し、2を作出している。

3もやはり剥片作出と打面の作出を兼ねていることが、次の7～9の剥片作出時の打面の位置により判断できる。4～6の剥片の打面は、2を作出した後に残った主要剥離面のネガティブ面を活用している。

7以後の剥片作出に関しては、7～9を同一方向から作出した後、90°打面を変え10～13を作出している。さらに打面を90°変換し14・15を作出している。これらは1～3の主要剥離面を打面として作出されていることを附記しておく。

この接合資料は、基本的に数回の剥片作出の後に90°ずつ打面を変えていることが特徴としておさえられ、最終的に残った16の石核はサイコロ状を呈している。

第2節 縄文時代

宝永作遺跡から検出された縄文時代の遺構は、炉穴、陥穴状遺構に限定され、住居跡等はみられなかった。しかし、各期の土器片を含む包含層が台地全面に及んでいるため、検出されなかった遺構が存在していた可能性はある。

包含層より出土している土器片は、前期黒浜期が特に多く、出土土器片総点数の51.7%を占める。また、各時期により遺物分布地点に差がみられ、遺跡の所在する台地内での推移がみられる。特筆すべきは、早期花輪台期の土器が復元できた個体を含め、他に例を見ない、量的にまとまった出土状況を呈している。この時期の資料が出土している他の遺跡との比較、ひいては花輪台期の性格、位置付けを検討するにあたり、好資料となろう。

炉穴（第26・27図、図版9～12）

14基の炉穴が検出している。遺構に伴う遺物が希少のため性格な時期決定は難しいが、002号炉穴で出土している土器より、おおかた茅山期に属するものとして良いであろう。炉穴の形態としては長楕円の掘り込みに燃焼部が確認できるもの（001, 003, 005, 006, 007, 008, 009, 010, 012, 013, 014, 020）、複数の掘り込みが結合し、燃焼部が複数みられるもの（002, 004, 011）との2形態にほぼ分類される。

001号炉穴

西側が削平されており全体の形状はわからないが、楕円形状を呈すると思われる。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.7mを測る。

層序

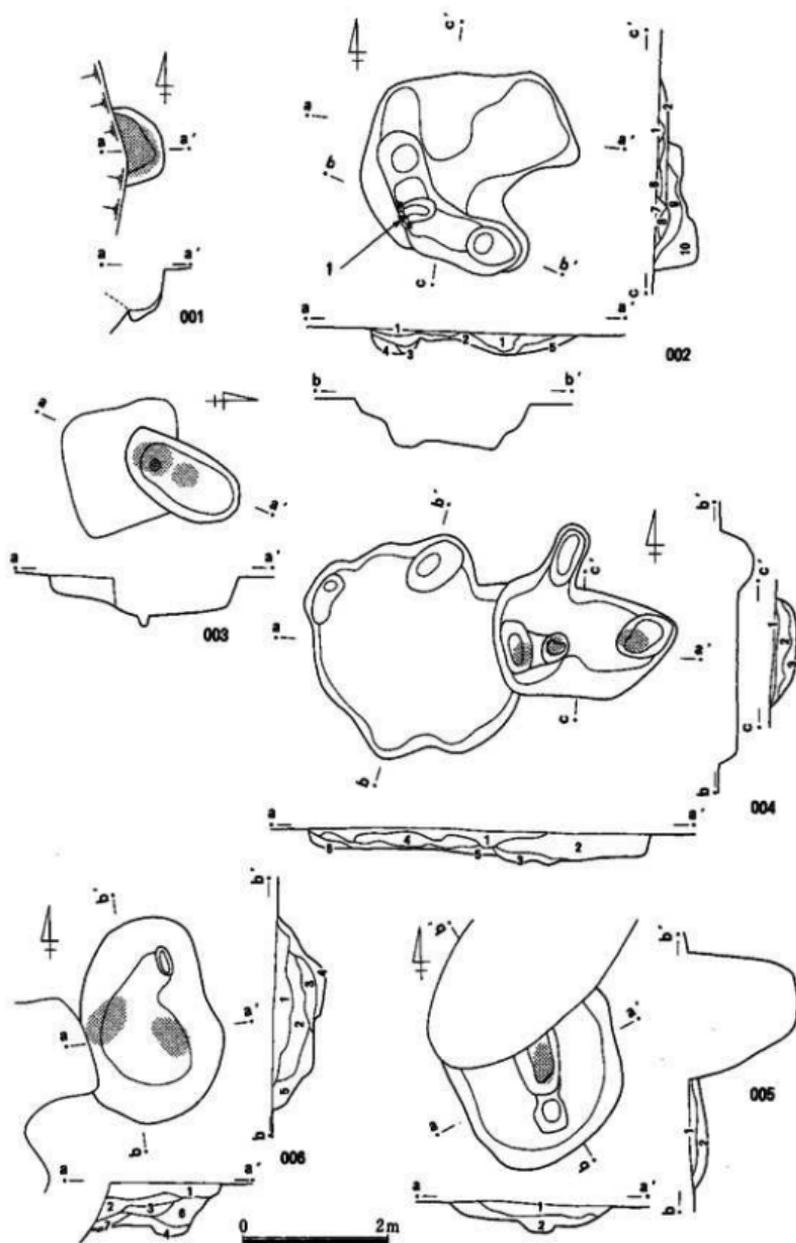
1：赤褐色土。焼土粒、焼土ブロック多量に含。

002号炉穴

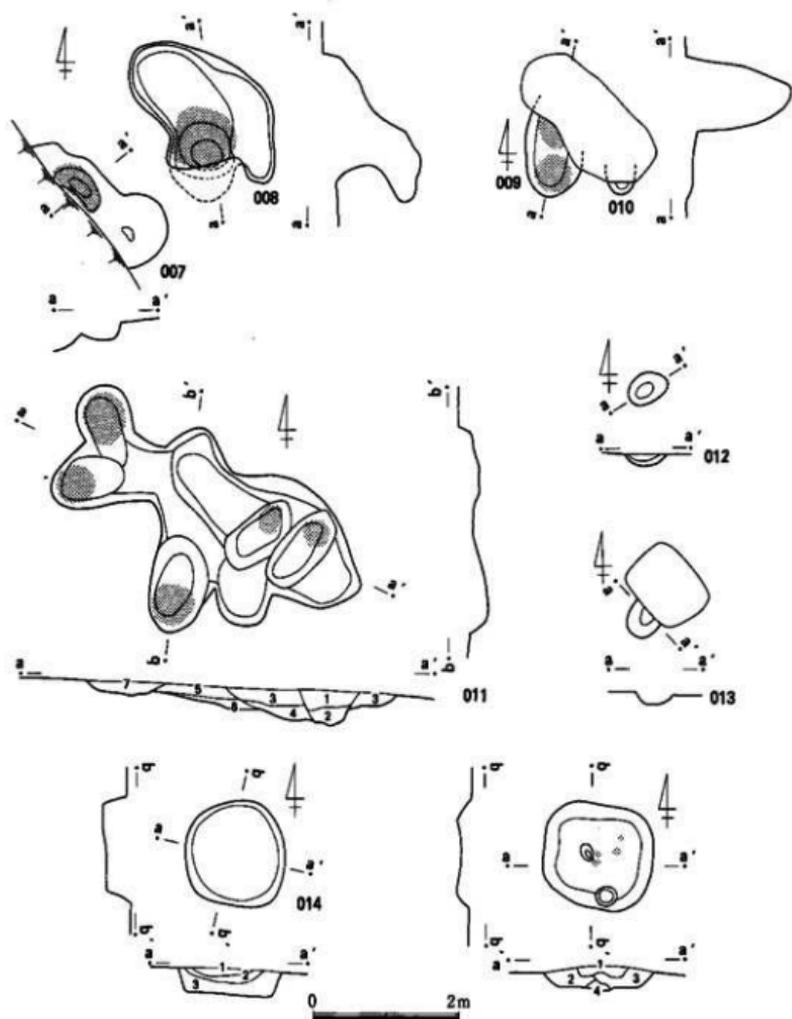
不定円形を呈する。明確な燃焼部はみられず、焼土が覆土中に含まれている程度である。平面形状では複数の掘り込みが結合しているものと思われるが、覆土の堆積状況でははっきりしない。長軸2.8m、短軸2.6m、深さ0.36mを測る。底部が欠損した土器が出土している。

層序

1：暗褐色土。ローム粒含。2：暗褐色土。焼土粒少量含。3：暗褐色土。焼土粒多く含。4：褐色土。ローム粒、焼土粒含。5：暗褐色土。ローム粒、焼土粒少量含。6：暗褐色土。ローム粒、焼土粒少量含。7：黒褐色土。ローム粒含。8：褐色土。ローム粒多く含。9：褐色土。ローム粒少量、焼土粒含。10：褐色土。焼土粒多く含。



第26图 炉穴平面图(1)



第27図 炉穴平面図(2)

遺物 (第28図, 図版12)

炉穴底面の出土であり、かなり脆い。口縁部から胴部下半にかけて $\frac{1}{2}$ 程残存している。器形は特に大きな変化はなく、胴部下半から口縁部にかけて立ち上がっている。口唇部には刻みはみられない。内外面ともに貝殻腹縁による条痕がみられ、口縁部付近は横位、胴部は斜位である。口径29cm、器高26.3cmを測る。



第28図 002号炉穴出土遺物実測図

は判断できないが、西側の掘込みは炉穴とは性格を異にするものであろう。東側の掘込みは長径2.5m、短径1.7m、深さ0.4mを測る。

層序

1：暗褐色土。焼土粒，ローム粒含。2：褐色土。焼土粒多く含。3：明褐色土。焼土粒，焼土ブロック多く含。4：暗褐色土。ローム粒含。5：褐色土。焼土粒少量含。6：褐色土。ローム粒含。

005号炉穴

北側を001号陥穴状遺構により破壊される。平面形は円形を呈し，中心部に燃焼部がみられる。径2.4mを測る。

層序

1：褐色土。ローム粒，ロームブロック含。2：褐色土。ローム粒，焼土粒含。

006号炉穴

西側を攪乱により破壊される。平面形は楕円形を呈し，長径2.8m，短径2.0m，深さ0.7mを測る。底面に2ヶ所の燃焼部をもつ。

層序

1：暗褐色土。ローム粒，焼土粒少量含。2：暗褐色土。ローム粒，焼土粒含。3：暗褐色土。焼土粒含。4：褐色土。焼土粒多量に含。5：褐色土。ローム粒，ロームブロック含。6：褐色土。焼土粒含。7：褐色土。焼土粒多く含。

003号炉穴

平面形状は楕円形で，長径1.7m，短径0.95m，深さ0.48mを測る。後世の攪乱で上面の一部が破壊されるが，燃焼部は残存する。底面に小ビットがみられるが，本遺構とはおそらく関係がないと思われる。

004号炉穴

円形の掘込みが2つ結合したような平面形を呈する。東側の掘込みには複数の燃焼部がみられるが，西側の掘込みにはみられない。土層の堆積状況では

007号炉穴

長径2.3m, 短径1.2mの長楕円形を呈し, 深さは0.2mを測る。西側は削平されており詳細はわからないが, 燃焼部が1ヶ所確認されている。

008号炉穴

007号炉穴に近接しており不定長楕円を呈する。燃焼部の上方がオーバーハングしており, 掘込みは本遺跡で確認されている炉穴のうち最も深い。長径2.3m, 短径1.5m, 深さ1.2mを測る。

009・010号炉穴

共に燃焼部のみ確認され, 後世の土壌により一部破壊されている。

011号炉穴

小規模な炉穴が結合した状態で検出されている。覆土の状態から, 埋め戻した後に新たに掘込み炉穴としているのが判断できる。小規模な炉穴各々には燃焼部が確認されている。1基の炉穴は長径1.4m, 短径0.8m前後である。

層序

1: 褐色土。焼土粒多く含。2: 褐色土。焼土粒多量に含。3: 褐色土。ローム粒, ロームブロック, 焼土粒含。4: 赤褐色土。焼土粒多く含。5: 暗褐色土。ローム粒, 焼土粒含。6: 褐色土。焼土粒, ローム粒含。7: 赤褐色土。焼土粒, 焼土ブロック含。

012号炉穴

上部が削平されているため, 燃焼部のみ残存している。おそらく長楕円形を呈す形状のものと思われる。

層序

1: 褐色土。焼土粒, ローム粒多く含。2: 赤褐色土。焼土粒, 焼土ブロック多く含。

013号炉穴

上部が削平されているため, 燃焼部のみ残存する。後世の土壌により北側半分が破壊されているが, おそらく長楕円形を呈す形状のものと思われる。

014号炉穴

径1.5mの円形を呈し, 深さは0.4m内外である。炉穴底面から急激に立ち上がり, 明確な燃焼部はみられない。

層序

1 : 暗褐色土。焼土粒少量，ローム粒を含。2 : 褐色土。焼土粒，ロームブロック含。3 : 褐色土。ローム粒，焼土粒多く含。

陥穴状遺構（第29・30図，図版13～15）

8基の陥穴状遺構が検出され，台地付け根の土壌集中区と台地先端部とに分かれて分布している。陥穴状遺構の形状は，短軸の断面形状が漏斗状を呈するもの（001，002），袋状を呈するもの（003，004，005，006），箱形を呈するもの（007，008）の3形態におおよそ分類できるが，形態による分布，等高線に対する長軸の方向などには企画性はみられず，形態の差異は時期的なものとして考えられる。また，008号陥穴状遺構を除くすべてには，底面に複数の小ピットが確認でき，付属施設と思われる。

001号陥穴状遺構

長軸3.6m，短軸2.0m，深さ1.8mを測る。底面には小ピットが19基検出され，ピットの深さは20cm内外である。短軸の断面形状は漏斗状を呈する。

層序

1 : 黒色土。ローム粒少量含。2 : 暗褐色土。ローム粒含。3 : 暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。4 : 茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。5 : 茶褐色土。ロームブロック含。6 : 褐色土。ロームブロック含。7 : 暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。8 : 茶褐色土。ローム粒多く含。

002号陥穴状遺構

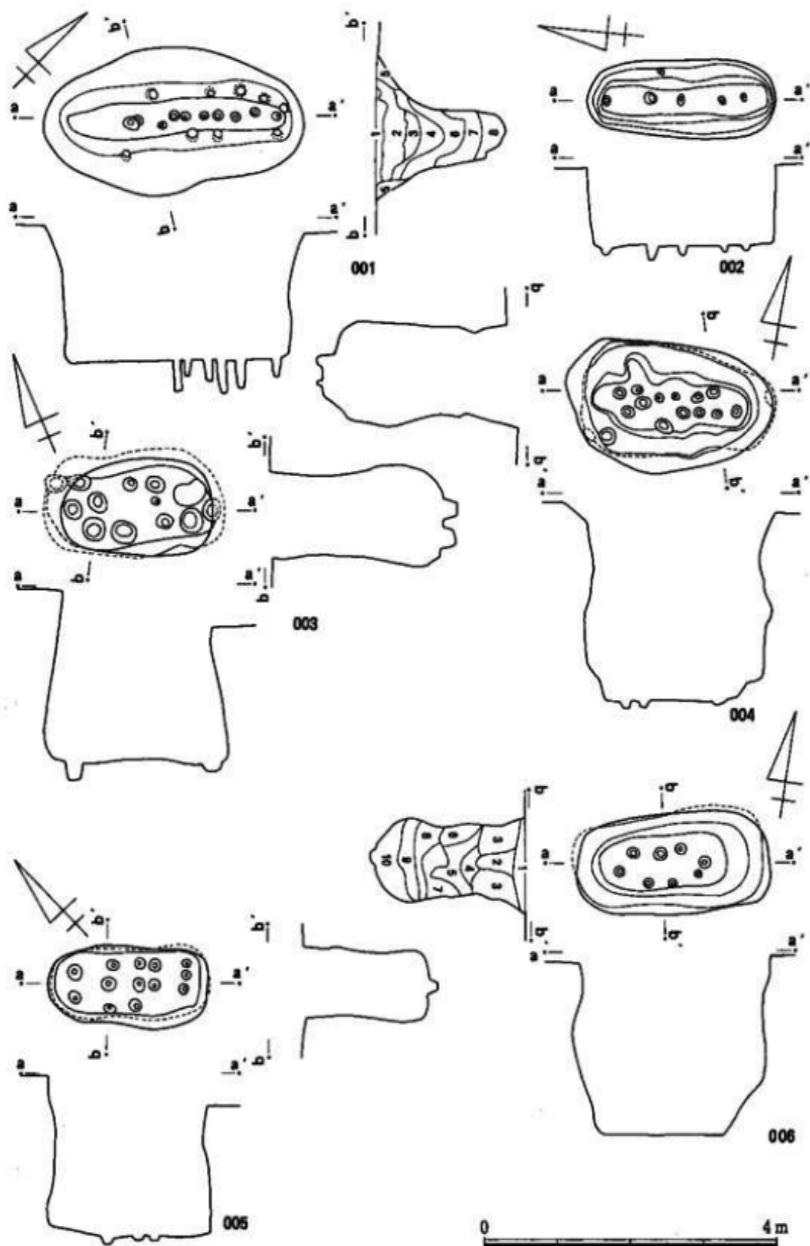
長軸2.6m，短軸1.2m，深さ1.2mを測る。底面の小ピットは長軸方向に5基検出され，深さは10cm内外である。001号陥穴状遺構と同様，短軸の断面形状は漏斗状を呈する。

003号陥穴状遺構

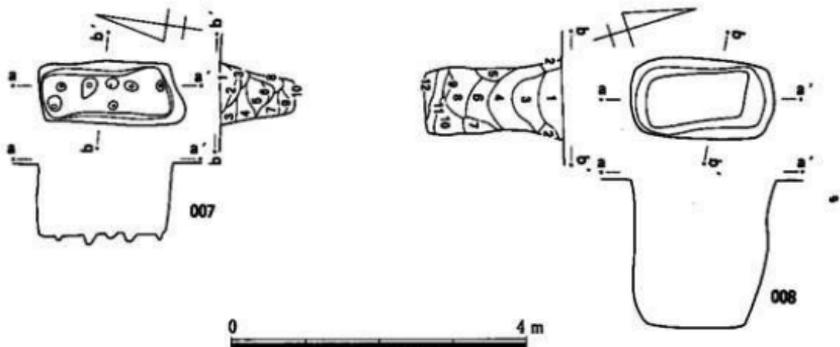
長軸2.1m，短軸1.4m，深さ2.4mを測り，長軸，短軸方向とも袋状に内側が広がる。底面の小ピットは不規則に設けられ，ピットの大きさは他の陥穴状遺構に比べ大きく，大方が径20cm内外である。

004号陥穴状遺構

長軸3.0m，短軸1.8m，深さ2.8mを測る。底面の小ピットは長軸方向に数列設けられ，13基確認されている。長軸，短軸の断面形状は共に袋状を呈する。



第29图 陷穴状遺構平面図(1)



第30図 陥穴状遺構平面図(2)

005号陥穴状遺構

長軸2.02m，短軸1.05m，深さ1.8mを測る。長軸，短軸方向の断面形状は袋状を呈するがそれほど極端ではなく，上面と底面のプランはほぼ同じである。底面には規則的に小ピットが確認され，13基を数える。

006号陥穴状遺構

長軸2.33m，短軸1.4m，深さ2.2mを測り，断面形状は袋状を呈する。底面の小ピットは長楕円形を呈する配列で8基確認された。

層序

1：黒色土。ローム粒含。2：黒色土。ローム粒少量含。堆積は疎である。3：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。4：暗褐色土。ローム粒多く含。5：褐色土。ローム粒，ロームブロック含。6：茶褐色土。ロームブロック含。7：暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。8：茶褐色土。ロームブロック多く含。堆積密。9：暗褐色土。ローム粒多く含。10：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。

007号陥穴状遺構

長軸1.8m，短軸0.9m，深さ0.98mを測り，長方形の平面形状を呈する。底面の小ピットは長軸方向に5基確認され，他に2基付属している。

層序

1：黒色土。ローム粒含。2：黒色土。ローム粒多く含。3：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。4：暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。5：暗褐色土。ローム粒少量含。堆積疎。6：暗黄褐色。ロームブロック多く含。7：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック少

量含。8：茶褐色土。ロームブロック多く含。9：暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。
10：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。

006号陥穴状遺構

長軸2.2m，短軸1.05m，深さ1.98mを測り，平面形状は隅丸の長方形を呈する。当遺跡で検出した陥穴状遺構の中で，唯一底面に小ピットが検出されなかった。上面と底面の形状はほぼ同じである。

層序

1：黒色土。ローム粒少量含。2：暗茶褐色土。ローム粒多く含。3：暗褐色土。ロームブロック含。4：暗褐色土。ロームブロック含。5：暗黄褐色土。ロームブロック含。6：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック含。7：暗黄褐色土。ロームブロック含。8：暗褐色土。ロームブロック多く含。9：黄褐色土。壁面の崩壊土か。10：暗褐色土。ローム粒含。11：茶褐色土。ローム粒，ロームブロック少量含。12：暗褐色土。ローム粒，ロームブロック含。

包含層出土遺物

宝永作遺跡の所在する台地ほぼ全域には，早期から後期にわたる遺物包含層が確認された。ここでは記述のため，便宜的に下記のように5群に大別し，またそれぞれの中で細分を行なった。

第1群土器 早期に属する土器

- I類 撻糸文系土器（稻荷台・花輪台・平坂）
- II類 条痕文系土器（子母口・茅山）

第2群土器 前期に属する土器

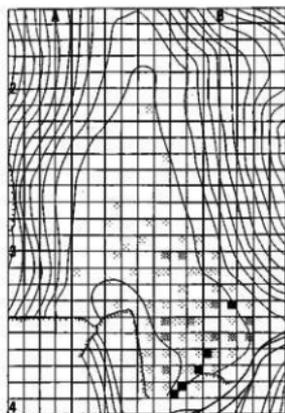
- I類 織維土器（黒浜）
- II類 浮島・興津系土器
- III類 諸磯系土器

第3群土器 前期末～中期初頭に属する土器

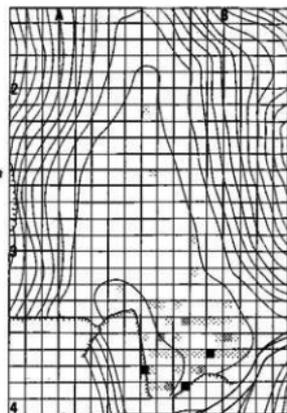
- I類 下小野式土器
- II類 隆帯文様区画内に鋸歯状沈線を有する土器

第4群土器 中期に属する土器

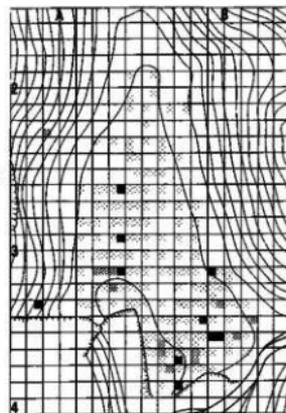
- I類 五傾ヶ台式土器
- II類 加曾利E式土器



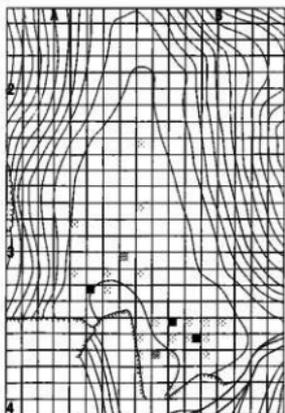
第1群 I類 早期彌生文化系土器



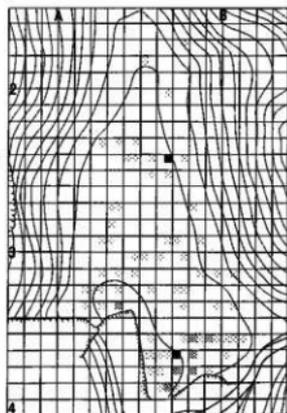
第1群 II類 早期彌生文化系土器



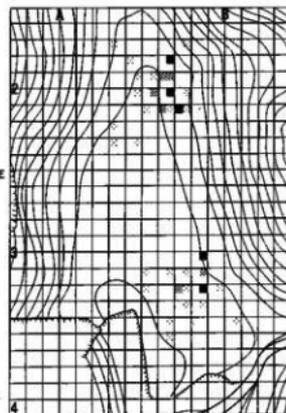
第2群 前期



第3群 前期末葉～中期前期

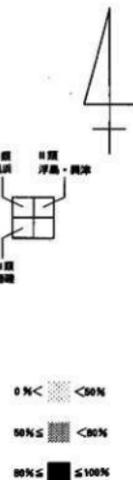


第4群 中期



第5群 後期

第31圖 包含層出土遺物時期別分布圖



第5群土器 後期に属する土器

I類 加曾利B式土器

II類 安行式土器

第31図は各群・類ごとの分布を表わした図である。小グリッド単位で出土している土器点数の割合を示しているが、パーセントの基準は、その類の中で最も出土点数の多いグリッドを最大値、100%と設定しており、その数量に対する他のグリッドの出土点数の割合を基にスクリーントーンを変えている。

各時期に共通しているのは、遺跡南東の台地平端部に、各時期とも最大値を示す黒塗りがみられることである。特に第1群II類の条痕文系土器は、総点数が少ないこともあるが、ほぼこの台地平端部に限定されている。これは炉穴の分布範囲とほぼ一致している。また、時期を追うごとに分布の範囲が台地全体に広がる傾向がみられ、最大値を示すグリッドもそれに連れ広がっていることが窺える。特に中期以後には台地の北と南に2分するような分布がみられ、第5群とした、後期に属する土器の分布に関してはこのことが顕著である。

第1群土器 早期に属する土器

第I類 撚糸文系土器

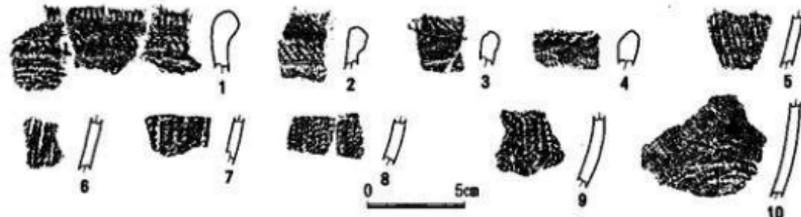
第1種 稻荷台式土器（第32図、図版16）

点数的に少数であり、出土しているこの時期の個体数はさほど多くはないものと思われる。1～4は口縁部の破片である。口唇部が外反するように厚みをもち、隆帯状になった口縁部外面にはLRの斜行縄文、口唇部には同一の原体により、土器内面から外面にむかい施文している。口縁直下では、1にみられるように横位の縄文が、以下の胴部には縦位の縄文が施文されている。器厚は薄く、口縁以下では底部付近までほぼ一定の厚みを保つものと思われる。胎土は細かいが、0.5mm程の長石粒を多く含む。

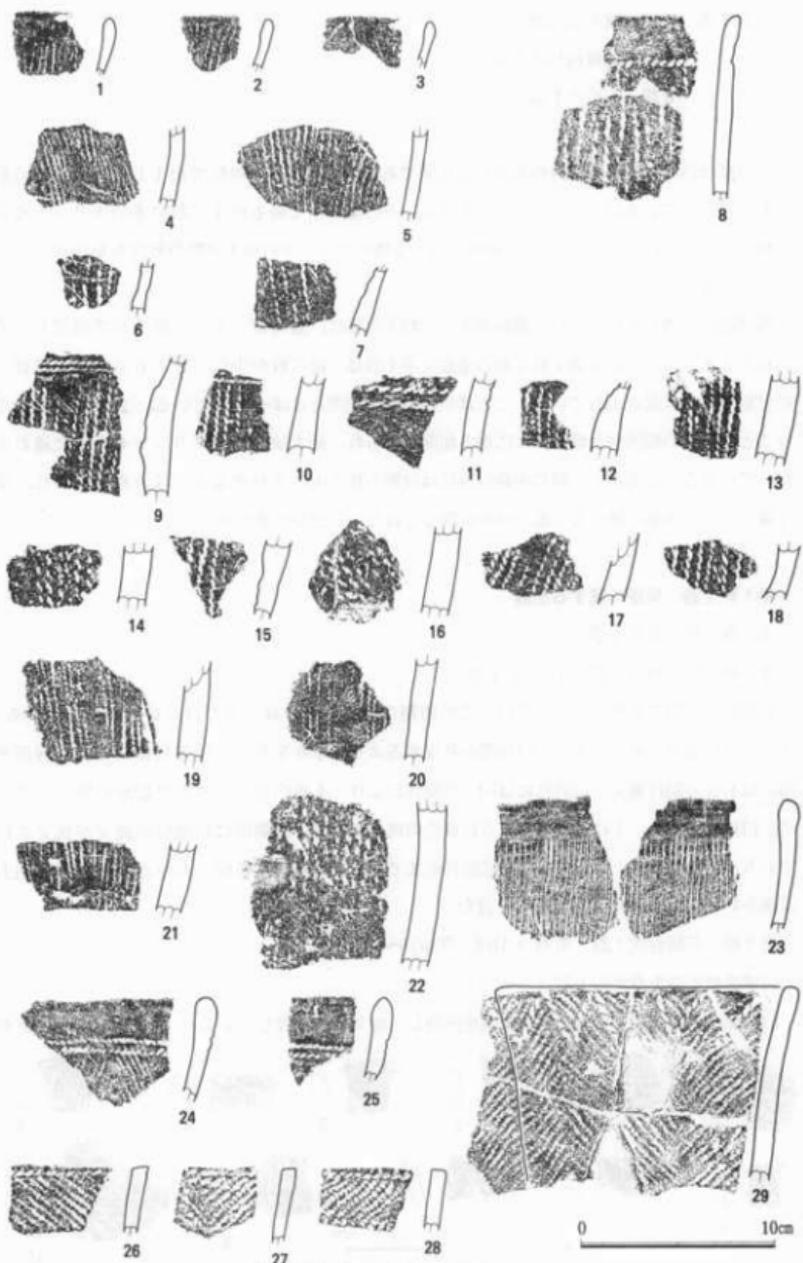
第2種 花輪台式土器（第33・41図、図版16～18）

口縁部無文帯を有する土器（1～29）

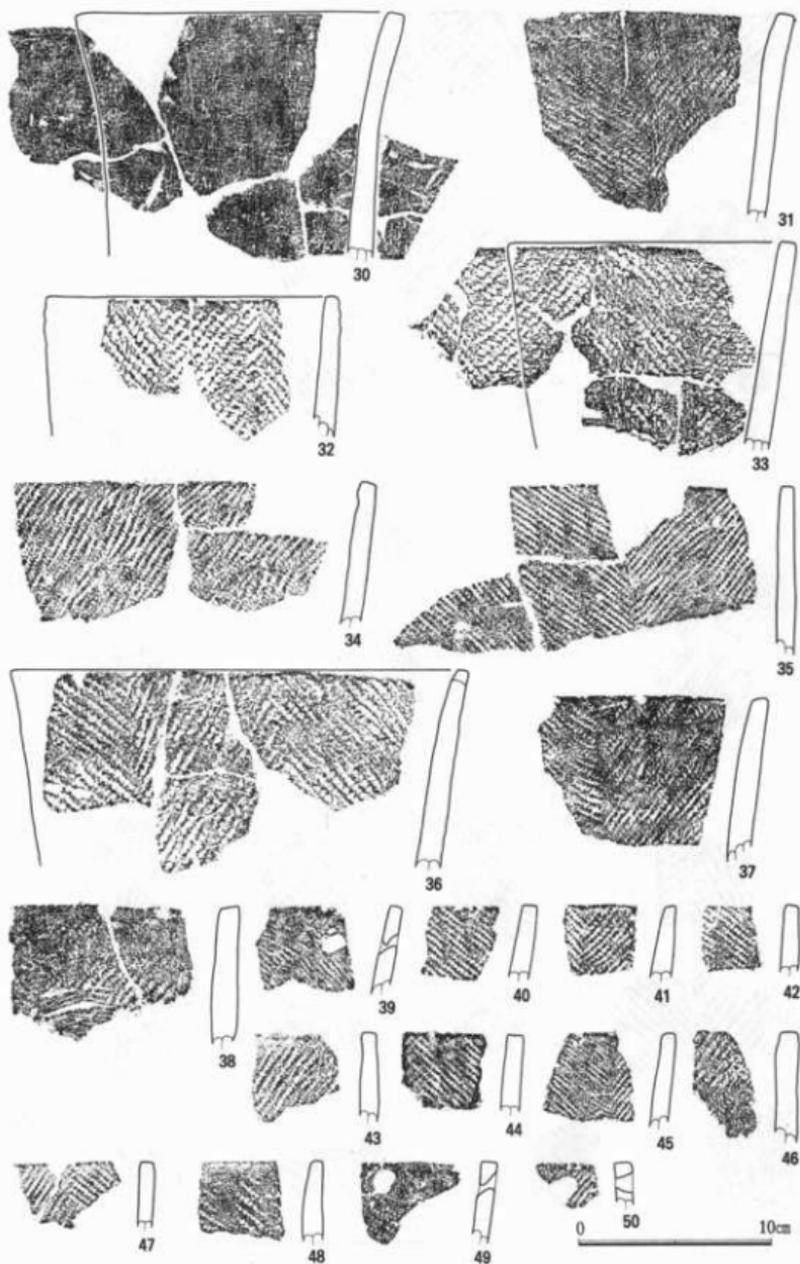
口縁部直下に1条ないし2条の撚糸を圧着し、無文帯を形成している。1～3は口縁部がや



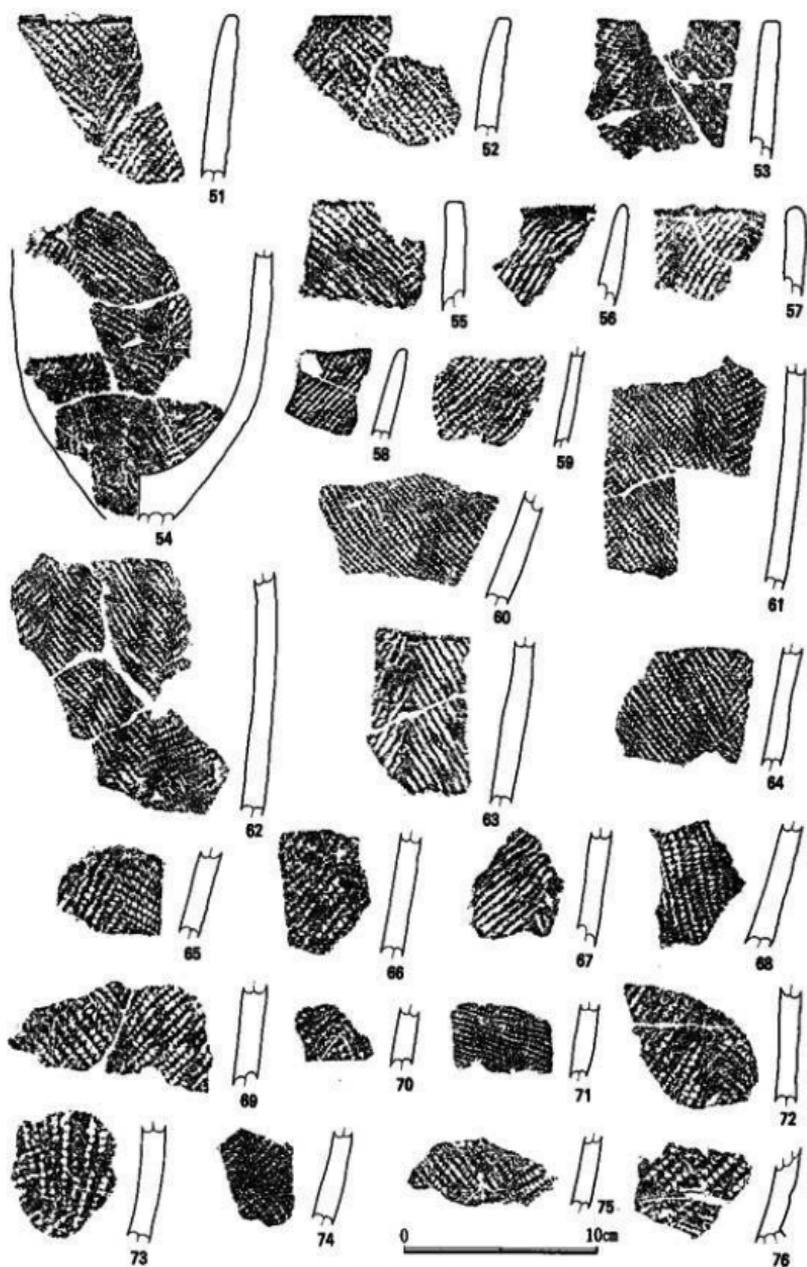
第32図 第1群I類土器拓影(1)



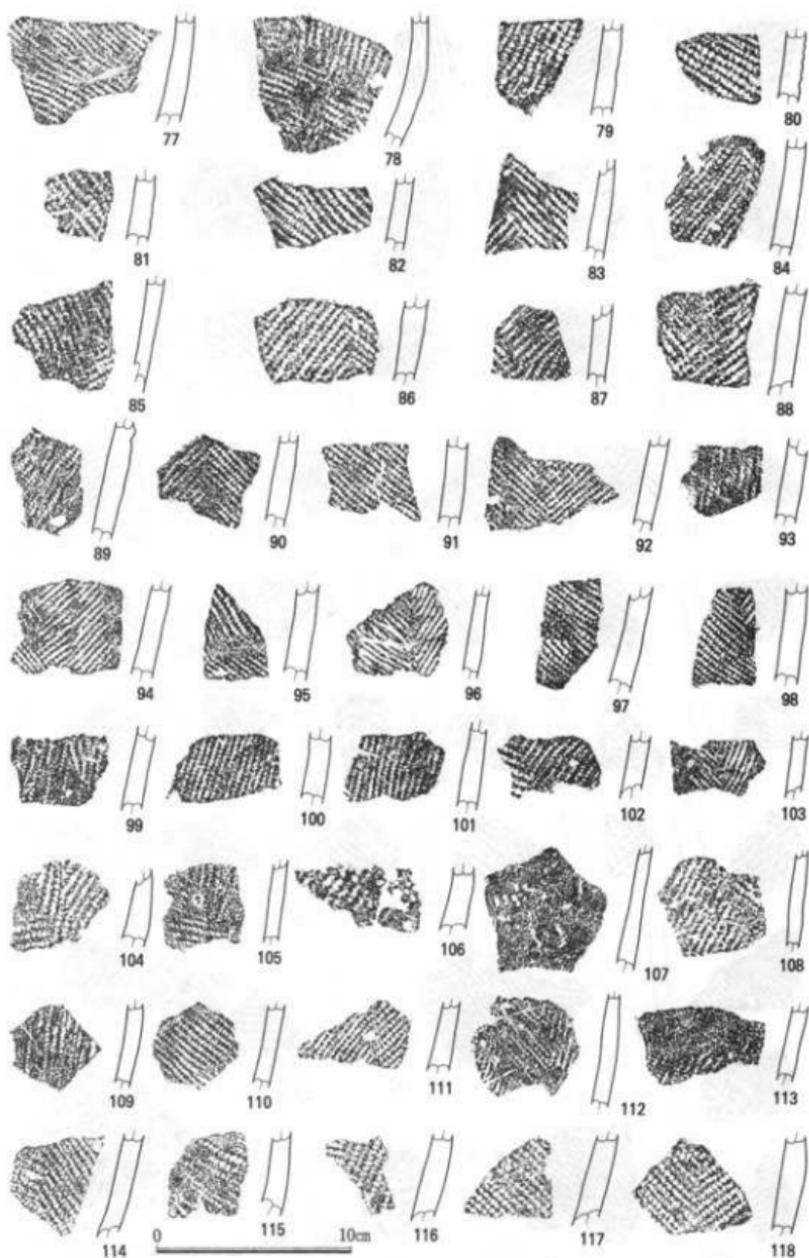
第33图 第1群1類土器拓影图(2)



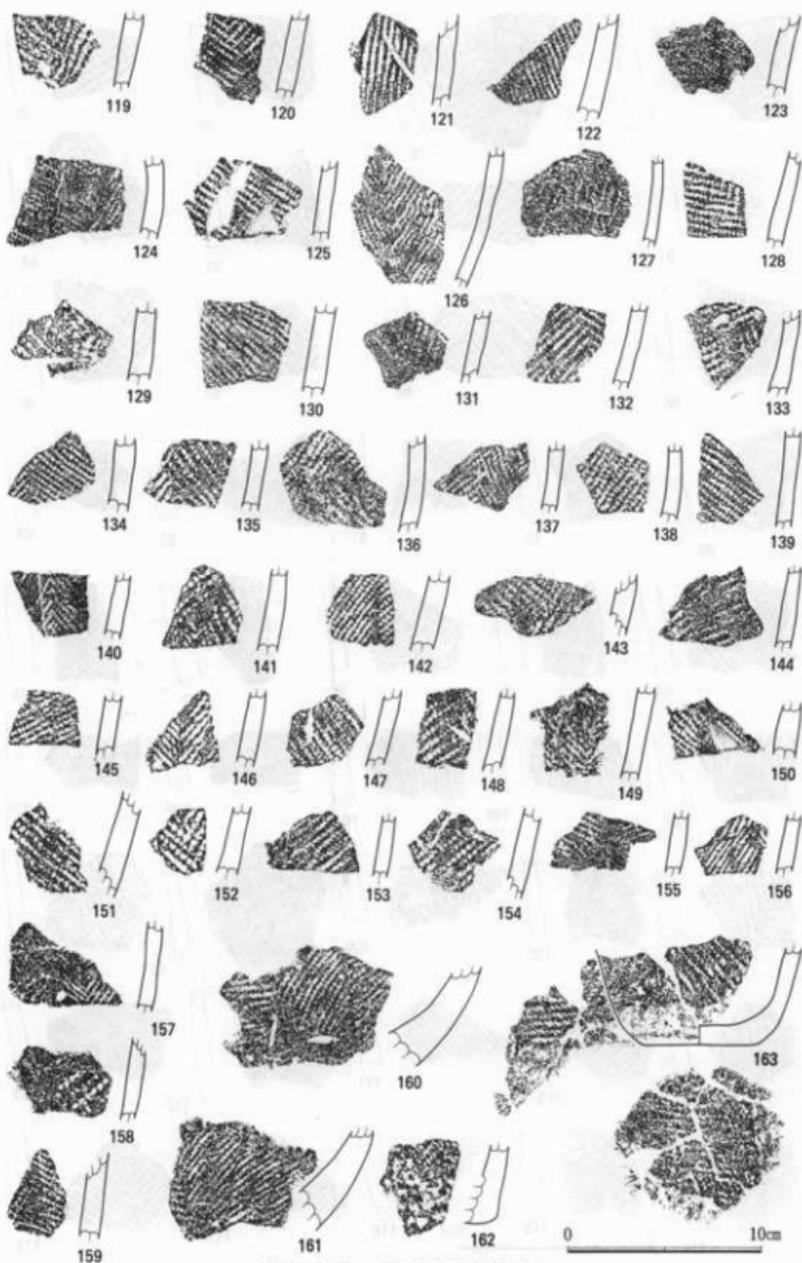
第34图 第I群I類土器拓影(3)



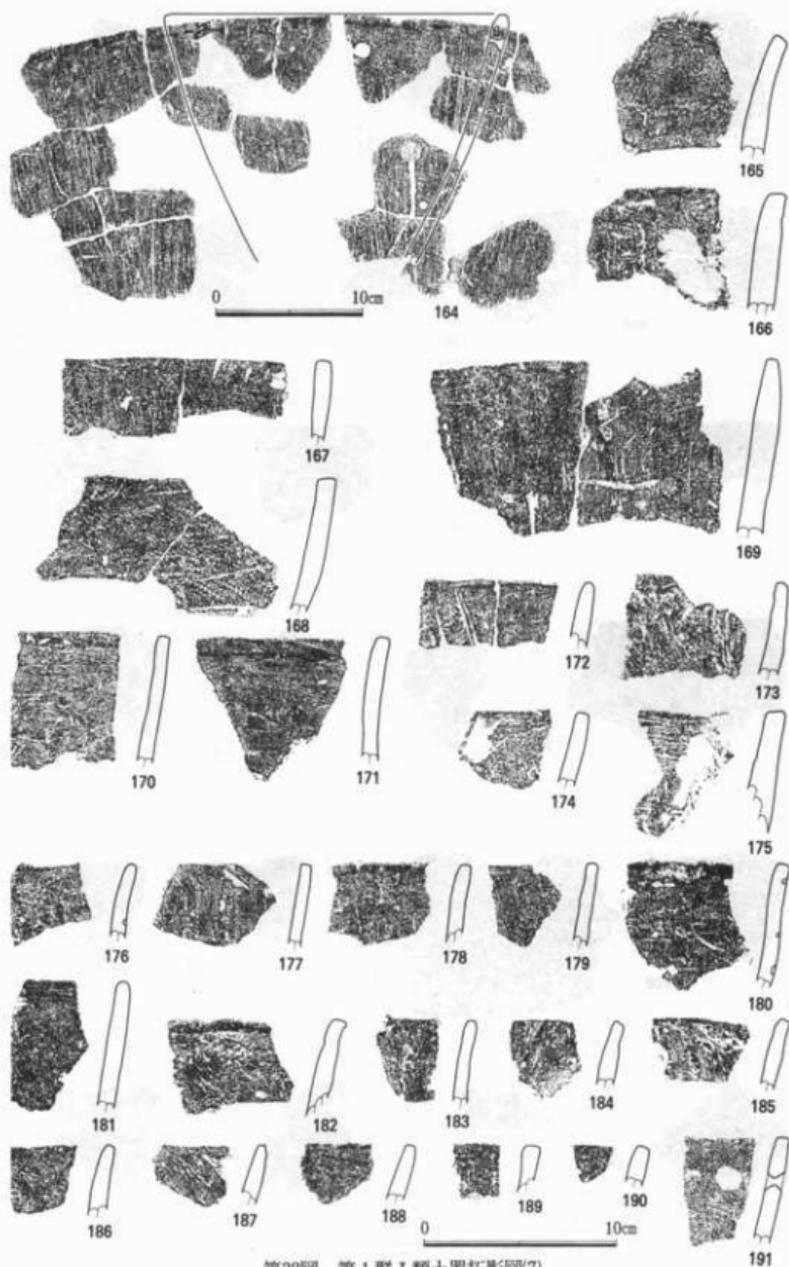
第35图 第I群I类土器拓影图(4)



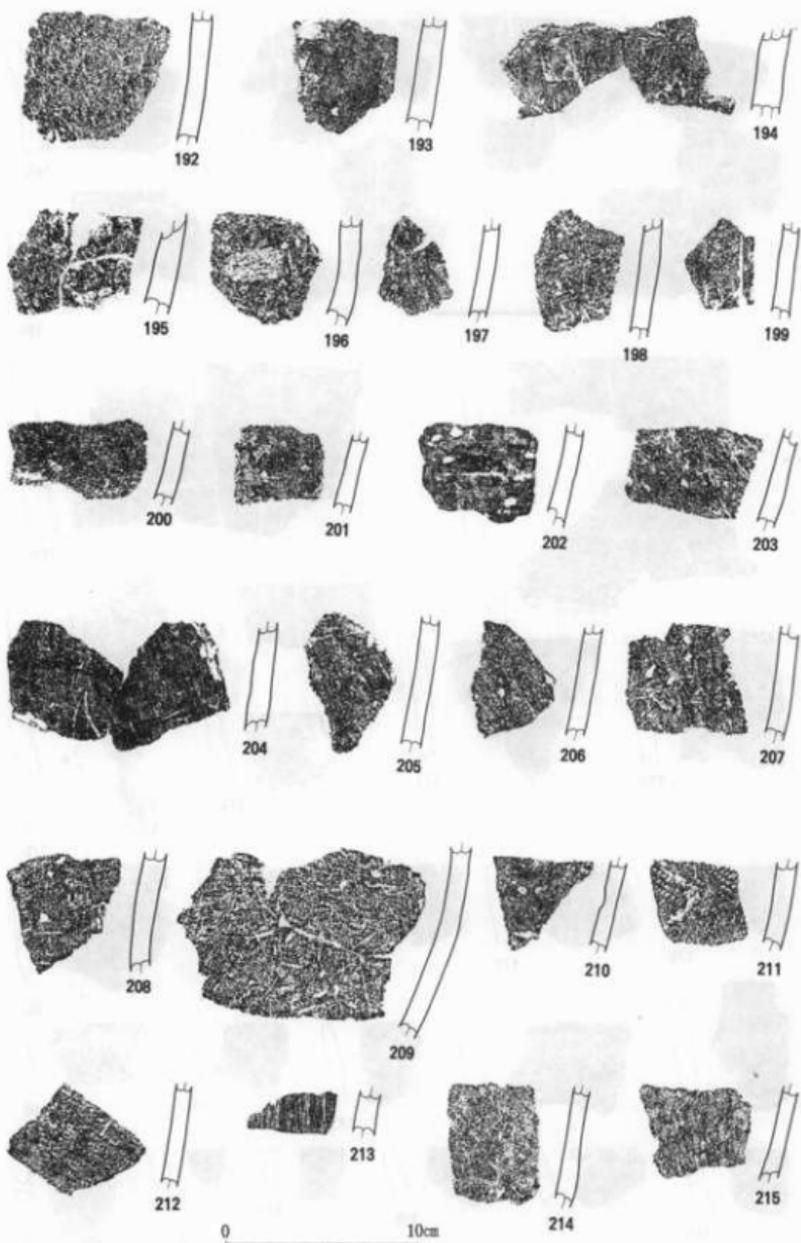
第36圖 第1群I類土器拓影圖(5)



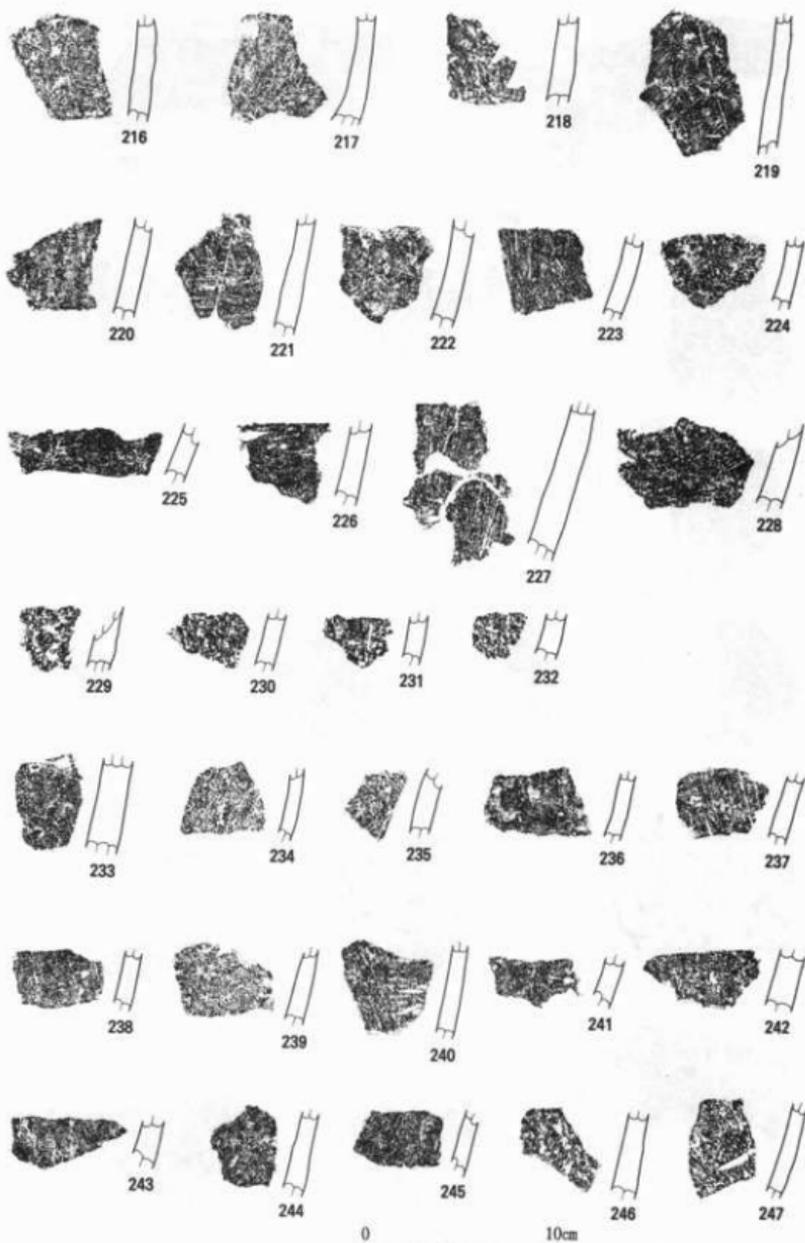
第37图 第1群I類土器拓影图(6)



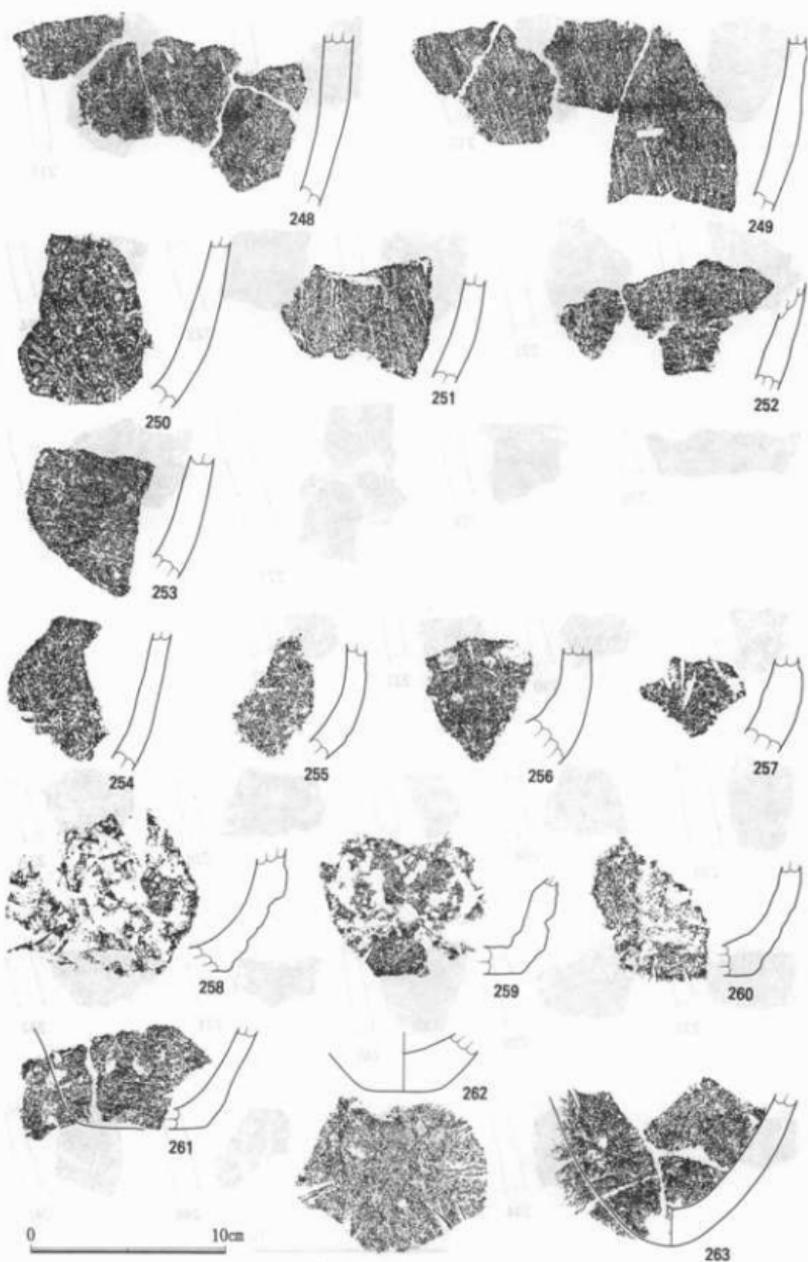
第38图 第1群I類土器拓影(7)



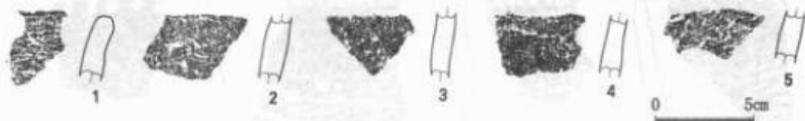
第39圖 第1群I類土器拓影圖(8)



第40图 第1群I類土器拓影图(9)



第41图 第1群I類土器拓影图(3)



第42図 第1群I類土器拓影図11

や内傾し、縦位の縄文を施文している。土器表面は摩滅しており原体の復元は困難であるが、おそらくRLであろう。9～22は同一個体であり、2条の撻糸原体圧痕がみられる。胴部には縦位のLR縄文が施文される。器厚は厚く胎土に長石粒を含む。23は口縁部無文帯がわずかに内湾しており沈線状になる。縦位のRL縄文が施文される。26～29は口縁部直下に圧着がみられ、無文帯を形成していないが、この範疇に含めた。胴部には羽状縄文がみられ、後に説明する第2種に近いものとなる。29は鋸歯状の撻糸原体圧痕がみられる。口縁部から胴部にかけて器厚はほぼ一定であり、口唇部は平坦であるが、削りにより成形されたものではない。

羽状縄文が施文される土器（30～163）

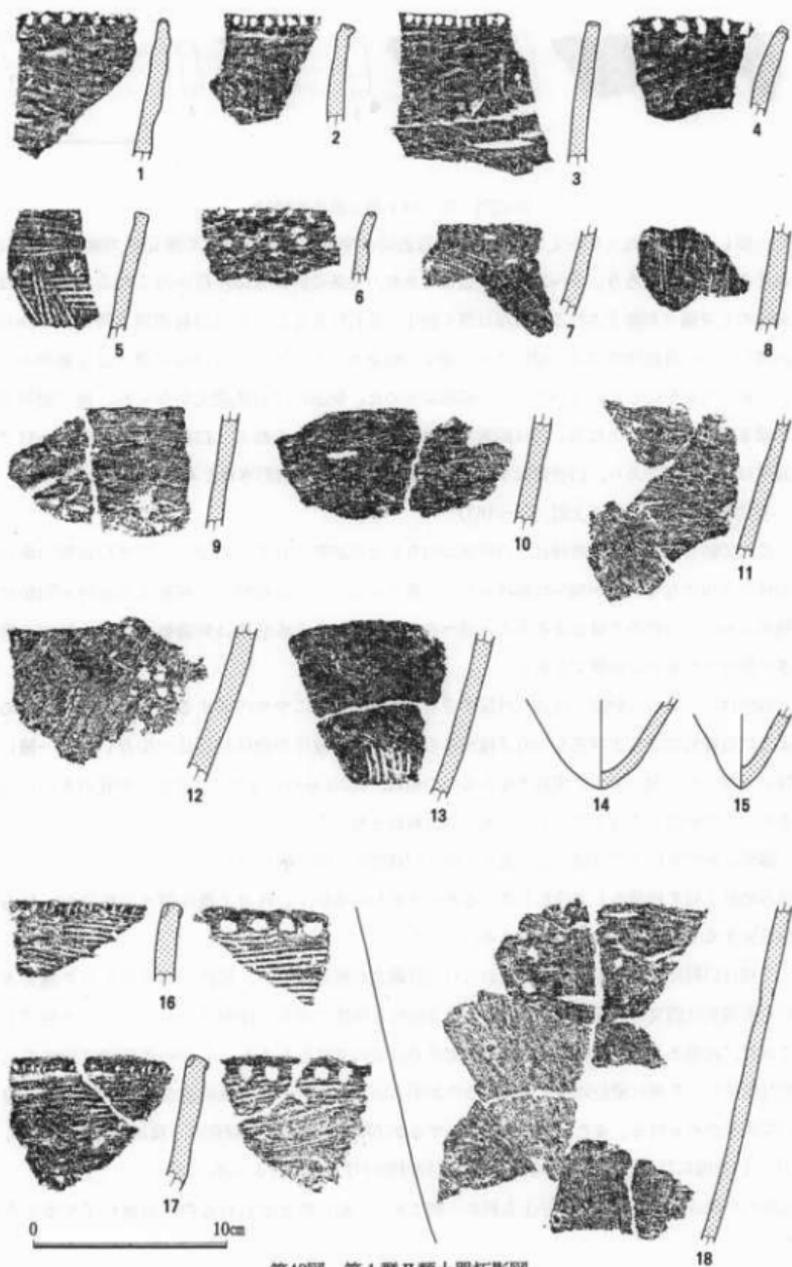
ここで紹介する土器の特徴は、口唇部が削りにより調整されるもので、よって口縁部の断面形状が平坦になることが第一に挙げられる。胎土中に含まれる砂粒子の移動した痕跡が明瞭に残るため、へら状の工具によるものと思われる。削りによる成形後は無調整であり、撫でや磨きの施されたものは皆無である。

器形は30のように胴部上位より外反するもの、32のようにやや内湾する感のあるもの、33のように直線的に立ち上がるもの3種がみられる。底部破片が個体数に比べ少ないため一概にはいえないが、54のように尖底となるもの他に、163にみられるように完全に平底のものが含まれ、この両者が共伴していることも大きな特徴となろう。

器厚は胴部下位まではほぼ一定であり、特に口縁部等、部分的に肥厚するものはない。同一の厚みの粘土紐を輪積みして成形しているためと思われるが、これは土器片個々の形状が、長方形を呈するものが多いことでも言える。

文様は口縁部より外面ほぼ全体にわたり羽状縄文が施されるが、原体を組み合わせる施文される所謂羽状縄文とは異なり、同一の原体を縦位と横位に交互に回転させることにより施文しており、結果として羽状縄文となるものである。37の文様をみると、LRの単節縄文原体を右側は横位に、左側は縦位に施文しているのが明らかであり、それぞれの施文単位の間には不整合な箇所がみられる。また、全個体が該当するか不明であるが、口縁部直下には穿孔（39、49、50）、口唇部には土器片鏝にみられるような刻目が付けられている（36、39）。

全体的に焼成は良好であり、胎土も細かく密である。長石粒と思われる白色の微粒子を多く含む。



第43图 第I群II类土器拓影图

無文土器 (164~263)

土器の特徴は羽状縄文が施される土器と全く同一であり、羽状縄文が施されるか施されないかだけの違いである。胴部には削り痕がみられ、外面はほとんどが縦位の削り痕である。また羽状縄文が施される土器にはみられなかった刺突を施す土器が少数であるが確認されている。176・180がそれに該当するものである。刺突は連続したものではなく極めて粗であるが、口縁部下を巡るのか部分的なものなのかは小破片のため確認できない。

ここで着目したいのが258~263の底部破片である。羽状縄文が施される土器では確実に平底となる個体が1点のみであったが、無文土器では261のように平底のもの、263のように尖底となるもの、そして両者の中間的なもの262が共存しているのが明確である。

第3種 平板式土器 (第42図, 図版19)

出土点数は少なく、1個体と思われる。無文と思われるが、器表面が荒れているため削り痕があるかどうかは不明である。色調は灰白色であり、0.5mm程の長石粒を多く含む。

第Ⅱ類 条痕文系土器

第1種 子母口式土器 (第43図1~15, 図版19)

口唇部に棒状工具により施文される。1~3は口唇部によって押し引きを繰り返して施文されるが、4は棒状工具を口唇部の弧に対して直角に圧着して施文するものである。6は棒状工具の刺突によるものであり、口縁部直下にも同様の連続した刺突文がみられる。土器表面には条痕がみられるが、5、13以外は明確ではない。底部は14、15のように先に述べた花輪台式に比べるとかなり尖る感がある。胎土には繊維が混入するが、可視的に認められる程度である。

第2種 茅山式土器 (第43図16~18, 図版19)

第1種の子母口式に比べると、胎土に含まれる繊維が多くなる。また、条痕も内外面共により明確となる。16、17は口縁部破片であるが、口縁部外面には数細な刻みが、内面には棒状工具による連続刺突がみられる。条痕は内外面共に口縁部から胴部上位は横位であるが、以下は内面が斜位、外面は縦位が多くなる。

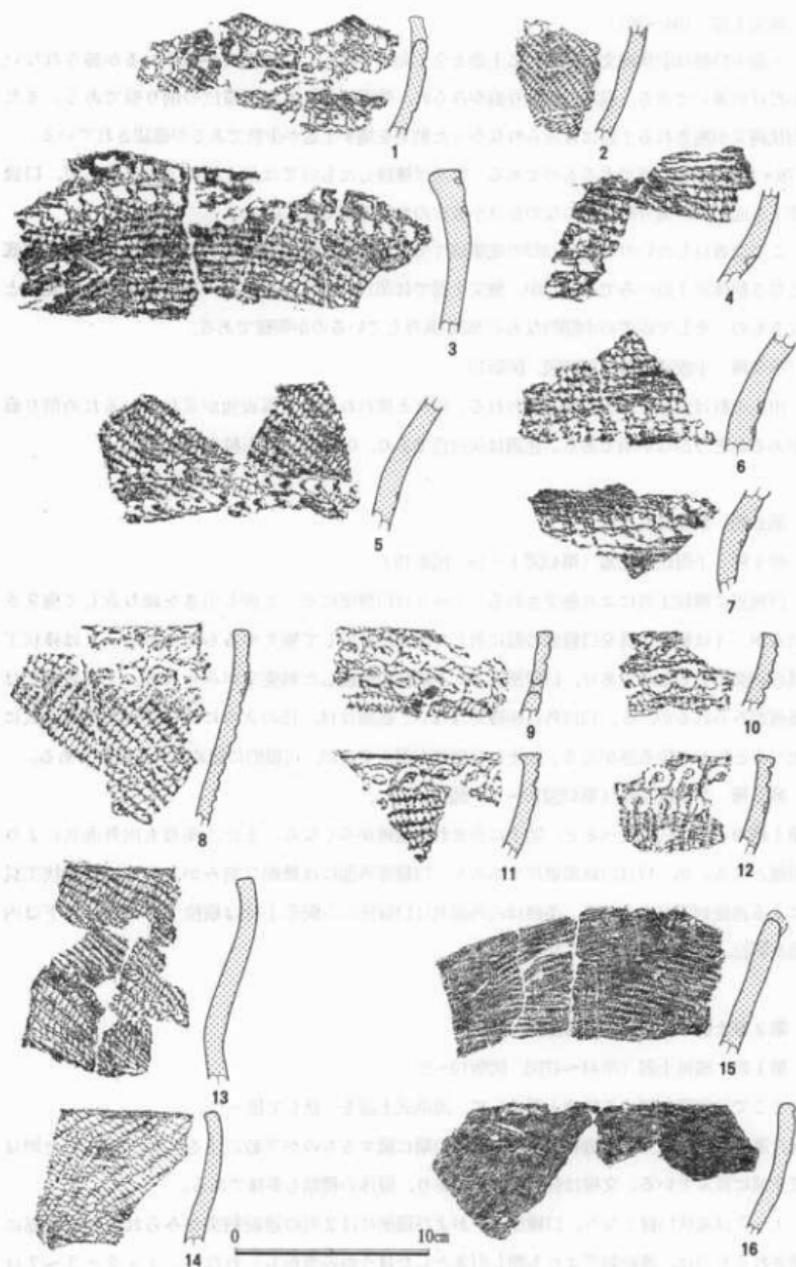
第2群土器 前期に属する土器

第Ⅰ類 織維土器 (第44~47図, 図版19~21)

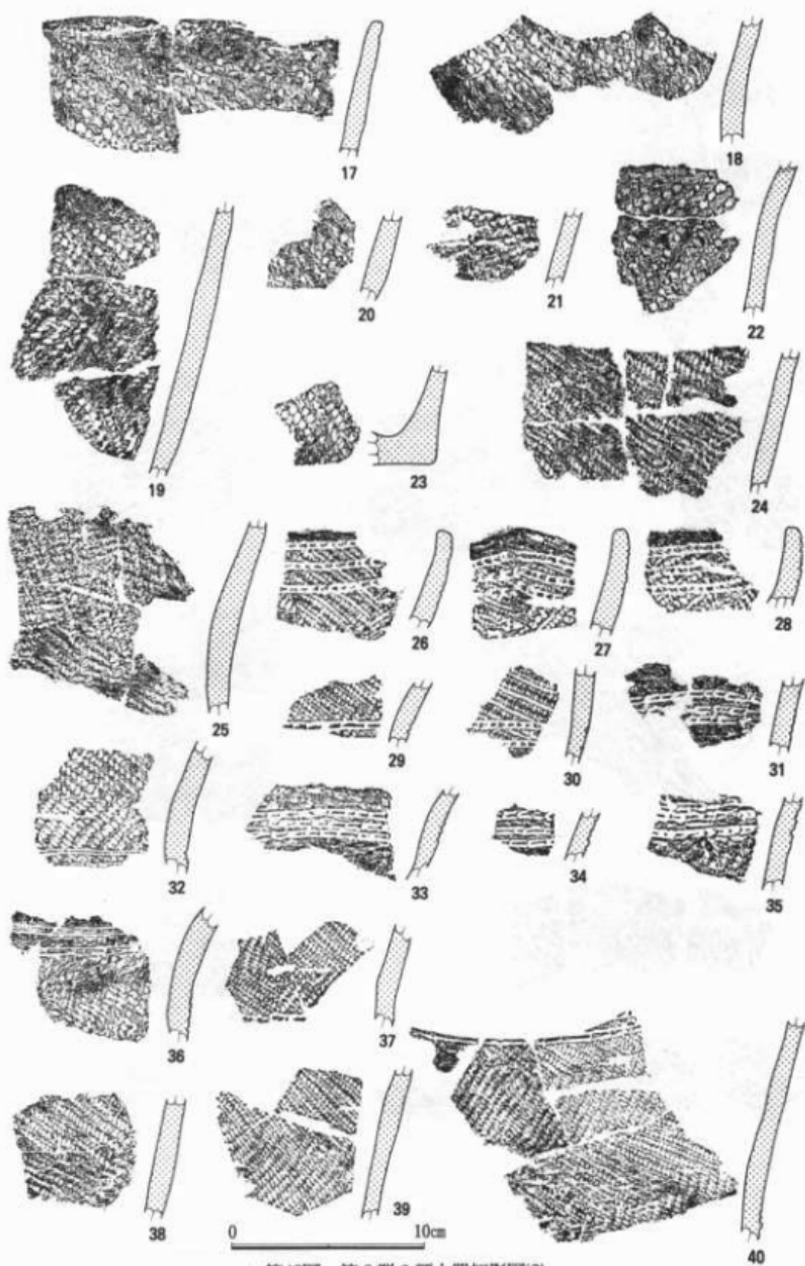
ここでは前期に属する織維土器として、黒浜式土器を一括して扱った。

包含層より出土している遺物の中で、この時期に属するものが半数以上を占め、分布も台地ほぼ全域に及んでいる。文様は縄文が主流であり、原体の種類も多様である。

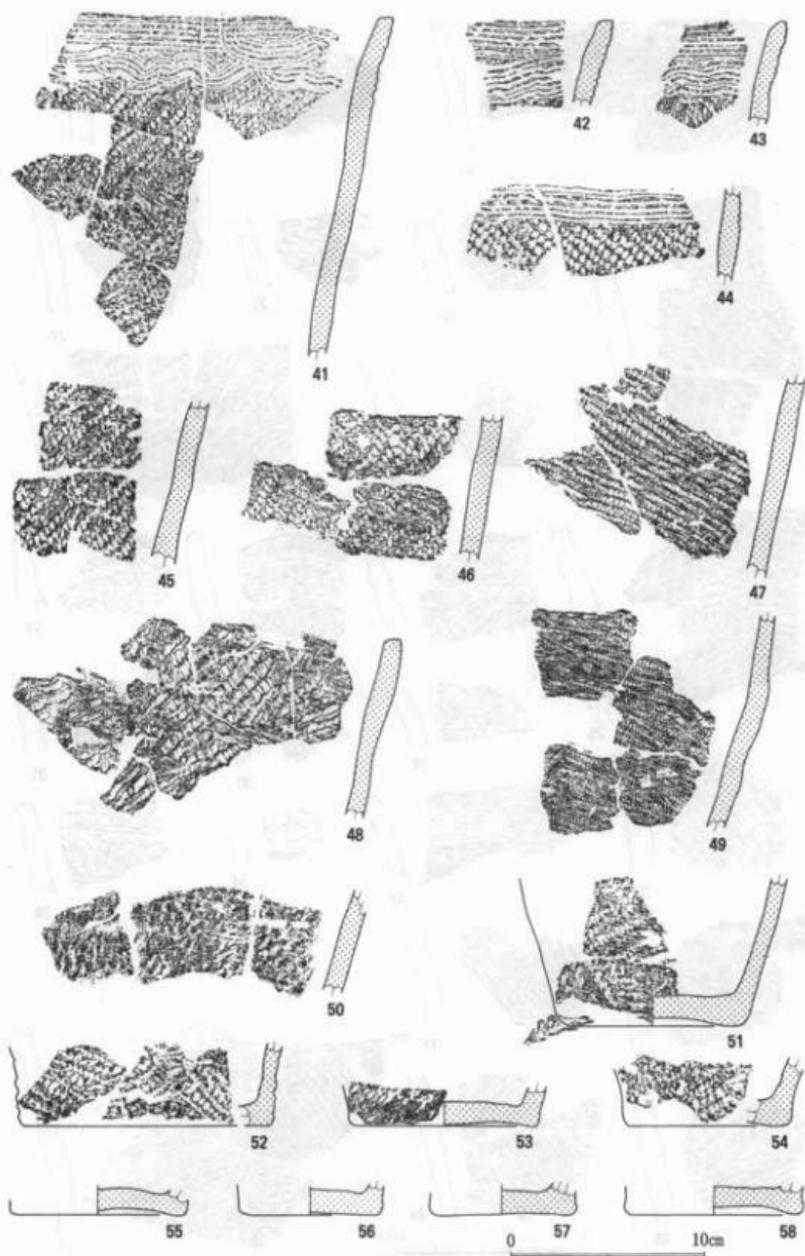
1~7は波状口縁となり、口縁部直下および頸部には2列の連続刺突がみられ、特に頸部に施されるものは、連続刺突よりも押し引きとしたほうが妥当かもしれない。1・2と3~7は



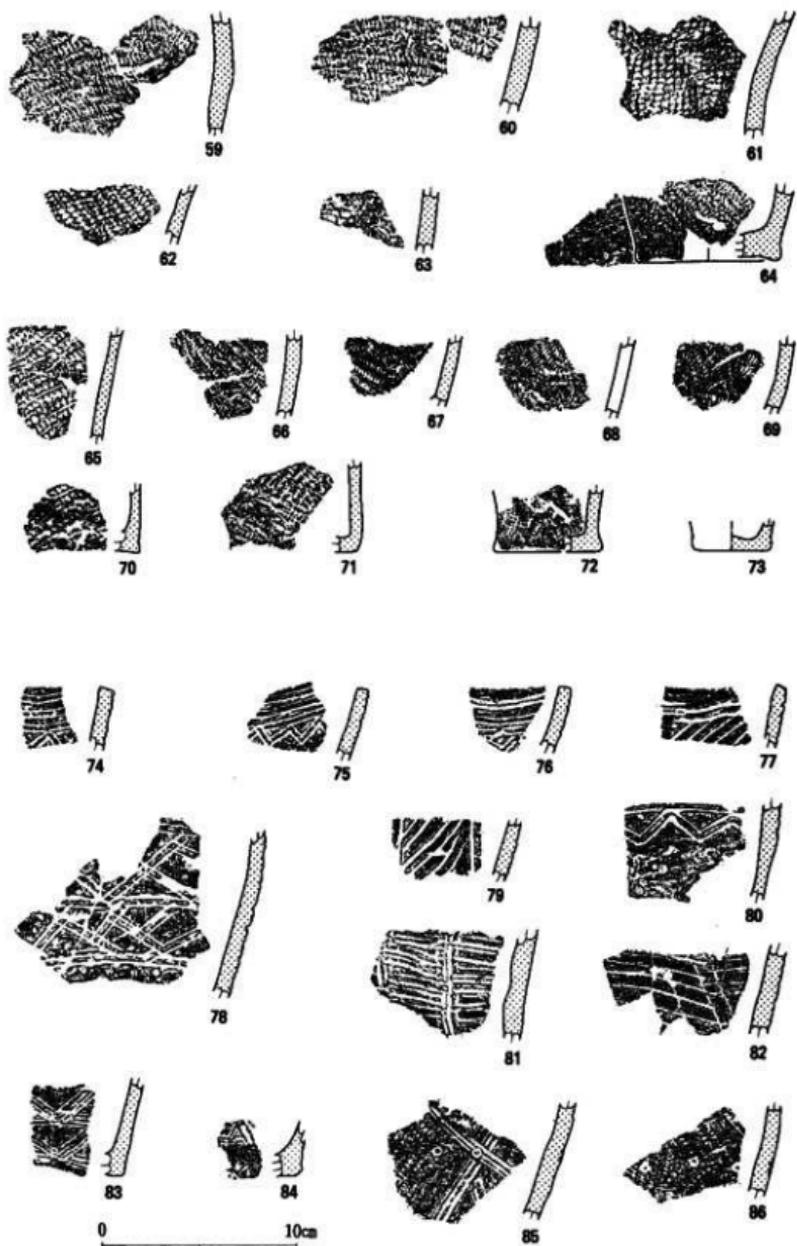
第44图 第2群I類土器拓影图(1)



第45图 第2群I類土器拓影图(2)



第46图 第2群I類土器拓影图(3)



第47图 第2群I类土器拓影图(4)

別個体であるが、いずれも縦位のR L単節縄文が施文される。

8～12は平縁であり、口縁部直下に2列の刺突がみられる。一見円形刺突のようであるが、半載竹管を90°向きを変え刺突することにより施文をしている。

13～25は縄文のみ施される。15は口縁部に小突起が付属していた痕跡があるが、形状は不明である。縄文の施文方向はすべての個体において一定ではない。

26～40は同一個体である。27口縁部破片から波状口縁と思われる。口縁部直下には3列、頸部には2列の半載竹管による押し引きがみられる。付加縄文とR L単節縄文を横位に施文することにより、羽状縄文状の文様を構成している。胎土に微細な雲母粒子を含む。

41～47は口縁部外面に並行と波状の沈線文が施される。2本の沈線が対になることから半載竹管の裏側を使用して施文されたものと思われる。

51～58は底部破片であるが、底部には網代痕等はみられない。

当遺跡からはこの期に属するかなり小型の土器が出土している。65～73に掲載しているものがそれに該当する。65は他の土器片と縄文を異にするためおそらく別個体であろう。付加縄文が施文される。70の底部破片がこれと同一個体である。66～69は同一個体であり、粒の細かいR L単節縄文を横位に施文している。72の底部破片がこれに該当する。底径は5cm程である。

74～84は縄文を施文せず、沈線による文様構成をもつ土器である。74～76・80は横位に数条巡る沈線下に鋸歯状の沈線が施される。77・79は口縁部に巡る横位の沈線より垂下する沈線内に斜位の沈線が施される。81・82は文様構成は異なるが、77・79の部類に属するものと考えられる。78は2本の沈線により数段の文様区画を設け、区画内に交差する沈線が施される。74～82は文様区画をもつものとして、先に掲載した同時期の土器との相違が指摘できる。

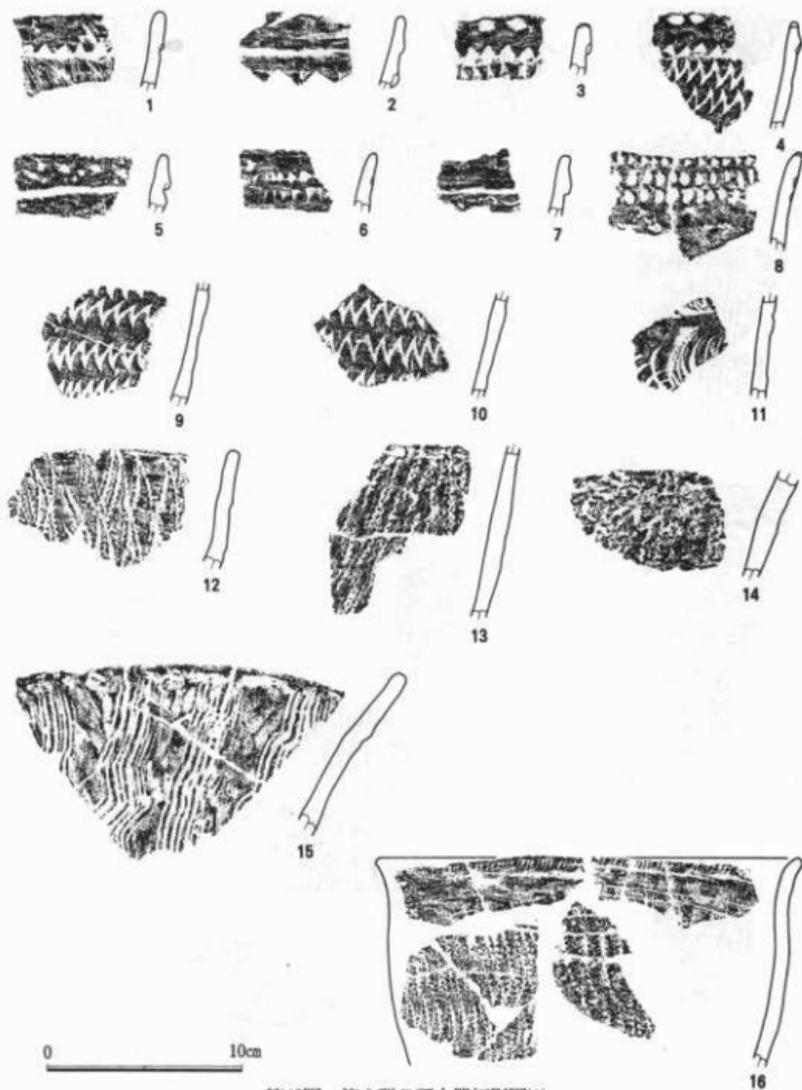
83・84は底部付近の破片であるが、胴部の最下端にまで沈線による文様が施されている。小破片のため実際の底径は算出できないが、5cm内外であろう。かなり小型である。

85・86は同一個体である。単位のまばらな縄文と交差する沈線がみられ、円形刺突が施される。円形刺突は胴部を横位に巡るものと思われる。

第Ⅱ類 浮島・興津式土器 (第48・49図, 図版21)

第1種 貝殻腹縁により施文される土器 (第48図1～14)

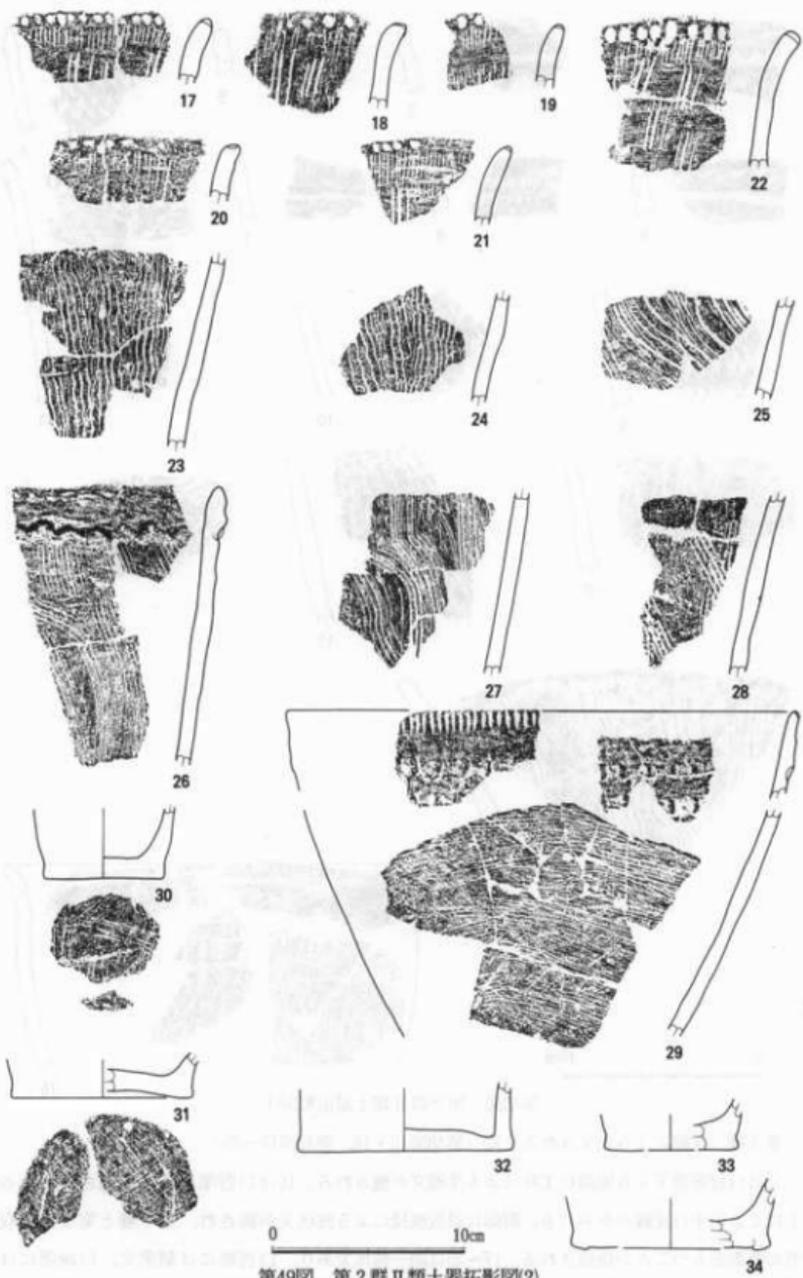
1～7は口縁部直下に三角文を有する。折返し口縁状のものも含まれ、5に至っては特に顕著である。8もへら状工具の圧着により2列の文様が施され、三角文ではないがこの範囲に含まれるものであろう。9～11は口縁部に三角文を有する土器の胴部にあたる。貝殻腹縁のロッキングによる波状文が施文される。11は貝殻腹縁をロッキングせずに直線的に押しつけ施文されている。12～14は口縁部に三角文を有さないもので、口縁部直下よりアナグラ属の貝殻腹縁による波状文がみられる。



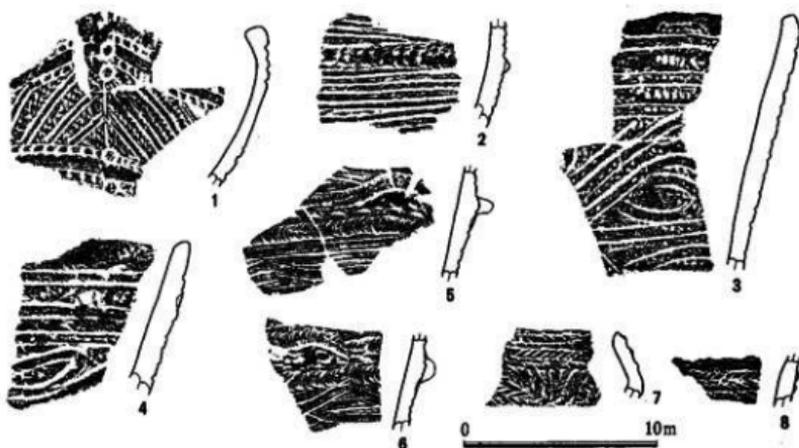
第48図 第2群Ⅱ類土器拓影図(1)

第2種 沈線により施文される土器(第48図15・16, 第49図17~29)

15は口縁部直下より櫛歯状工具による沈線文が施される。16は口唇部に刻目が施され、その下に2本の平行沈線がみられる。胴部は貝殻腹縁による波状文が施され、第1種と第2種の双方の要素をもつことが指摘される。17~25は同一個体であり、口唇部には刺突文、口縁部には



第49图 第2群Ⅱ類土器拓影图(2)



第50図 第2群Ⅲ類土器拓本影図

刻目が施され、共にへら状工具によるものと思われる。胴部には櫛歯状工具による沈線が施される。26～28は同一個体である。口縁部は折返したように厚みを持ち、へら状工具による圧着がみられるが、三角文とは工具の使用法で区別できる。胴部には櫛歯状工具による沈線がみられる。29は口唇部にへら状工具による刻目が、口縁部直下には2列の刺突文がみられ、胴部は横位の沈線で満たされている。同じく櫛歯状工具によるものである。

30～34は底部破片である。30・31は底部に細かい沈線がみられるが、胴部にみられる沈線とは太さが異なるため、施文具の違いを指摘できる。

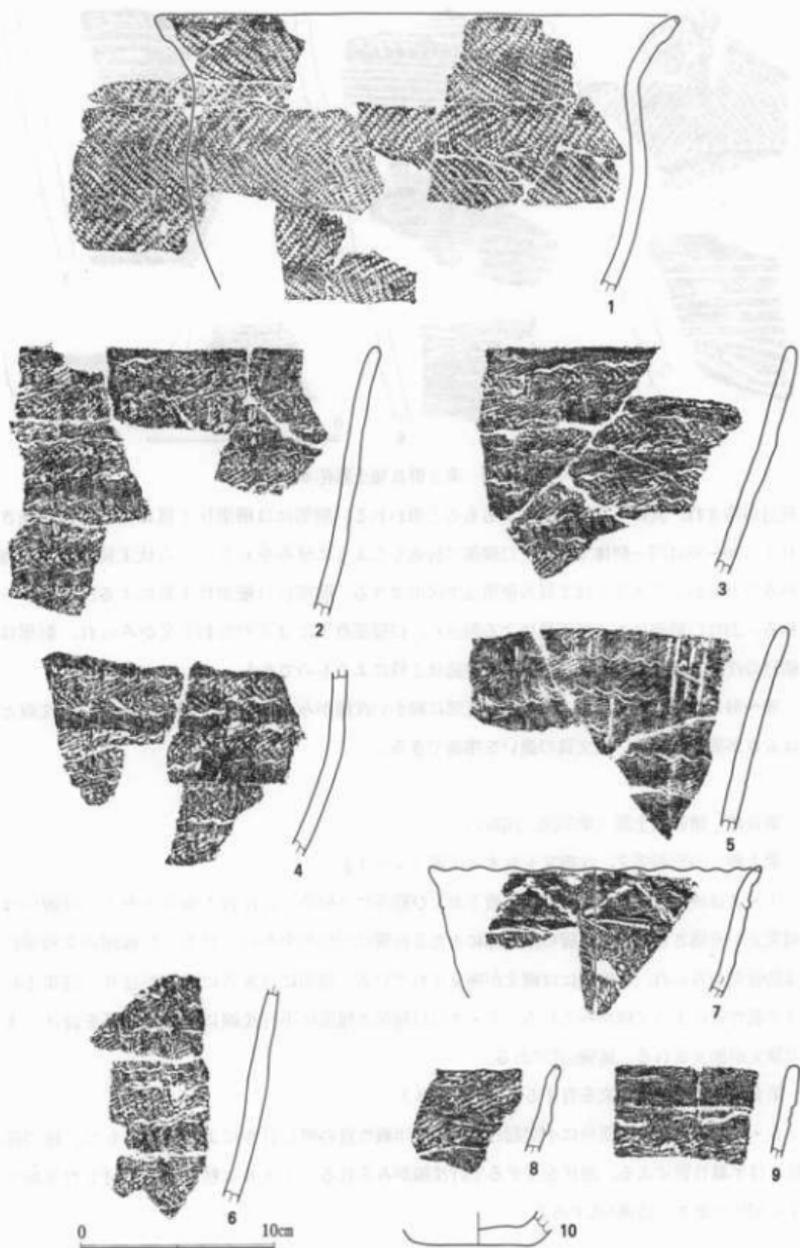
第Ⅲ類 諸磯系土器（第50図、図版22）

第1種 円形刺突文、沈線文を有する土器（1～4）

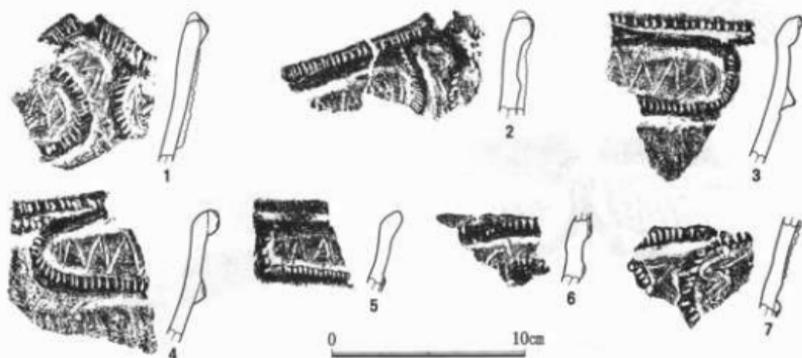
1・2は波状口縁であり、口縁部直下および頸部に2列の平行沈線が施文される。沈線内は刺突文が充填され、波状口縁の最高部にあたる位置に円形刺突がみられる。口縁部の文様帯には肋骨文がみられ、沈線間には縄文が施文されている。頸部にはさらに隆帯が巡り、隆帯上には半載竹管による文様がみられる。3・4は口縁部と頸部に平行沈線により文様帯を設け、木の葉文が施文される。諸磯a式である。

第2種 条線、浮線文を有する土器（5～8）

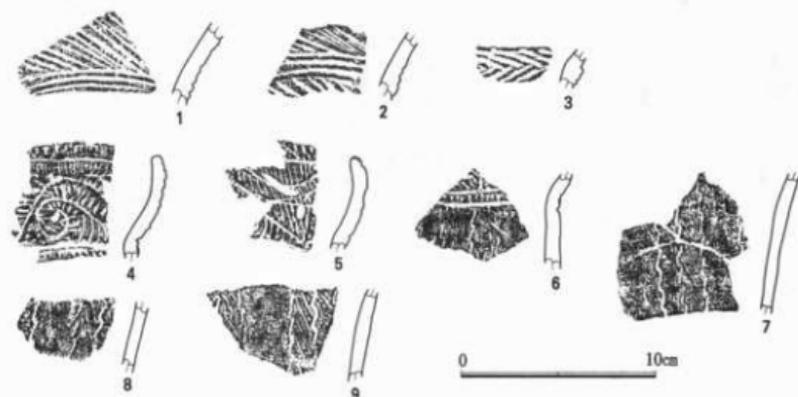
5・6は胴部最大径部分に小突起と、2列の半載竹管の押し引きによる文様をもつ。他の部位には半載竹管による、波状を呈する平行沈線がみられる。7・8は粘土紐を添付した浮線文上に刻目を施す。諸磯b式である。



第51图 第3群I類土器拓影图



第52図 第3群Ⅱ類土器拓影図



第53図 第4群Ⅰ類土器拓影図

第3群土器 前期末～中期初頭に属する土器

第Ⅰ類 下小野式土器（第51図，図版22）

第1種 横位の結節縄文を有する土器（1～6）

1は口縁部直下より全面に縄文が施文される。結節はみられないが原体を組み合わせて横位に施文される。推定口径27cmを測り，口縁部に厚みをもつ。2～4は結節が顕著であるが，焼成が悪く器表面は荒れている。5・6は器表面に縦位の凹凸がみられる。胎土は緻密で焼成も良好である。

第2種 折返し口縁，原体圧痕を有する土器（7～9）



第54図 第4群Ⅱ類土器拓影図

7は口唇部に指頭による押圧がみられ、口縁部に鋸歯状の原体圧痕が施される。8は口縁部に細かい縄文が施文される。9は折返し口縁上には施文されず、口縁部以下に結節縄文が施されるものである。10の底部破片は底径6cm程である。文様構成は不明であるが、7の個体の胎土と同一である。

第Ⅱ類 隆帯文様区画内に鋸歯状沈線を有する土器 (第52図, 図版23)

口縁部にそって隆帯による楕円形の文様区画をもつもので、文様要素では中期阿玉台式土器に類似するが、胎土は先に述べた下小野式土器に近く、ここでは前期末～中期初頭に属する土

器として扱った。

波状口縁であり、最高部には刻目が施される。口縁は一樣に厚みをもち、隆帯としての要素を兼ねている感がある。口縁部および楕円形を呈する隆帯状には細かい刻目をもち、へら状工具の着着により施文されたものと思われる。楕円形の隆帯内には鋸歯状の沈線がみられるが、深く刻み込まれたものではなく、土器表面を撫でるように施文されたものである。口縁部から頸部のみ依存しているため、頸部以下の文様構成は不明である。

第4群土器 中期に属する土器

第Ⅰ類 五領ヶ台式土器 (第53図, 図版23)

第1種 集合沈線文が施文される土器 (1~3)

半截竹管による集合沈線文が器表面全体に施される。口縁下には2状の沈線が走り、文様区画を設けている。3にみられるように集合沈線文が線杉状となる部位もある。

第2種 口縁部文様帯および結節縄文を有する土器 (4~9)

平行沈線により口縁部文様帯を区画し、区画内には沈線による文様が施される。口縁部文様帯から胴部下半にかけて、縦位の結節縄文が施文される。

第Ⅱ類 加曾利E式土器 (第54図, 図版23・24)

第1種 重弧文の施文される土器 (1)

口縁部のみ遺存している。口縁部直下には棒状の粘土紐を添付し、弧状の沈線が施される。当遺跡から出土している類型の土器片はこの1点のみである。

第2種 口縁部に把手を有する土器 (2)

通孔する把手を口縁部直下にもち、波状口縁と思われる。他の部位の文様はわからないが、加曾利EⅠ式と思われる。胎土は密で焼成も良好であり、以下に掲載した土器とこの点でも相違がみられる。

第3種 口縁部文様帯および磨消懸垂文を有する土器 (3~11)

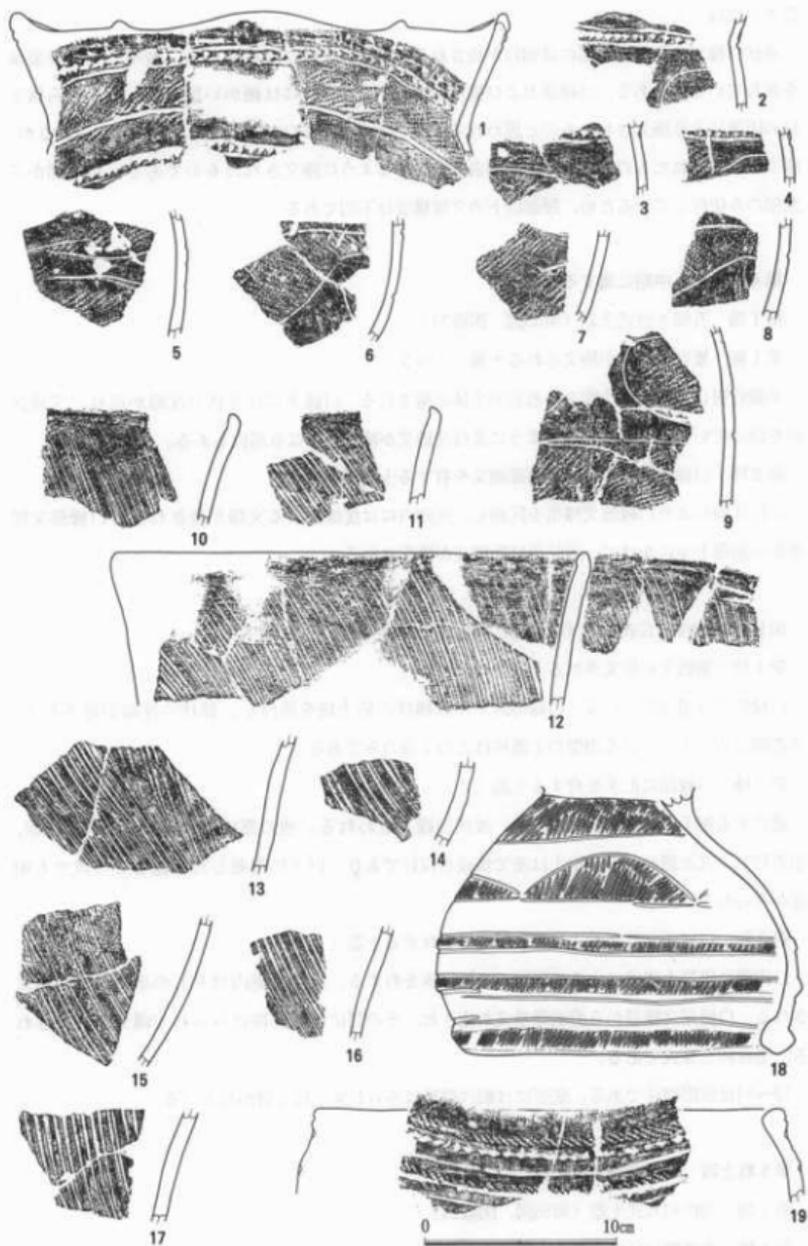
口縁部に隆帯と沈線による楕円形の文様区画を有する。文様区画内はRLの単節縄文が施文される。口縁部文様帯から磨消懸垂文が施され、その間には無文帯はみられず縄文が施文される。加曾利EⅢ式である。

12~14は底部破片である。底部には網代痕等はみられず、良く磨かれている。

第5群土器 後期に属する土器

第Ⅰ類 加曾利B式土器 (第55図, 図版24)

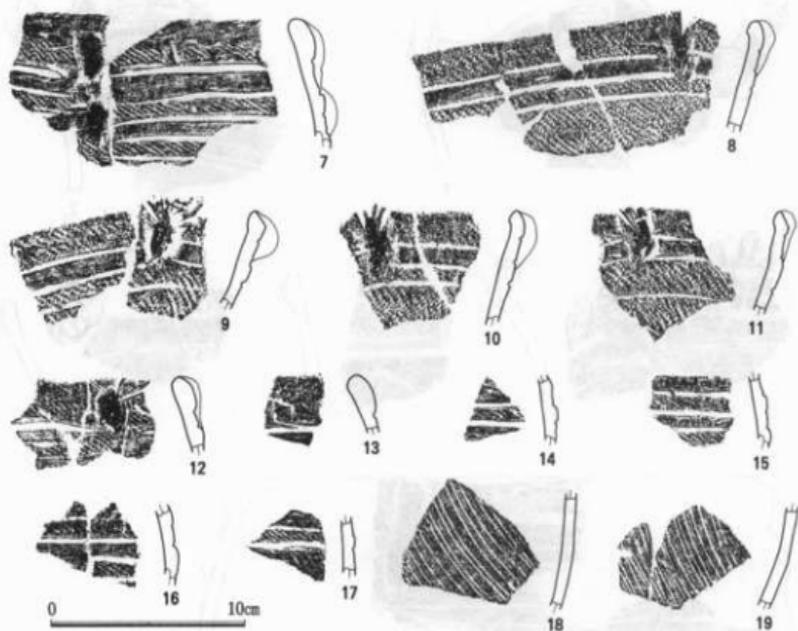
第1種 磨消縄文が施される土器 (1~9)



第55图 第5群I類土器拓影图



第56图 第5群II類土器拓影图(1)



第57図 第5群Ⅱ類土器拓影(2)

1～9は同一個体である。波状口縁の単位の間には小突起がみられる。4単位の波状口縁である。口縁直下には刺突を施した沈線が巡り、頸部に1状沈線を巡らせ縄文を施文している。頸部下には刺突を施した微隆帯が巡り、この微隆帯と頸部の沈線間は縄文を磨り消している。加曾利B式土器は一般に5単位であり、1～9の土器のように4単位の波状口縁となるのは曾谷式土器の一つの要素とされるが、口縁部から頸部にかけて横位に巡る1条の沈線により無文帯を形成しており、また、口縁部直下の平行沈線間に刺突を施したものは加曾利B式土器に多くみられる。加曾利B式土器と曾谷式土器の両方の文様要素を兼ね備え、加曾利B3式土器から曾谷式土器の古い段階のものに比定できるが、加曾利B3式土器に含めるのが妥当であると思われる。

胴部の磨消縄文は、典型的な曾谷式土器にみられるような、半円を互い違いにしたものとは異なり、2・9にみられる楕円形のもの、6・8のように変形円の双方を組み合わせていると思われるが、破片が少数なため文様構成の復元には難がある。胴部下位には沈線が巡り、以下には縄文を充填している。

第2種 条線文が施される土器 (12~17)

口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。第1種で述べた1~9の土器と同じ器形を呈するものと思われる。口縁部直下より斜位の条線が施される。

第Ⅱ類 安行式土器 (第56・57図, 図版25)

第1類 隆帯上縄文および磨消縄文が施される土器 (18・19)

18は台付鉢である。鉢の部分は遺存していない。内面は削り痕が残る、磨きは施されていない。裾部は隆帯状に厚みをもち、縄文が施文されている。上位には上下に沈線を伴う2条の隆帯が回り、隆帯上には縄文が施文される。また半円の沈線区画を設け、区画内に縄文を充填し以外を磨り消している。

19も18と同一の文様構成をもつものと考えられ、隆帯上に縄文を施文するものである。口縁部直下には連続した刺突を施している。18に比べ隆帯が発達していないが、あるいは18の鉢の部分の可能性もある。

第1種 裝飾突起を有する土器 (1~5)

精製土器である。1は4単位の裝飾突起をもち、突起部と各単位の間には、沈線を施した小突起がみられ、口縁部には縄文が施文される。裝飾突起の上部は遺存していないため明らかではないが、通常の三つ又に分かれるものではなく、二又に分かれるものと思われる。胴部上位には刻目をもつ小隆帯が回り、裝飾突起の位置に∞状の貼付文がみられる。胴部を巡る小隆帯の間には斜位の条線が施されている。4・5も同一の文様構成と思われる。安行Ⅱ式である。

2・3は口縁部直下にくびれをもつ深鉢である。口唇部には刻目をもつ小突起が2対添付され、口縁部の同一位置には棒状の突起がみられる。口縁下の小隆帯上には微細な刻目が付けられ、口縁直下の連続した刺突と共に一種の口縁部文様帯を形成している。くびれ部より下位は横位の沈線が回り、沈線間に縄文を施している。安行Ⅰ式である。

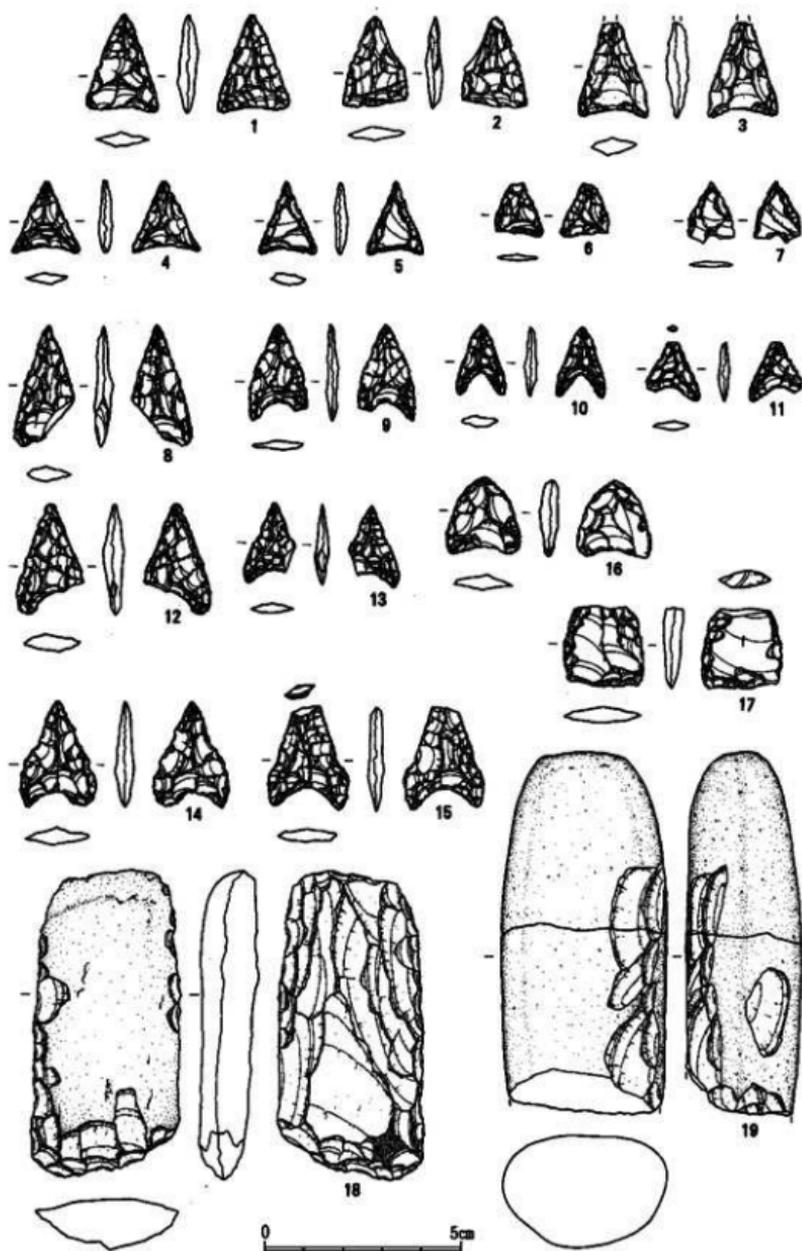
第2種 口縁部文様帯および条線文が施される土器 (6~19)

口縁部に4単位の棒状突起がみられ、沈線を伴う数条の隆帯により口縁部文様帯を形成するものである。隆帯上には縄文が施文される。口縁部文様帯以下は斜位の条線文が施される。安行Ⅰ式の粗製土器である。

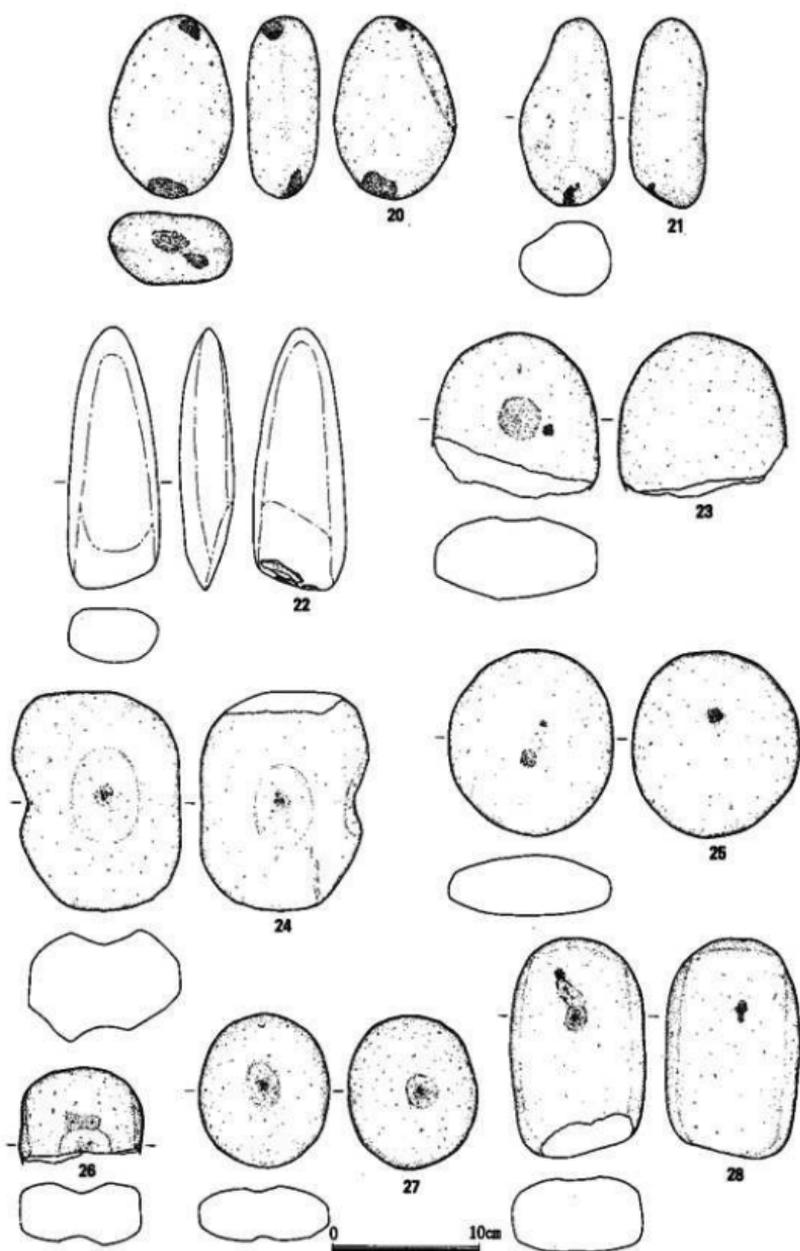
包含層出土石器 (第58・59図, 第11表, 図版26)

包含層より出土している石器の数量は、包含層の面積、土器の出土量に比べるとかなり少ない。

出土している土器のうち、半数以上を占めるのが前期黒浜期であるが、石器についてもほとんどのものがこの期に属するものと考えられ、特にチャート製の石鏃に関しては断言できる。



第58図 グリッド出土石器実測図(1)



第59図 グリッド出土石器実測図(2)

標記番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	
5800 1	011伊穴 2	石鏃	チャート	2.5	1.8	0.4	1.68	
5800 2	4B-11, 8	石鏃	チャート	2.3	1.7	0.4	1.51	
5800 3	4B-22, 9	石鏃	安山岩	2.5	1.8	0.6	1.82	
5800 4	4B-21, 14	石鏃	頁岩	1.9	1.7	0.3	0.71	
5800 5	4B-24, 2	石鏃	頁岩	1.9	1.4	0.3	0.67	
5800 6	4B-41, 1	石鏃	チャート	1.3	1.2	0.2	0.40	
5800 7	3B-90, 1	石鏃	チャート	1.5	1.2	0.1	0.33	
5800 8	4B-21, 3	石鏃	チャート	3.1	1.5	0.5	1.51	
5800 9	4B-13, 3	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.3	0.85	
5800 10	4B-11, 11	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.3	0.66	
5800 11	3B-95, 4	石鏃	チャート	1.5	1.3	0.3	0.42	
5800 12	3A-89, 2	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	1.6	1.70	
5800 13	一括	石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.63	
5800 14	3A-66, 3	石鏃	黒曜石	2.6	2.0	0.4	1.70	
5800 15	020号, 1	石鏃	黒曜石	2.0	2.0	0.5	2.26	
5800 16	3B-23	石鏃	安山岩	1.9	1.9	0.4	1.58	
5800 17	4B-32, 3	石鏃	チャート	2.6	1.9	0.4	1.59	
5800 18	3B-84, 2	打製石斧	蛇紋岩	7.7	3.7	1.5	64.0	
5800 19	3B-53, 2 3B-52, 2	磨製石斧	砂岩	9.1	4.2	2.9	182.0	
5900 20	3B-93, 11	礫石	砂岩	6.3	4.1	2.4	92.0	
5900 21	3B-90, 12	礫石	石英斑岩	6.5	3.2	2.6	72.0	
5900 22	3A-68, 2	磨製石斧	雲母片岩	13.4	4.7	2.8	265.0	
5900 23	3B-92, 2	凹石	石英斑岩	8.4	8.5	4.2	452.0	
5900 24	003伊穴 1	凹石	砂岩	11.3	8.6	5.7	500.0	
5900 25	3B-61, 2	凹石	砂岩	9.5	8.5	3.1	428.0	
5900 26	4B-05, 8	凹石	安山岩	4.8	6.3	3.2	149.0	
5900 27	3A-78, 5	凹石	石英斑岩	8.0	6.6	2.9	235.0	
5900 28	3B-43, 2	凹石	砂岩	11.3	6.9	3.9	500.0	

第11表 グリッド出土石器表

打製石斧を除く、剥片を素材とする石器は石鏃以外にみられず、また黒曜石、チャート等の原石、素材剥片、碎片の出土量も、同様の包含層の規模をもつ他の遺跡に比べると少ない。

1～17は石鏃である。形態は、基部が平坦もしくはわずかに湾曲し、形状は二等辺三角形、正三角形を呈するもの(1～8)。有茎で茎が尖り、平面形は二等辺三角形もしくは正三角形を呈するもの(9～11)。有茎で茎に丸みを帯びるもの(12)。有茎で、平面形は肩が張る二等辺三角形を呈するもの(13～15)。無茎で、平面形は丸みを帯びた正三角形もしくは二等辺三角形を呈するもの(16・17)の5種に大別でき、便宜的にA・B・C・D・E型として説明を加えたいと思う。A型についてさらに詳細を述べると、鏃先から基部までは直線的で、基部の両端は鋭く尖る。素材剥片自体が薄いものと思われ、よって器厚は薄いものが多い。チャート製

のものが多く、青灰色を呈するもので、青色の節理状のものが縦横にみられるものとは異なる。B型は茎が鋭く、基部はかなり内側に深く作出されているため、器厚の最大値はこの剥離の交換点に来るものである。やはり青灰色を呈するチャート製のものであり、素材剥片はいずれも薄い。このA・B型は前期黒浜期に伴うものと思われ、素材剥片が作出された母岩は、直径4cm内外のチャートの扁平礫である可能性が高い。C型とした12は茎が丸みを帯び、器厚は厚い。石質は黒曜石であり、形状、石質からも中期に属するものと思われる。D型の13～14は茎付近で外側にむかい張り出すような形状を呈し、いずれも黒曜石製である。14に至っては中期にも類似した形状のものがみられるが、13・15は後期に属するものと考えられる。16・17は他のものと比較して粗い調整が施され、類似した形状のものは各時期にみられるが、石質の観点から前期に属するものと想定される。

18の打製石斧は蛇紋岩製であり、片側に原石面を留める。刃部は鈍角で一部摩滅する箇所がみられる。小型のもので、同様の形状のものは早期条痕文系土器に共伴する例がみられるが、これは扁平礫に刃部作出の調整を加える簡単なものであり、剥片素材の18とは異なるため、形状の類似から早期に属するものとするのは早計過ぎる。

19・22は磨製石斧である。19は棒状礫の側縁に形状を整える調整を施し、全面を研磨しているものである。刃部が欠損しているため刃部形状は不明であるが、おそらく同じように形状を整えた後に、研磨して刃部を作出しているものと思われる。条痕文系土器に伴い出土する例がよくみられる。22は全面がよく研磨される。刃部にみられる剥離は、使用の際の剥落痕であろう。雲母片岩製で、前期に属するものであろう。

20・21は敲石である。微細ではあるが敲打痕がみられる。

23～28は凹石である。ほぼ全部のものが側縁を中心に研磨されており、25以外は凹部も良く整形している。25はあるいは台石の可能性もある。

第3節 奈良・平安時代

今回の調査では、この期に属する住居跡、土壌等の遺構は確認されず、新期テフラ層より土師器環を中心とする遺物集中箇所が2地点検出された。

奈良・平安時代遺物包含層として扱うには遺物の集中箇所が明確であり、また出土する遺物全てが該期の土器と比較して小型なため、遺構としての痕跡はみられないが、日常生活とは異なる、祭祀的な意味をもつものとして祭祀遺構とした。2地点のうち北側の3B-01、11グリッドに位置するものを第1祭祀遺構、3A-28、29、38グリッドに位置するものを第2祭祀遺構とした。

出土している遺物は壺、甗、坏等であるが、壺、甗は出土個体数が少ない。坏は出土個体数が多く、器形、調整法で分類が可能である。ここでは坏にのみ着目し形態分類を試み、3群4類に分類した。分類基準は以下のとおりである。

I群 体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。器形的に丸みを帯び、鬼高期にみられる環形土器に類似する。

内面から口縁部にかけてロクロ成形時の横位のナデ、体部外面は口縁部直下より横位の回転ヘラケズリが施される。底部はヘラ調整が全面に施され、切り離し手法は不明である。

II群 体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、体部外面には横位の回転ヘラケズリが施されるもの。二類に分類した。

a類 縁部は直線的に立ち上がり、底部に厚みをもつ。口径と底径の比は小さく、箱形を呈する。体部外面下位に回転ヘラケズリが施される。底部はヘラケズリが施されるが、静止糸切り痕を留め、無調整のものもみられるため、ほとんどが静止糸切りによる切り離し手法であると思われる。

b類 体部から口縁部にかけてやや内彎ぎみに立ち上がるが、立ち上がり角度は緩やかである。口縁部に厚みもち、数量的に希少である。内面はヘラミガキ、外面は回転ヘラケズリが施され、底部はヘラ調整が成される。

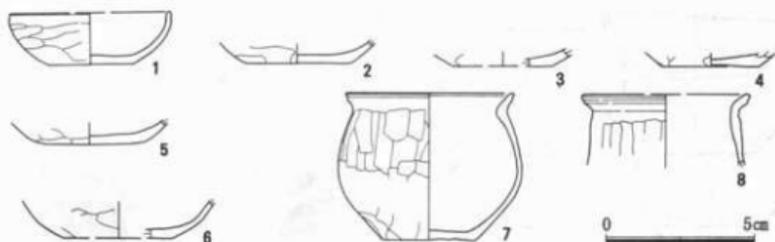
III群 体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもので、口縁部付近が若干外反し、厚みをもつ器形である。二類に分類できる。

a類 口径と底径の差が1.7以上である。内面はヘラミガキ、口縁部から体部外面にかけてロクロ成形時のヨコナデが施される。底部はヘラ調整、回転ヘラ切りが主であり、II群にみられる静止糸切りによる切り離しはみられない。

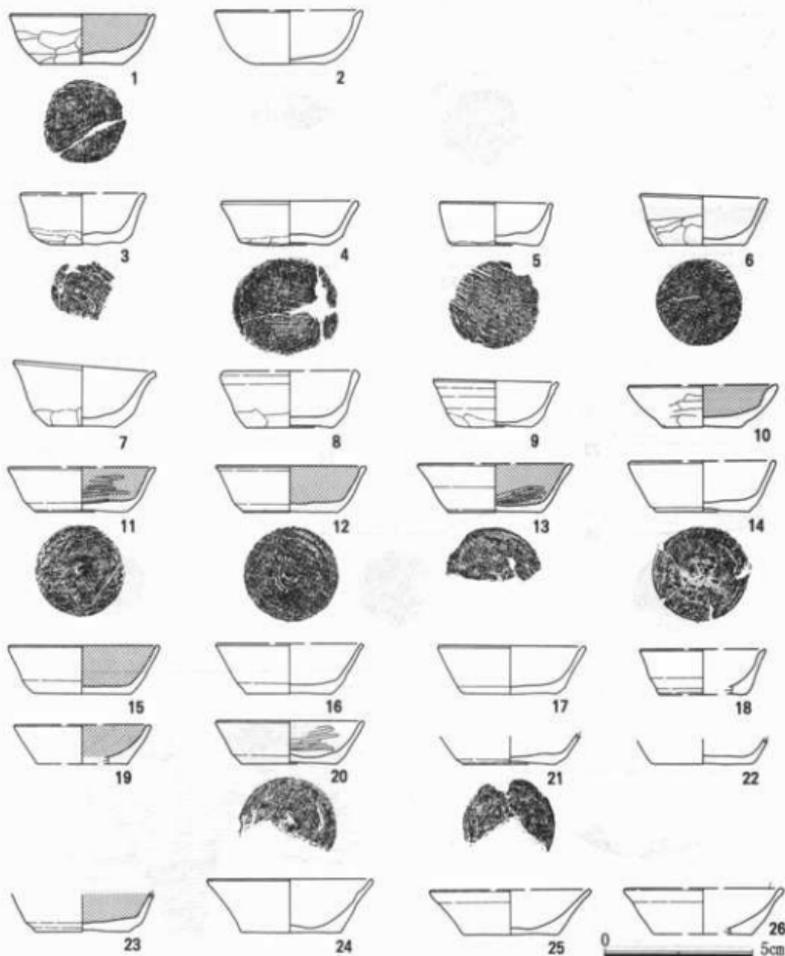
b類 体部から口縁部にかけて、やや外反しながら浅く立ち上がり、特に底部内面から体部にかけて、くびれることなく緩い傾斜を保つ。このためこの付近の器厚が最も厚くなる。内面から外面にかけてロクロ成形時の横ナデ、底部は平坦にヘラ調整が施される。

第1祭祀遺構（附図2、第60図、第12表、図版27）

長径3m、短径2mの範囲で土器が集中する。出土する土器は壺1個体、甗1個体、坏6個体である。器種の違いによる出土位置の企画性はみられず、個々の土器も故意に打ち割られたかのように小破片となっている。



第60図 第1祭祀遺構出土遺物実測図



第61図 第2祭祀遺構出土遺物実測図



第62図 グリッド出土遺物実測図

遺物

1～6は環である。口縁部まで遺存しているのは1のみで、他は底部破片である。I群が大半を占め、6のみがII群a類である。胎土は密で砂粒を含み、焼成は全て良好である。

7は甕で、口径と器高がほぼ同じであり、該期のものに比べるとずっしりとした感がある。口縁部は彎曲せずに直線的に張り出すが、口縁部外面直下には明瞭な稜を残している。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。

8は甕である。口縁部から胴部上半のみの遺存で、器種判別の決め手となる底部はないが、頸部からやや膨らみもちながらも垂直に底部に向かうため、7の甕と比較して甕とした。胎土は7の甕と同一で砂粒を多く含み密である。

第2祭祀遺構（附図2、第61図、第13表、図版28・29）

長径10m、短径7mの範囲に土器が分布する。さらに細かく分布を観察すると、中央に長径5mの長楕円形を呈する土器集中地点が存在し、その周囲に小規模な集中がみられる。

出土する土器はすべて環であり、個体数は26個体を数える。環の形態は多種であるが、第1祭祀遺構と同様に、形態による出土位置の企画性はみられない。出土している土器の遺存度は高く、完形で出土する個体が多い。

遺物

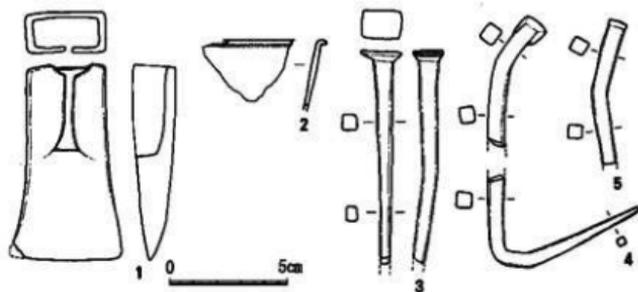
出土している土器はすべて環であり、26個体を数える。このうち I群としたものは2個体、II群a類は7個体、II群b類は1個体、III群a類は14個体、III群b類は2個体と、III群a類に属するものが半数以上を占める。

押出 番号	遺物 番号	器質	器種	計測値			成形法	調査法 内面：検眼—口縁部 外面：検眼—下位—底面	備考	分類
				口径	器高	底径				
6000 1	3B-11 25,28	土師器	環	(10.8)	3.5	5.8	ロクロ	ナデ—ナデ ナデ—ヘラケズリー—ヘラ		I
6000 2	3B-11 18,20	土師器	環	?	?	7.0	ロクロ	ナデ—? —?—ヘラケズリー—ヘラ		I
6000 3	3B-10 1	土師器	環	?	?	(6.7)	ロクロ	ナデ? ?—ヘラケズリー—ヘラ		I
6000 4	3B-11 23,24	土師器	環	?	?	6.6	ロクロ	ナデ—? ?—ヘラケズリー—ヘラ		I
6000 5	3B-0L,4 3B-10,2 3B-11,5	土師器	環	?	?	6.3	ロクロ	ナデ—? ?—ヘラケズリー—ヘラ		I
6000 6	3B-11 7,8,9,11 22,27,31 34	土師器	環	?	?	(7.4)	ロクロ	ミガキ—? ?—ヘラケズリー—?		Ib
6000 7	3B-01 3,6	土師器	甕	11.0	10.1	6.2	ロクロ	ナデ—ナデ ナデ—ヘラケズリー—ヘラ		
6000 8	3B-01,3 3B-11,3 13,14,18 19,20,27,41	土師器	甕	(10.9)	(5.9)	?	ロクロ	ナデ—ナデ ナデ—ヘラケズリー—?		

第12表 第1祭祀遺構出土土器表

発掘 番号	遺物 番号	器質	器種	計測値			成形法	調整法 内面：体部-口縁部 外面：体部-下位一段部	備考	分類
				口径	器高	底径				
61図 1	3A-29 7,8,9,14	土師器	坏	9.5	3.3	5.5	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ	静止糸切り 内面黒色処理	I
61図 2	3A-28 11,12,15	土師器	坏	(9.6)	3.5	4.7	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ		I
61図 3	3A-28,45 3A-28,9	土師器	坏	(8.1)	3.4	4.6	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-無調整	静止糸切り	IIa
61図 4	3A-28 21,	土師器	坏	9.0	2.9	5.0	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-無調整	静止糸切り	IIa
61図 5	3A-29 5,	土師器	坏	7.5	2.9	5.9	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-無調整	静止糸切り	IIa
61図 6	3A-29 1,4	土師器	坏	8.4	3.4	5.8	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ	静止糸切り	IIa
61図 7	3A-28 14,	土師器	坏	9.3	4.4	4.5	ロクロ	ナデ-ナデ-ヘラケズリ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ		IIa
61図 8	3A-29 6,7,	土師器	坏	(8.8)	3.8	5.8	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ		IIa
61図 9	3A-28 47,	土師器	坏	8.3	3.2	5.0	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ		IIa
61図 10	3A-27 4,5,7,8	土師器	坏	(9.8)	2.7	5.2	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ヘラケズリー-ヘラ	内面黒色処理	IIb
61図 11	3A-28 10,12,	土師器	坏	(9.8)	3.0	6.2	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	回転ヘラ切り 内面黒色処理	IIa
61図 12	3A-28 33,42,	土師器	坏	9.9	3.1	6.4	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	回転ヘラ切り 内面黒色処理	IIa
61図 13	3A-28 22,27,28,	土師器	坏	(10.3)	3.3	6.4	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	回転ヘラ切り 内面黒色処理	IIa
61図 14	3A-29 10,11,13,15	土師器	坏	(9.8)	3.4	6.4	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	回転ヘラ切り	IIa
61図 15	3A-28 35,36,37, 38,42,46	土師器	坏	9.9	3.3	6.5	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	内面黒色処理	IIa
61図 16	3A-28 22,45,	土師器	坏	(9.8)	3.3	5.7	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
61図 17	3A-28 16,	土師器	坏	9.9	3.3	6.4	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
61図 18	3A-28,37, 3A-28,11,	土師器	坏	(8.4)	3.0	(5.7)	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
61図 19	3A-27 3,6,	土師器	坏	(8.1)	2.7	(6.2)	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	内面黒色処理	IIa
61図 20	3A-28 2,5,	土師器	坏	9.8	2.9	6.5	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-無調整	回転ヘラ切り	IIa
61図 21	3A-29 2,17,31,	土師器	坏	?	?	(6.4)	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	回転ヘラ切り	IIa
61図 22	3A-28 17,18,	土師器	坏	?	?	6.7	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
61図 23	3A-28 6,10,	土師器	坏	?	?	6.4	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	内面黒色処理	IIa
61図 24	3A-29 1,3,	土師器	坏	11.1	3.6	6.6	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
61図 25	3A-29 18,22,23, 25,28,	土師器	坏	(10.8)	3.0	6.4	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIb
61図 26	3A-26 31,	土師器	坏	(10.5)	3.1	(5.7)	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIb

第13表 第2条記遺構出土土器表



第63図 グリッド出土鉄器実測図

グリッド出土土器（第62図、第14・15表、図版29）

先に述べた第1、第2祭祀遺構以外でも単独で類似した土器が出土している。また祭祀遺構では出土していない、小型の高台付塊が出土している。

遺物

1～22は祭祀遺構で出土している土器と同じ性格をもつものである。1～17は環で、第I群に属するものが6個体、II群a類は6個体、II群b類は1個体、III群a類は3個体、III群b類は1個体である。小破片が多く、第1、第2祭祀遺構で出土している土器との接合関係は全くない。

18は甕である。口縁部から頸部にかけての破片であり、口縁部に明確な稜を残す。胴部の調整はわからないが、おそらく縦位のヘラケズリであろう。器形的には第1祭祀遺構で出土するものと同じであるが、胎土中の砂粒が少量である。

19～22は高台付環である。19は体部中位の調整の変換点付近より器厚が薄くなり、口縁部付近で再度厚みをもつ。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。口縁部内外面に横位のヘラミガキが施される。内面の他の部位は暗文状のヘラミガキである。高台部は途中で外反することなく直線的に外方に向かってのびる。20～22は高台部から環部の一部のみの残存で環部の調整はわからないが、19と同一であろう。20については高台部を成形する際に環部までかなりヘラ調整されているため、断面形状は他のものに比べて高台部が高く感じられる。胎土は密で細かく、砂粒等の混入物はほとんどない。

23・24は須恵器環であり、形状は若干異なるが成形法、胎土、焼成は同一である。23はロクロ成形痕が明瞭にみられ、口縁部がやや外反する。24はロクロ成形痕は明瞭ではなく、底部から体部にかけて急に立ち上がる器形を呈する。

25は高台付塊と思われる。高台部はやや外反する感があり、体部は一定の曲線をもちながら立ち上がっている。外面は横位のナデ、内面はヘラミガキが施され、黒色処理される。

26は皿である。口縁部付近は外反しながら外に張り出す。底部には糸切り痕がみられ、切り

離し後の調整は施されていない。内外面の調整は共に横ナデが施される。成形時に失敗したのか、いびつな器形である。砂粒を多く含む焼成は良好である。

27は高台付皿で、器形的には26の皿と全く同一であり、口縁部付近から外反しながら外に張り出す器形である。高台部の剥落した部位には、ヘラ調整痕がみられ、皿部の底部を調整した後高台部を添付しているのが顕著である。砂粒を多く含む焼成は良好である。

28は皿である。底部に厚みをもつが、皿部は同じ厚みを保ちながら立ち上がる。内外面共に横ナデ、底部には糸切り痕が認められ、切り離し後の調整は施されない。砂粒を多く含む焼成は良好である。

29は飯の底部破片である。底部には円形の穿孔がみられ、底部の外周にそって規則的に設けられているものと思われ、ヘラ状の工具によるものである。胴部外面はヘラケズリ、内面は横

押出 番号	通物 番号	器質	器種	計測値			成形法	調整 内面：鉢部-口縁部 外面：鉢部-下位-底面	備考	分類
				口径	高さ	底径				
6290 1	4B-05.2 4B-15.1	土師器	環	12.1	4.5	7.3	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		I
6290 2	3A-36.1 3A-37.1	土師器	環	(10.8)	3.4	4.0	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		I
6290 3	4B-04 1.	土師器	環	(11.2)	?	?	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-?		I
6290 4	4B-04	土師器	環	(11.5)	?	?	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-?		I
6290 5	3B-62.1 3B-63.1	土師器	環	?	?	(7.7)	ロクロ	ミガキ-? ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		I
6290 6	4B-00 7.	土師器	環	?	?	(6.2)	ロクロ	ナデ-? ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		I
6290 7	3A-29 1.	土師器	環	(9.8)	3.7	5.1	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-無調整	静止糸切り	IIa
6290 8	3A-29 1.	土師器	環	(8.0)	3.2	5.3	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ヘラケズリ-無調整	静止糸切り	IIa
6290 9	3B-05 1.	土師器	環	?	?	(5.7)	ロクロ	ナデ-? ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		IIa
6290 10	2A-87 1.	土師器	環	?	?	(4.7)	ロクロ	ナデ-? ナデ-ヘラケズリ-ヘラ		IIa
6290 11	3A-19 1.	土師器	環	?	?	7.8	ロクロ	ナデ-? ?-ヘラケズリ-ヘラ		IIa
6290 12	4B-01.2 4B-11.7	土師器	環	?	?	6.2	ロクロ	ナデ-? ?-ヘラケズリ-ヘラ		IIa
6290 13	2B-51 1.	土師器	環	?	?	(5.9)	ロクロ	ナデ-? ?-ヘラケズリ-ヘラ		IIb
6290 14	2B-03 1.	土師器	環	(11.9)	3.8	(6.7)	ロクロ	ミガキ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ		IIa
6290 15	4B-20 3.	土師器	環	?	?	5.6	ロクロ	ナデ-? ?-ナデ-無調整	回転糸切り	IIa

第14表 グリッド出土土器表(1)

神田 番号	遺物 番号	器質	器種	計測値			成形法	調整法 内面：胎土-口縁部 外面：胎土-下位一底部	備考	分類
				口径	器高	底径				
6200 16	3A-79 1.	土師器	環	?	?	4.0	ロクロ	ナデ-? ?-ナデ-無調整	停止糸切り	Bb
6200 17	3B-60	土師器	環	?	?	5.9	ロクロ	ナデ-? ?-ナデ-ヘラ		Ba
6200 18	3B-63 1.	土師器	壺	(11.3)	(2.8)	?	ロクロ	?-ナデ ナデ-ヘラケズリ-?		
6200 19	3B-86 6.	土師器	高台付環	(8.5)	3.9 台(3.8)	5.4 台(4.7)	ロクロ	ミガキ-ミガキ ミガキ-ナデ-ヘラ-ナデ		
6200 20	3B-78 2.	土師器	高台付環	?	?	4.4 台(1.1)	ロクロ	ミガキ-? ?-ナデ-ヘラ-ナデ		
6200 21	3B-95 1.	土師器	高台付環	?	?	5.4 台(3.4)	ロクロ	ミガキ-? ?-ナデ-ヘラ-ナデ	内面黒色処理	
6200 22	3B-90 7.	土師器	高台付環	?	?	(8.9) 台(3.9)	ロクロ	ミガキ-? ?-ナデ-ヘラ-ナデ	内面黒色処理	
6200 23	2B-41 2,3	須恵器	環	(13.3)	3.6	7.0	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ	雲母粒含む	
6200 24	2A-58,1 2B-41.4	須恵器	環	?	?	7.0	ロクロ	ナデ-? ナデ-ナデ-ヘラ	雲母粒含む	
6200 25	004勝	土師器	高台付壺	?	?	6.9 台(3.9)	ロクロ	ミガキ-? ?-ナデ-ナデ-ナデ	内面黒色処理	
6200 26	2B-91.1 3B-01.7	土師器	皿	14.1	2.1	5.5	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-無調整	回転糸切り	
6200 27	4B-01 2.	土師器	高台付皿	13.5	(1.9) 台(?)	4.7 台(?)	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-ヘラ-ナデ	回転ヘラ切り	
6200 28	3A-89 2.	土師器	皿	9.0	1.3	4.3	ロクロ	ナデ-ナデ ナデ-ナデ-無調整	回転ヘラ切り	
6200 29	3B-81.2 4B-01.8	土師器	壺	?	?	(16.0)	ロクロ	ナデ-? ?-ヘラケズリ		
6200 30	3B-73.1 4B-10.1	須恵器	壺	(20.1)	(17.4)	?	タタキ	ナデ-ナデ ナデ-タタキ-?		

第15表 グリッド出土土器表(2)

ナデが施される。砂粒を多く含む焼成は良好である。

30は須恵器の壺である。球形を呈し、頸部付近に厚みをもつ。頸部から口縁部にかけては外反しながら強く外に張り出し、口縁部に厚みをもつ。胴部外面には叩き目が明瞭に残るが内面は横方向のナデである。胎土は密で細かく、焼成は良であるが、須恵器よりも土師器の感が強い。

グリッド出土鉄器(第63図、図版30)

1は斧先である。8.3cmを測り袋部の断面形状は長方形を呈する。袋部から刃部にかけて広がり、撥形を呈する

2は用途不明の鉄製品である。鉄板状のもので一部折り返されたようになる。厚みは3mm程であり、容器の可能性もある。

3~5は鉄釘である。いずれも断面形状は方形を呈する。4は一部欠損しており接合はしていないが、全長15cm程になるものと思われる。

第3章 小 結

第1節 先土器時代

1. 宝水作遺跡におけるブロックの特徴

当遺跡ではIV層に分布する10ブロックが検出した。各ブロックは環状に分布しているのは第2章、第1節で述べたとおりであるが、ここでは環状ブロック群を構成するブロック相互の関係について考えてみたいと思う。

附図1には、各ブロックを構成する石質と器種についてグラフ表示してあるが、各ブロック毎石質、器種のそれぞれについて特徴と類似点および相違点が窺える。

プレ9・10は単独出土のためここでは着目しないが、残るプレ1～8において他のブロックと異なる様相を呈しているのはプレ1であるといえる。プレ1を構成する石器の点数が少ないためもあり、器種別あるいは石質別では明確な相違点は指摘できないが、石器点数が少ないという点で逆に他のブロックとは区別できる。

プレ2～8に関しては石質に主眼を置いた場合、確かにブロック毎の特徴がとらえられ、それについての共通点も見受けられるが、当遺跡においては器種による判別を主体とする方が、よりブロック群を構成する各ブロックのあり方が、強く浮き出てくるように思える。

プレ3は流紋岩製の接合資料を構成する剥片が大半を占め、プレ3にて母岩から素材剥片を作出する、所謂剥片剥離が行なわれていたことは事実である。だが他のブロックにおいては剥片どうしが接合する事例はあっても、明確な一貫性のある剥片剥離工程は見られない。また、剥片と碎片に関しては、プレ2、プレ3は剥片の点数が碎片を凌駕するが、プレ5～8は逆に碎片の点数が大半を占めるようになる。ただし、碎片は石器製作の際の調整碎片と思われるものは無く、ほとんどが素材剥片折断後に施された調整の際に出た碎片である。

ここで着目したいのが折断剥片であるが、折断剥片は剥片剥離作業により作出された素材剥片の形状を整えるために折断された剥片、いわば二次加工的な要素をもつものであり、剥片剥離作業と石器製作との中間の段階に位置するものであるといえる。この折断剥片を数的に多く伴出するブロックは5～8ブロックであり、そのほとんどが黒曜石製のものである。先にも述べたが、折断剥片が折断面にて接合する例は数例見受けられるが、接合した折断剥片どうしが接合する例は確認できず、プレ5～8では黒曜石における素材剥片を作出する剥片剥離は行なわれていないと断言できる。折断される前の段階の素材剥片の作出はブロック外で行なわれ、その素材剥片を搬入し、プレ5～8内で折断、調整を行ったものであろう。当遺跡では黒曜石の剥片剥離が行なわれたブロックは結果論として確認されなかったが、あるいは掘削された台地南東部に位置していたかもしれない。

プレ3を主体として確認された接合資料は流紋岩製のものであり、プレ5～8で出土している黒曜石製の折断剥片とは結び付かないが、石質にこだわらず各石器のもつ意味から考慮すると、石器製作の工程の中で剥片剥離作業が行なわれていたブロックと、素材剥片を加工するブロックが明確に区別できる。当遺跡のブロック群は環状に配置しているが、こうした同時に形成された、隣接したブロック相互で分業的な石器製作作業が行なわれていたことは、当時の集団を考えるにあたり興味深い事例となろう。

2. 他遺跡の事例の検討

宝永作遺跡で確認されたブロック相互の分業的な石器製作の同例を他遺跡で見出すにあたり、類似したブロックの配置、それも同時に形成されたブロック群を対象としなければならない。また宝永作遺跡の、素材剥片を折断し石器製作をおこなう技術基盤と同一の石器製作技術を有することが条件ともなる。

だが、VI層段階での近接したブロック群が接合関係をもつ事例は確認されてなく、逆に接合関係をもつブロック群を検討した場合、近年事例の増加しているVII～IX層文化の環状ブロック群があげられるが、技術基盤が全く異なったものとなってしまう。

しかしここでは同時期に形成されたブロック群における、各ブロックの分業的な性格を明らかにすることを主眼とし、特に宝永作遺跡と同一の技術基盤をもつことを条件から除外して考察を行ない、同一の技術基盤の点では他の事例が報告されるのを待ちたいと思う。

第64・65図は分郷八崎遺跡で検出された環状ブロック群について、報告書を基に接合状況を再度作成したものである。

宝永作遺跡で検出されたブロック群とは所属する文化層が異なるが、折断されたものと思われる剥片がみられ、宝永作遺跡と同様に剥片剥離作業と石器製作の中間段階の作業が行なわれているため、比較資料として扱うこととした。

ブロック群の細分については報告書のとおりでほぼ問題はないものと思われるが、Dブロックについては、Cブロック内で主に剥片剥離作業がおこなわれている接合資料の一部を平面分布の概念より細分し、1ブロックとしているため、Cブロックに包括して考えるのが無難であろう。

石材は黒色安山岩がほとんどを占め、他に黒色頁岩、赤色珪質岩、黒曜石等が少数混在するが、黒色安山岩以外は搬入された石器である可能性が強く、よってブロック群における剥片剥離工程を考えるにあたり、特に着目する必要はないものと思われる。ただ、Fブロックについては出土する石器の石材が全て黒曜石であり、他のブロックでは黒曜石製の石器はみられないため、ブロック群を構成する小ブロックの中で、宝永作遺跡プレ1のように他のブロックと性格が異なるものと考えられる。石材の異なるナイフ形石器を1点含み、剥片が1点の他は砕片

である。出土している砕片が石器製作により作出されたものかどうかは判断できないが、砕片の出土点数から少なくとも同ブロック内で素材剥片を得るための剥片剥離作業が行なわれていた可能性はないものと思われる。

各ブロックをみるとBブロックを除き、少なからず他のブロックとの接合関係がみられる。特にIブロックにて頻繁に剥片剥離が行なわれている接合資料の石器が、C、Eブロックに属していることがわかる。この接合資料の石核はIブロックに属しているため、このブロックを中心としたものとして良いであろう。また、Cブロックは石器出土点数が多く、ブロック内での接合資料も多く確認されている。接合関係は認められていないが石核の点数もIブロック同様多い。他にC、Iブロック程ではないが、E、Gブロックでも石核および石核を中心とした接合資料が確認されている。これらのC、E、I、Gブロックは主に素材剥片の作取により形成されたブロックとして性格付けでき、さらに実線で示したように、折断による剥片等の接合も見受けられるため、素材剥片の作出から石器製作までの作業を行っていたものとしても良いであろう。

石核を共伴せず、剥片が石器出土点数の大半を占めるブロックとしてA、Hブロックがあげられる。C、Iブロックを中心に剥片作出が行なわれている接合資料の一部にあたる石器が出土しているが、ブロック内では剥片剥離作業の行なわれた痕跡はみられず、折断された剥片もみられない。共伴する砕片が問題となるが、おそらく剥片剥離作業により作出されたものではなく、石器製作の際に作出されたものであろう。

残るAブロックは他のブロックとの接合関係は確認されず、ブロック内での折断剥片の接合が確認されているのみである。あるいはCブロックの一部を包括するかも知れないが、素材剥片を得るための剥片剥離作業が行なわれていないことは明確であり、石器製作を中心とした機能をもつブロックとして定義付けできる。

以上、分葬八崎遺跡で検出されたブロック個々の性格について、簡単ではあるが検証を試みた。宝永作遺跡で検出されたブロック群とは異なる文化層が異なるため、剥片剥離技術、石器製作技術の点では比較して考えられなかったが、ブロック群を形成する各ブロックの性格の違いと共に、素材剥片を作出するブロックと素材剥片を加工するブロックがみられた。文化層は異なっても狭い範囲に同時に形成されたブロックでは、分業的な石器製作が行なわれていた可能性が強いと言えるであろう。

同時期に形成されたブロックが密集して検出されている例は近年増加してはいるが、未だそれらを統括して考察を行なうには事例が少ない。加えて宝永作遺跡で検出されたブロック群と同一の文化層より検出されている例はなく、現時点以上の考察を行なうには難がある。またここでは同時形成されたブロック群という点を前提条件としたため現状ブロック群を扱ったが、現状ブロック群以外でも、同時形成された可能性のあるブロック群という条件を満たしてい

ば、無論のこと資料として活用できた。ただし接合関係が認められないものが多いため、同時形成という点で説得力に欠けるため、敢えて比較資料として提示しなかった。現状ブロック群以外の、宝永作遺跡で検出されたブロック群と類似した資料の蓄積を待ち、改めて考察を書き加えたいと思う。

第2節 縄文時代

宝永作遺跡の調査により、高谷川流域における縄文時代の一様相が、おぼろげながらも浮き出てきた感がある。

高谷川流域の低湿原では、墳塚に代表されるように、後期から晩期にかけて生活に密着した漁撈が営まれていたことが窺え、これは宝永作遺跡においても、この時期の遺物の出土がより台地の標高の低い地点に移動していることにより示唆できる。

さらに宝永作遺跡では、縄文時代早期、撚糸文系土器群の終末期に位置付けられる花輪台式土器が、数量的にも資料的にもまとまった出土をみせ、これは花輪台式土器の標識遺跡である花輪台貝塚とともに、利根川下流域のみならず、下総台地東部を含む当該期の様相を考えるうえで良好な資料となろう。

ここでは、宝永作遺跡から出土した花輪台式土器を中心に、その特徴を明確にし、また花輪台貝塚を始め、県内各地より出土している花輪台式土器との比較から、撚糸文系土器群の終末期の一様相について考えてみたい。

1. 宝永作遺跡出土の花輪台式土器

宝永作遺跡から出土した花輪台式土器は、所謂花輪台式土器とされる、口縁部直下に撚糸圧痕を施し無文帯を形成するものは点数的に少数であり、おそらく個体数にして6個体ほどであろう。第33図に図示した1～25がそれに該当する。

この中でも1～7は小型で口縁部直下に若干の無文帯を形成し、8以降のものは、口縁部直下に1条ないし2条の撚糸圧痕を施して無文帯を形成しており、口縁部は丸みを帯びながら厚みをもつものである。これらは撚糸文系土器終末期に位置付けられる土器の中でも、撚糸文の特徴がよく表われているものであり、明らかに花輪台期に先行する時期の系譜を引くものといえる。

これに対し、同じ花輪台期に属するものと思われる土器の大半は、口縁部直下の無文帯を形成せず、綾杉状の縄文が施されるものと、文様をもたず成形時のケズリをそのまま留めるものである。巨視的にみると花輪台Ⅱ式に属するものである。



第66図 花輪台式土器出土遺跡位置図

器形に関しても口縁部に厚みをもたず、ほとんど胴部の厚みのまま外反、あるいは直線的に立ち上がり、口縁部はへら状工具により画面に調整されるものである。さらに底部は尖底になるものと、完全な平底になるものが共存している。器形のみに着目すると撚糸文系土器の特徴よりも沈線文系土器の特徴に近いものであるといえる。

詳細な観察を行なう。第33図の26～28は同一個体であり、口縁部直下に1条の撚糸圧痕が不

遺跡No	遺跡名	所在地	出土土器				文献	備考	名
			輪	文	大	平			
1	宝永作	千葉県山武郡芝山町	○	-	○	○			吉田 特『茨城県花輪遺跡報告』『日本考古学』1-1 日本考古学研究所 1943 吉田 特『古物台貝塚』『茨城県史料 考古資料集 先土器・縄文時代』茨城県教育委員会 1975
2	花輪台貝塚	千葉県山武郡芝山町	○	○	-	○			藤田昌幸『古物台式土器』『考古学雑誌』74-1 日本考古学会 1988 吉田 特『縄文早期花輪台式文化-茨城県花輪台貝塚-』『考古学』下 吉川弘文館 1988
3	ニッ木向台	千葉県松戸市	○	○	-	-			江崎正典・磯野 実『ニッ木向台遺跡第三編-市場坂遺跡群の考察』『下総考古学』下総考古学研究会 1988 庄司 克・堀越正行『松戸市ニッ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究』『史観』3 史観同人 1974
4	東中山石神	千葉県市川市	○	○	-	-			鈴木道之助『東中山石神遺跡の掘発文土器について』『東中山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977 鈴木道之助『花輪台式土器とその続家』『史観』18 史観同人 1978
5	久我台	千葉県東金市	○	○	-	-			藤田昌幸『縄文・弥生時代の遺物』『東金市久我台遺跡』千葉県文化財センター 1988
6	南外輪戸	千葉県市川市	-	-	-	-			中西真由・中野裕博『東金市南外輪戸遺跡及び南外輪戸遺跡調査報告』『考古学雑誌』1985 遺・木道土器調査報告書 管古墳群及び南外輪戸遺跡調査会 1985
7	墨新山	千葉県市川市	○	○	-	-			船谷徹夫『木ノ瀬式土器を伴う遺跡』『フィールド考古 足あと』5 足あと同人 1984
8	旗山谷	千葉県市川市	○	-	-	-			古内 茂地『旗山谷遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』電 千葉県文化財センター 1982
9	木ノ瀬	千葉県成田市	○	-	-	-			菅 重行・池田大助『木ノ瀬』千葉県文化財センター 1981
10	新宮京橋南端 No. 66	千葉県市川市	○	○	-	-			『史観』No. 66遺跡』『千葉県埋蔵文化財発掘調査報告 昭和53年度』千葉県教育庁文化課 1980
11	堀田原	千葉県八千代市	○	○	-	-			船谷徹夫『木ノ瀬式土器を伴う遺跡』『フィールド考古 足あと』5 足あと同人 1984
12	浅井台	千葉県千葉市	○	-	-	-			船谷徹夫『木ノ瀬式土器を伴う遺跡』『フィールド考古 足あと』5 足あと同人 1984
13	陸境貝塚	千葉県市川市	○	○	-	-			西村正徳・金子弘昌『千葉埋蔵文化財調査報告』『古文化』第36号 早稲田大学考古学会 1981
14	西広貝塚	千葉県市川市	○	-	-	-			米田清之助他『西広貝塚』上総部分遺跡調査班 1979

第16表 花輪台式土器出土遺跡表

鮮明ながらも確認でき、口縁部無文帯を意識しているかのようなのであるが、実際には無文帯は形成しておらず、単に所謂花輪台式土器の文様要素を残しているのみである。29についても鋸齒状の摺糸瓦痕が口縁部直下に施されているが、無文帯は形成されず、菱形状の縄文は口縁部直下より施文されている。器形は34図以降に図示したものと同一であり、この点からも所謂花輪台式土器との相違が指摘できる。

第34～37図に図示したものは口縁部直下に摺糸瓦痕を施さず、口縁部直下より菱形状の縄文が施文されるものである。施文される縄文は粒の状態から、施文方向を縦位から横位に交互に変えることによって、結果的に菱形状に施文しているのが窺える。

器形は口唇部に厚みをもたず、外反または直接的に立ち上がり、口縁部を面的に調整するのが全てである。器形的な相違点は尖底となるが平底になるかであり、尖底となるものは第35図54、第37図160・161のように、胴部下位より底部にかけて厚みをもちながら徐々にすぼまるのに比べ、平底となるものは第37図163のように、胴部下位から底部にかけての器厚は一定であり、完全な平底を形成している。両者における相違は明確であり、逆に尖底と平底が共存していることが断言できる。

第38～41図は縄文が施文されない、ケズリ痕が残るのみ無文土器で、器形的には前述した縄文が施文されるものと変わりが無い。強いて相違点を挙げるならば第41図262にみられる、尖底と平底の中間的なものが存在することのみである。これは1個体のみであり、宝永作遺跡から出土している花輪台式土器の特徴としては捕らえにくい、他遺跡から出土しているものに類似した資料がみられるため、他遺跡との比較の中で詳細を述べたいと思う。

文様要素の一環として挙げられるものは、第38図176・180にみられる刺突の施されたものである。口縁部下にかなり間隔が空いているが、先端の尖った工具により刺突を加えているのが確認できる。ただし刺突の施された土器に関しては極少数であり、他遺跡より出土している刺突の施された土器と比較すると、宝永作遺跡における花輪台期に属する土器の主要な文様要素として扱うには疑問が残る。

以上、宝永作遺跡から出土した花輪台式土器についてその特徴を検討してみた。まとめて箇条書きにして再確認してみたい。

1. 口縁部直下に無文帯をもたず綾杉状の縄文が施文される土器と、無文の土器が存在する。
2. 口縁部は面的に調整され、また口縁部の肥厚部分はない。
3. 尖底と平底の作りがそれぞれ明確であり、双方が同時存在する。
4. 口縁部直下に無文帯をもつ土器が混在するが、数量的に客体的である。

上記の要素をふまえて、次に他遺跡から出土している花輪台式土器と宝永作遺跡との比較・検討を試みたい。

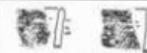
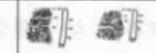
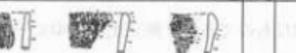
2. 他遺跡出土の花輪台式土器との比較・検討

宝永作遺跡で出土した花輪台式土器と、他遺跡のものを比較するにあたり、先ず花輪台貝塚で出土している土器群との比較を試みたいと思う。

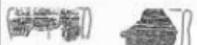
花輪台貝塚の資料を巨視的に観察すると、縄文が施文されるものと、無文との2種に分けられ、刺突文や沈線文が施されたもの等、他の文様要素をもつ土器は含まれていない。この点では宝永作遺跡と類似している。しかしその中で撚糸文が施されるものは、口縁部直下に撚糸匠痕文が施され、無文帯を形成している土器が全てであり、宝永作遺跡の例のように口縁部直下から縄文が施されたものが含まれていない。むしろ宝永作遺跡で客体的なものが主流を占めている点が相違点として挙げられる。

花輪台Ⅱ式土器とされている無文の土器に関しては、宝永作遺跡のものと大きな相違点はみられず、口縁部の面的な調整等は同様であり、縄文の施文される土器では確認できなかった底部破片にも、やはり尖底と平底が共存しているのが確認できる。ただ無文土器の中で異なる点は、第67図には図示しなかったが、口縁部直下に明確な沈線が1条廻るものを含むことであろう。この土器に関して無視することは出来ないが、おそらく1個体相当と思われ、極めて客体的なものであり、無文土器の中で一つの類例として評価したいと思う。

花輪台貝塚以外の遺跡から出土しているものでは、縄文が施文される土器に関しては花輪台貝塚に類似したものであるといえるが、それ以外に絡状体匠痕文が施文される土器、刺突文を

	捲系文	絡状体圧痕文	刺突文	沈線文	無文
宝永作					
花輪台貝塚					
二ツ木向台					
東寺山石神					

第67図 花輪台式土器文様別組成図(1)

久我台				
南外輪戸				
復山谷				
木ノ根	     	     	     	          
鶴崎貝塚				
西広貝塚				
	燃糸文	絡状体 圧痕文	刺突文	沈線文
				無文

第68図 花輪台式土器文様別組成図(2)

有する土器、沈線文が施される土器が混在していることが注目される。特に木ノ根遺跡では、無文土器を除く他の文様要素をもつ土器が、それぞれ点数的にまとまって出土している。これらは口縁部に丸みをもち肥厚するもので、かつ口縁部が外反している器形であり、また他遺跡ではみられない、最大径が胴部上位に位置する器形の土器も混在している。文様のにも独特なものがみられ、胴部上位には摺糸文が、胴部下位には沈線文が施されている。複合的な文様要素をもつ土器がその組成に含まれている。

このように一概に花輪台式土器とはいえ、器形、文様要素の点で遺跡単位でかなりの相違がみられ、この点のみ着目した限りでは、それぞれの遺跡で出土している土器は、形式の異なる土器となりうる恐れもある。ただ単に器形、文様要素のみで編年的な位置付けを行なうのみならず、共存する他の摺糸文最終末期に属する土器との比較・検討も必要となろう。

以上、摺糸文系土器最終末期に属する花輪台式土器について、宝永作遺跡から出土した資料を中心に検討を試みた。

結果として利根川下流域を中心に下総台地に展開する花輪台式土器は、文様要素を主体に器形の面からもかなりのバラエティーが存在するものであることがいえる。層位学的に実証は困難であるが、このバラエティーは文様構成の時期的な推移も含まれるであろうが、文様構成の時期的な推移よりも、より地域的な影響による差が大きいものと思われる。それも極めて狭い範囲での地域差といえるかもしれない。換言すれば、摺糸文系土器から沈線文系土器への過渡期に位置する時期のものとして、双方の様相が混在して同時存在している結果によるものである可能性が考えられる。

しかし、これらを実証するにはあまりにも資料が少なすぎる。花輪台貝塚と宝永作遺跡との間に位置する遺跡、および利根川下流域に位置する遺跡、さらには花輪台貝塚以北の遺跡からの資料の蓄積を期待したい。

第3節 奈良・平安時代

1. 祭記遺構の時期的考察

宝永作遺跡で検出した祭記遺構は2地点であり、他に遺物の集中は見られないが、2地点の祭記遺構の周辺より散漫に遺物が出土している。

第1祭記遺構から出土している土器は杯、壺、甗である。杯の形状は第2章第3節の冒頭で述べた形態分類に基づく。すべてI群に属するものであり、他の形態のものは全く出土していない。体部外面をヘラケズリにより形成するもので、8世紀中葉に属するものである。

第1祭祀遺構に対し、第2祭祀遺構で出土している杯の形態をみると、I群を2個体のみ含むが、出土している杯の総数ではごく僅かなもので、ほとんどがI群以外の形態である。2個体のI群に属する杯が、第2祭祀遺構に属する根拠は、平面分布上でのみ見えることであるが、第2祭祀遺構の時期を考える場合、I群を考慮せずに考えるのが妥当と思われる。またⅢ群b類としたものについても検討を要するが、9世紀初頭に位置付けられるものである。

宝永作遺跡で検出した祭祀遺構は、上記のようにそれぞれの時期に位置付けられ、8世紀中葉から9世紀初頭にかけて祭祀が行なわれた場所を想定できる。

ただしここで問題になるのが、2地点の祭祀遺構の周辺より散漫に出土している小型の土器群である。これらの大半を占める杯に関しては特に問題はないが、4個体出土している小型の高台付杯については、9世紀初頭以後のものであり、おそらく9世紀前半に位置付けられるものであろう。4個体の高台付杯がすべて同一地点から出土したものではないため断言は出来ないが、8世紀中葉から9世紀初頭にかけての時期を中心に祭祀が行なわれ、それが9世紀前半まで矮小した形で存続していた可能性があると考えても良いかもしれない。

2. 他遺跡出土土器との対比

宝永作遺跡で検出された祭祀遺構は、遺構の存在は確認されていないが、他の遺跡において該期に属する住居跡より出土している一般に使用された土器と比較すると、大きさの点で異質な土器がまとめて出土している。異質という点は製作手法、調整等ではなく、あくまでも大きさの点のみである。

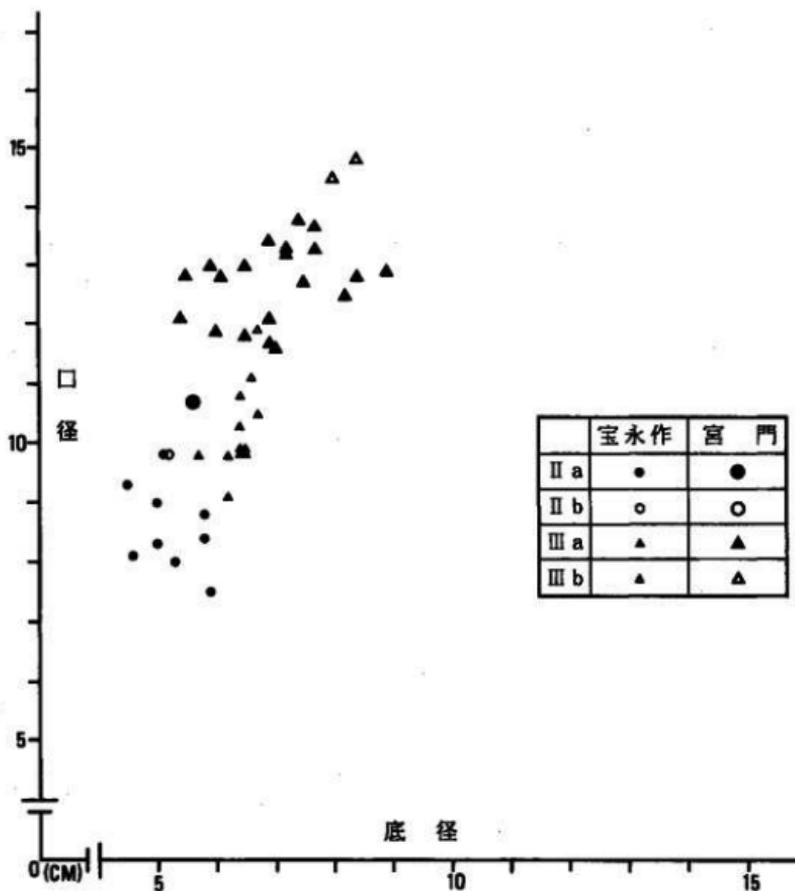
このような一般生活において使用されたとは考え難い土器の一群が、遺構外で確認されたことは、極めて祭祀的な意味合いが含まれていると思われるため、現時点でそれを解明することはあまりにも困難であり、かつ類例も少なすぎる。

ここでは祭祀の解明よりも、宝永作遺跡で出土した土器群の形状が、該期の土器群をいかに異なるかを明確にし、後の研究の一資料とすることを目的としたい。

宝永作遺跡の近辺では、8世紀中葉から9世紀初頭に属する遺構を検出している遺跡の発掘例はなく、よって多少広範囲にはなるが、高谷川と木戸川にはさまれる台地上での発掘調査の成果をもとに、宝永作遺跡で出土した小型の土器について考えたい。今回は木戸川左岸に位置し、比較的8世紀中葉から9世紀初頭段階の資料がまとめて出土している宮門遺跡と対比して考えることとする。

第69図は宝永作遺跡で検出された祭祀遺構から出土した杯と、宮門遺跡で検出した8世紀中葉から9世紀初頭に属する住居跡から出土した杯について、それぞれ底径と口径の数値を図に表わしたものである。

底径の計測について基準の明確でないI群を省略し、II群、III群のそれぞれa・b類を対象



第69図 宝永作遺跡・宮門遺跡形態別環比較図

とし、各々図にあるようにドットの形状を変えてある。さらに宝永作のそれは小さいもの、宮門遺跡のそれは大きいものとした。

図をみると各群・類に属する土器の個体数に差があるため、平均値の明確な数値はあげられないが、各群・類共に2つの遺跡で同様の配列が確認でき、2遺跡より出土している土器の違いはただ単に大小の違いのみであることが判明する。

II群a類については宮門遺跡では1個体のみの出土であり、明確な数値はあげられないが、4分類された中でも一番小型のもので、底径を1とした場合、口径の比率は1.6前後となり、この比率はほとんど個体の中では変化がみられない。換言すると口径が大きくなっても底部がそ

れにつれて大きくなるものであることが指摘できる。宝永作遺跡におけるⅡ群a類に属する土器の口径は8.5cmを中心にその前後であるが、宮門遺跡では11cm前後になるものと思われ、明らかに双方で差がみられる。

Ⅱ群b類に関しては、宮門遺跡ではこの類に属する土器が出土していないため、両遺跡の傾向はつかめないが、Ⅲ群a類と口径がほぼ同一数値となるが、底径が小さいものであることがいえる。

Ⅲ群a類は宝永作遺跡、宮門遺跡共にまとまった個体が出土しているため、傾向がつかみやすい。底径を1とした場合、口径の比は1.7未満となるもので、しかも個体ごとにその比率の増減は著しいものである。これは口径に関しては各個体ともおおよそ近似値を示すが、対する底径が個体ごとに異なるため、口径と底径の比に差が生じてくるためである。宝永作で出土しているこの類の口径は10cm程であるが、宮門遺跡のものは平均値ではあるが13cm程であり、この類においても大きさの差が歴然とつかめる。

Ⅲ群b類は、4分類された土器の中でも一番大きいものであり、Ⅲ群a類が口径は変わらず底径が変化するのに対し、逆に底径は両遺跡とも同じような数値をみるが、口径が変化するものである。宝永作遺跡で出土しているこの類の底径は7.5cm程であるのに対し、宮門遺跡のものは8cmを越え、口径に関しても3~4cmの差がみられる。

このように通常住居跡より出土する生活用品とは異なる大きさのものが、それも遺構を伴わずに集中して出土するのは、やはり一般の生活とは意味の異なる、祭祀的な行為が行なわれていた痕跡として考えざるをえない。その祭祀的な行為というものが何であったのかを解明する糸口は、現時点では見出すことは不可能であるが、祭祀を行っていた集団の生活域を考えた場合、宝永作遺跡が所在する台地の状態から、南にあったであろう台地平坦面か、もしくはそれほど距離を置かない地点に位置していたものと思われる。

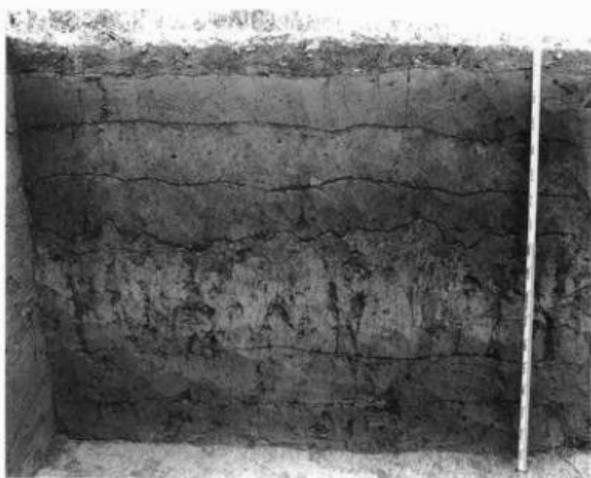
引用参考文献（第3章 第2節で挙げたものを除く）

- 千葉県教育委員会 『千葉県埋蔵文化財分布地図②-千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区-』 1986
平岡 和夫他 『山田・宝馬古墳群』 山田古墳群調査会 1982
郷田 良一・丸山 浩司他 『芝山町山田古墳群 山田出口遺跡』 財団法人千葉県文化財センター 1983
高崎 博昭・奥田 正彦 『主要地方道成田松尾線』 I 財団法人千葉県文化財センター 1983
奥田 正彦・伊藤 智樹 『主要地方道成田松尾線』 II 財団法人千葉県文化財センター 1985
宮 重行 『主要地方道成田松尾線』 V 財団法人千葉県文化財センター 1987
高橋 賢一・渡邊 高弘他 『主要地方道成田松尾線』 VI 財団法人千葉県文化財センター 1991
上守 秀明他 『房総考古学ライブラリー2 縄文時代(1)』 財団法人千葉県文化財センター 1985
白石 典之他 『分郷八崎遺跡』 北橋村教育委員会 1986

写 真 图 版



1. 調査風景



2. 土層柱状図 (3A-08 東壁)



1. 先土器時代ブロック全景



フレ1



フレ2

2. 先土器時代ブロック(1)



先土器時代ブロック(2)

図版 4



先土器時代ブロック(3)



プレ1



プレ2



プレ3

表面



プレ1

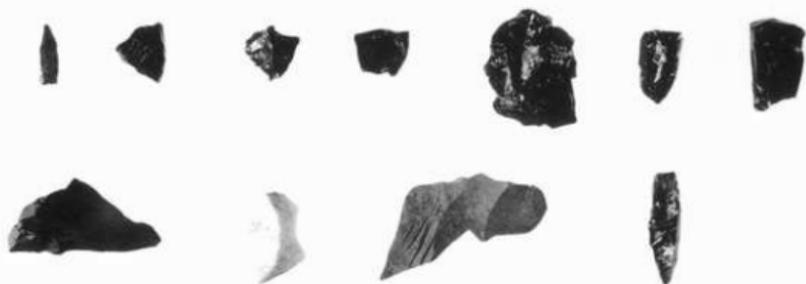


プレ2



プレ3

裏面



プレ4



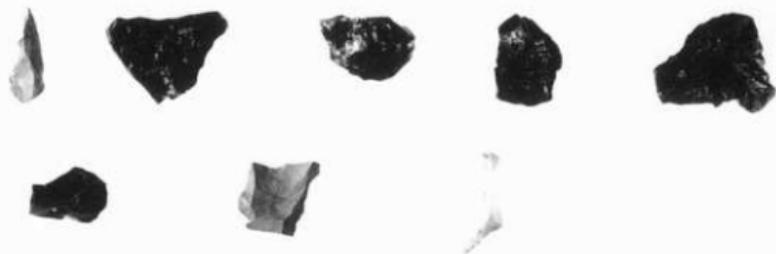
プレ5 表面



プレ4



プレ5 裏面



プレ6



プレ7 表面



プレ6



プレ7 裏面



プレ 8



プレ 9

表面



プレ 8



プレ 9

裏面

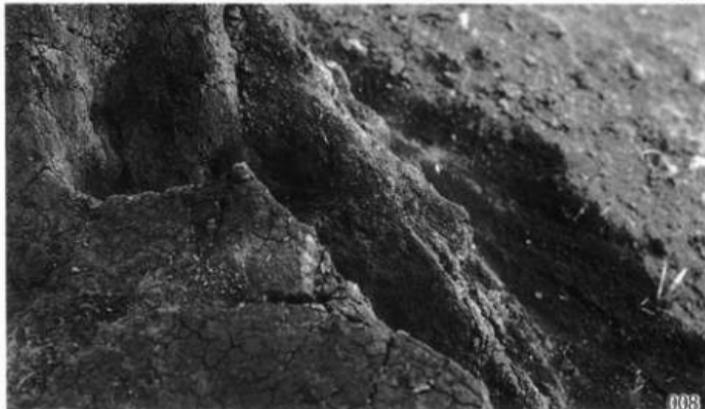


縄文時代炉穴(1)

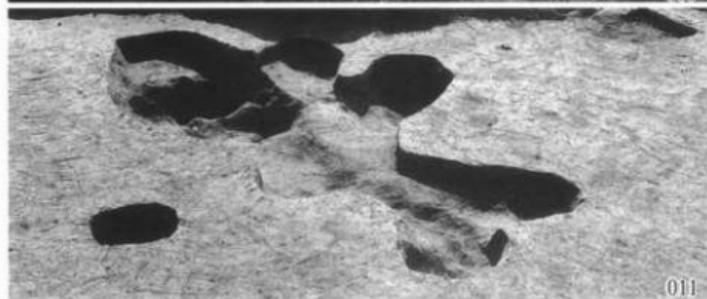
002遺物出土状況



縄文時代研穴(2)



縄文時代炉穴(3)



1. 縄文時代炉穴(4)



2. 002号炉穴出土遺物



縄文時代陥穴状遺構(1)



縄文時代陥穴状遺構(2)

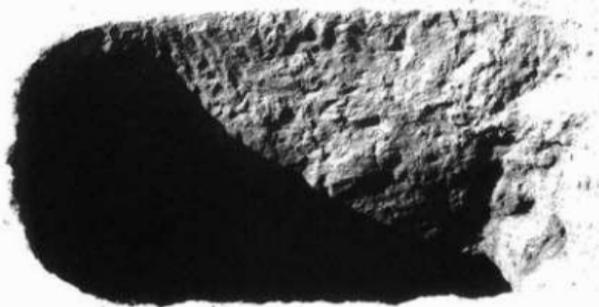
005



*006



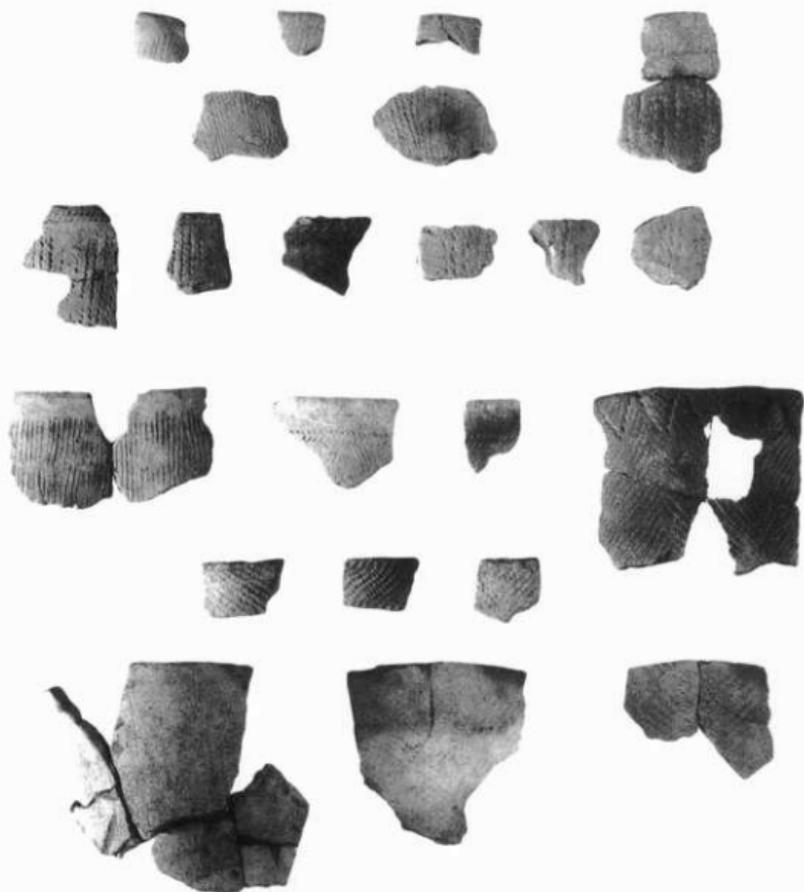
007



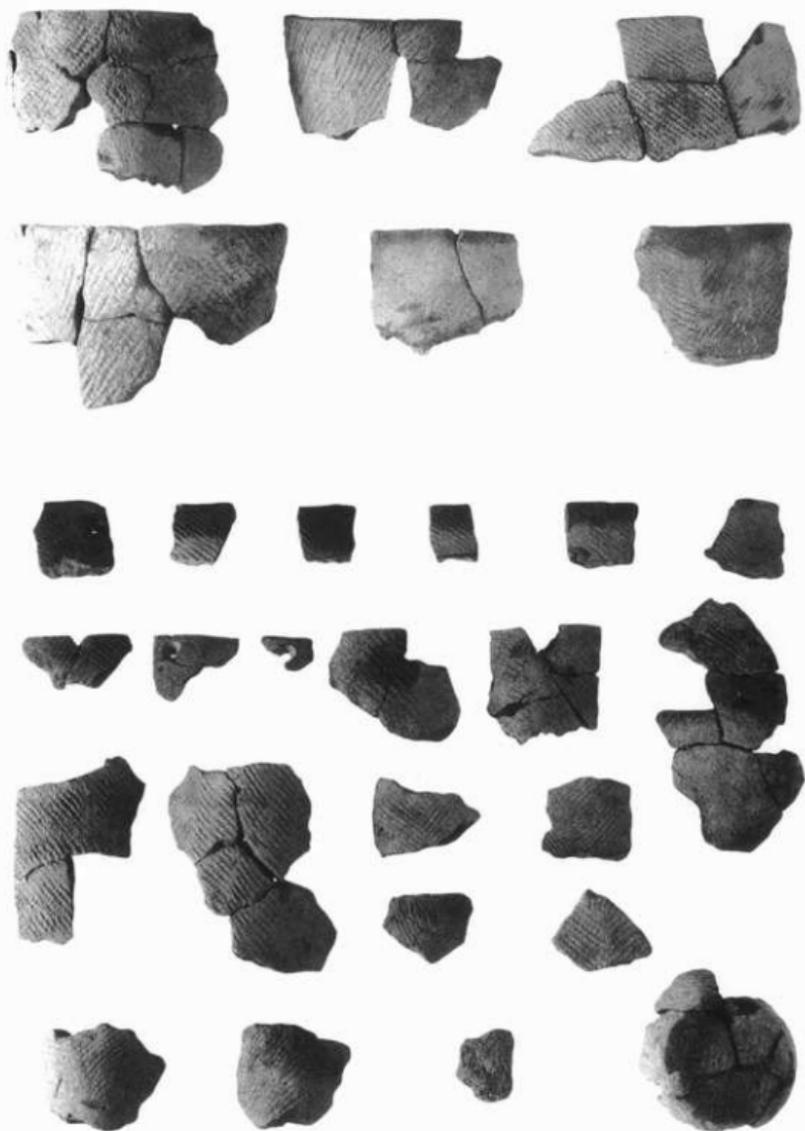
008



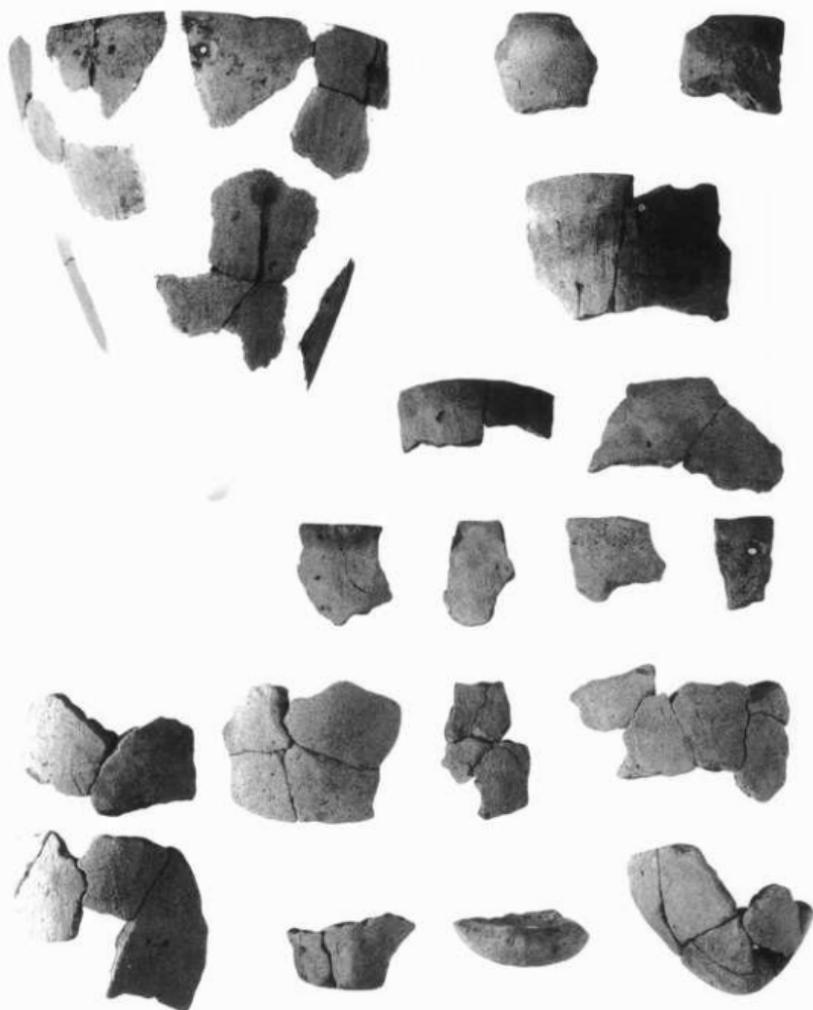
1. 第1群1類1種土器



2. 第1群1類2種土器(2)



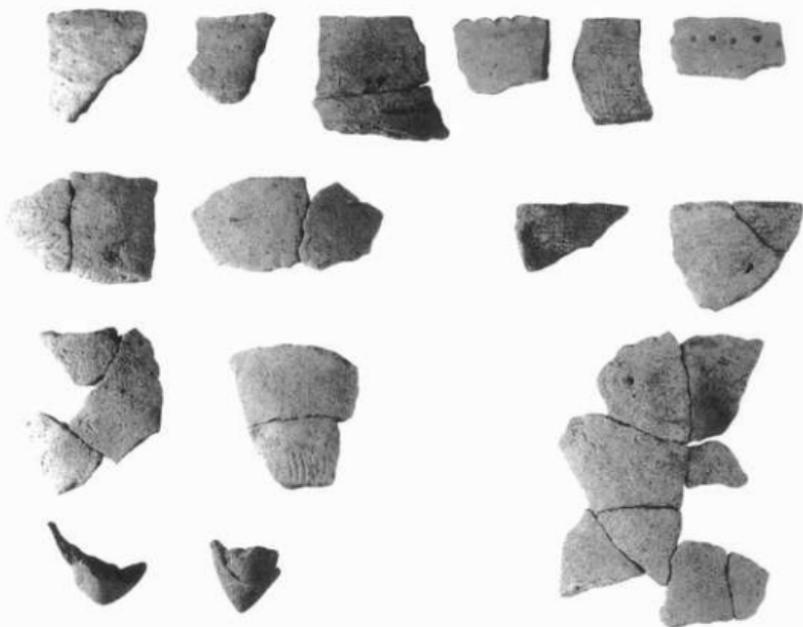
第1群1類2種土器(2)



1. 第1群1類2種土器(3)



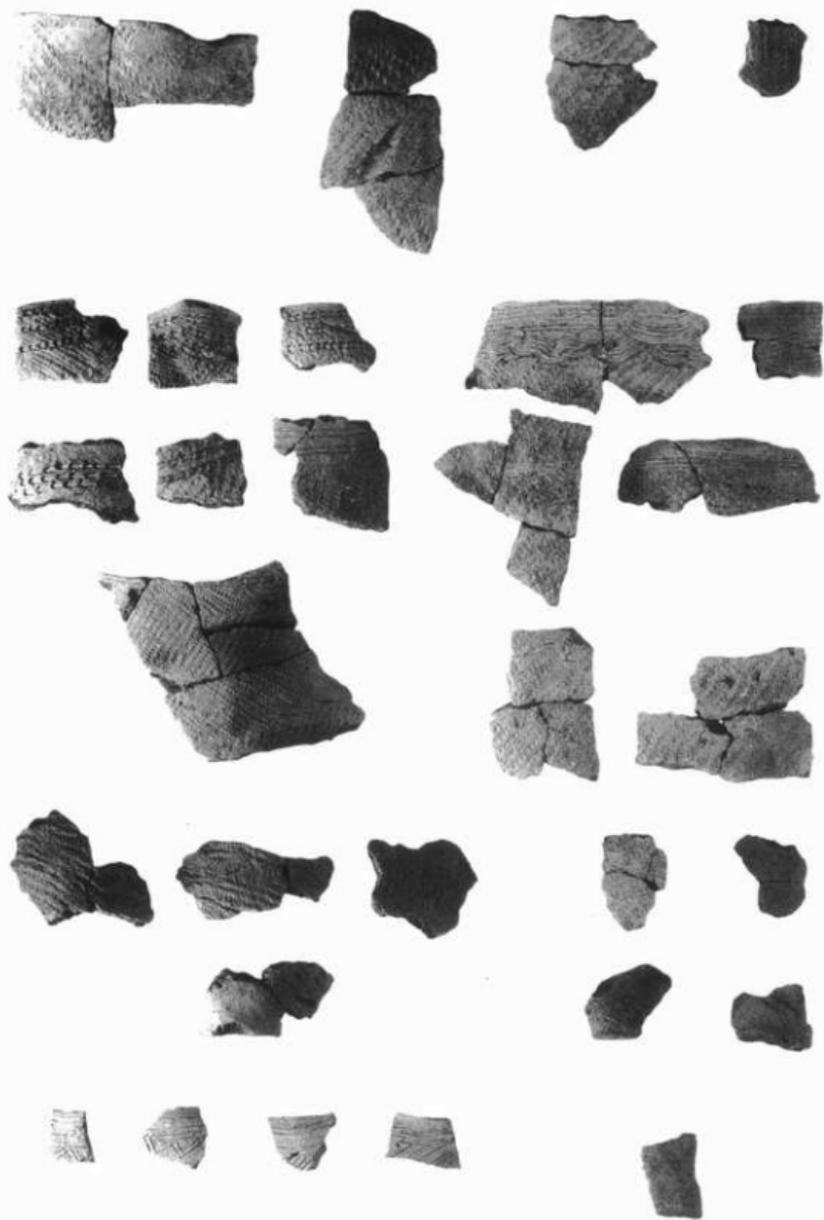
2. 第1群1類3種土器



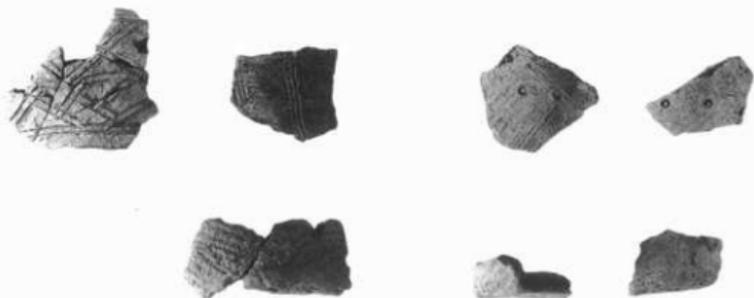
1. 第1群II類土器



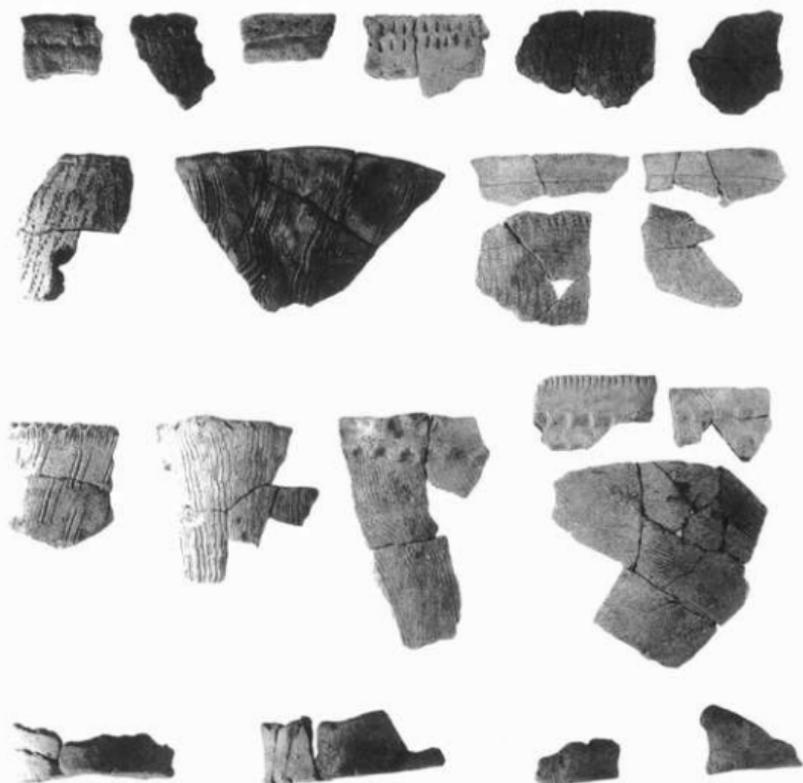
2. 第2群I類土器(1)



第2群I類土器(2)



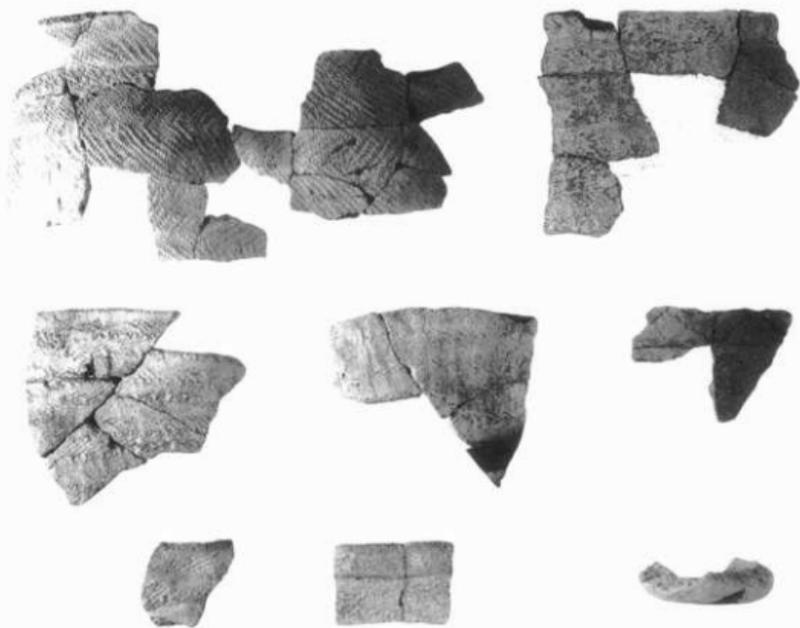
1. 第2群I類土器(3)



2. 第2群II類土器



1. 第2群Ⅲ類土器



2. 第3群Ⅰ類土器



1. 第3群II類土器



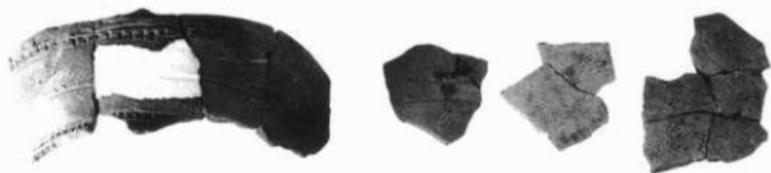
2. 第4群I類土器



3. 第4群II類土器(1)



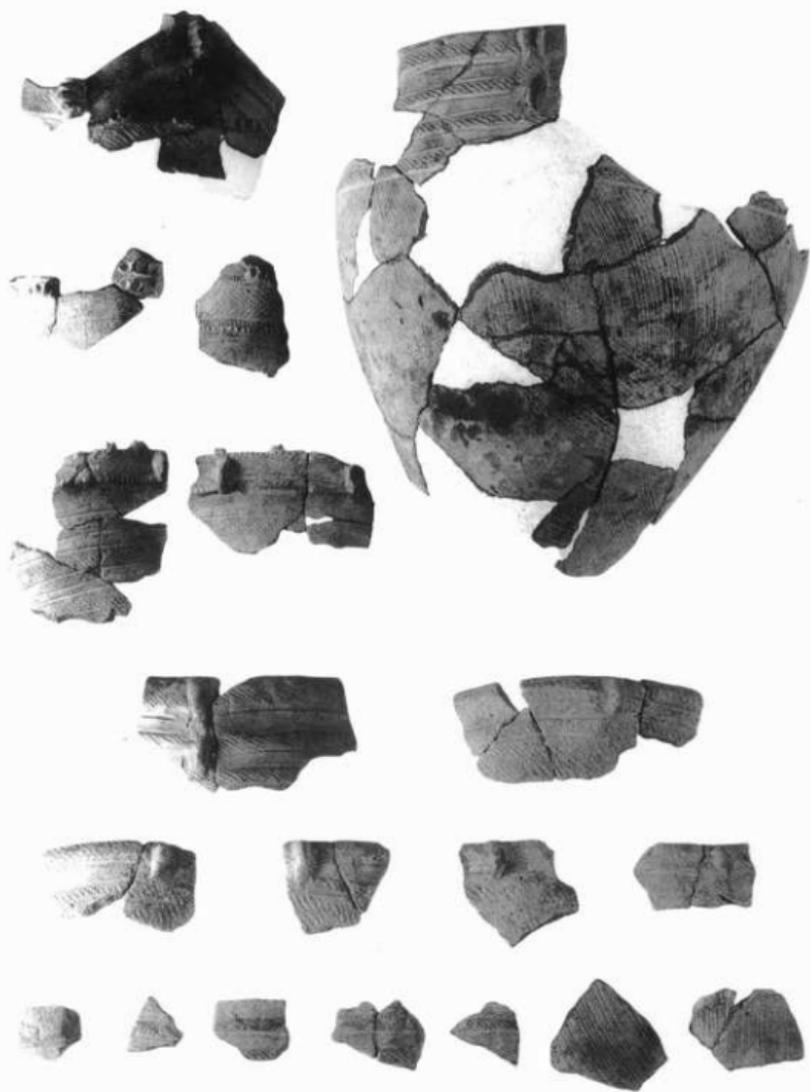
1. 第4群II類土器(2)



2. 第5群I類土器



3. 第5群II類土器(1)



第5群II類土器(2)



表面



裏面



1. 奈良・平安時代祭祀遺構



1



2



3



7



4



5

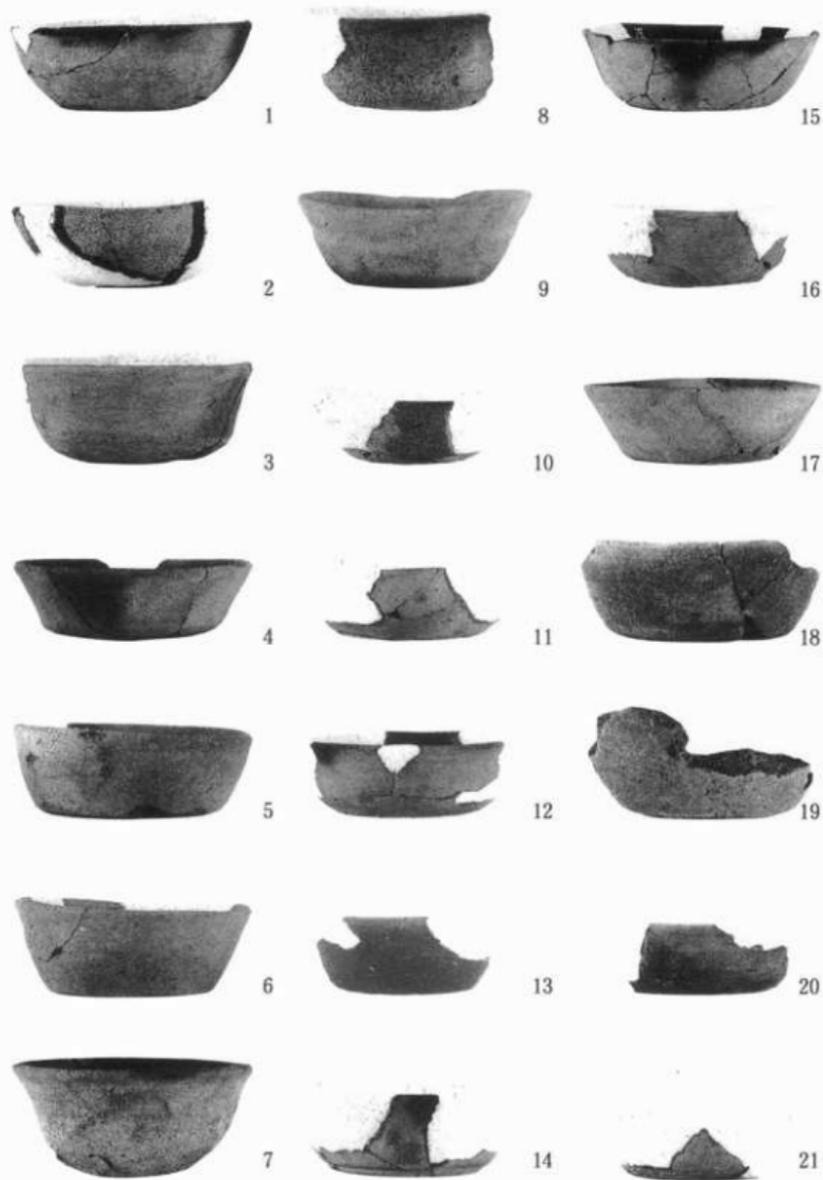


8



6

2. 第1祭祀遺構出土土器



第2 祭祀遺構出土土器(1)



22



24



26



23



25

1. 第2祭祀遺構出土土器(2)



1



8



25



2



9



26



3



10



27



5



18



29



7



19

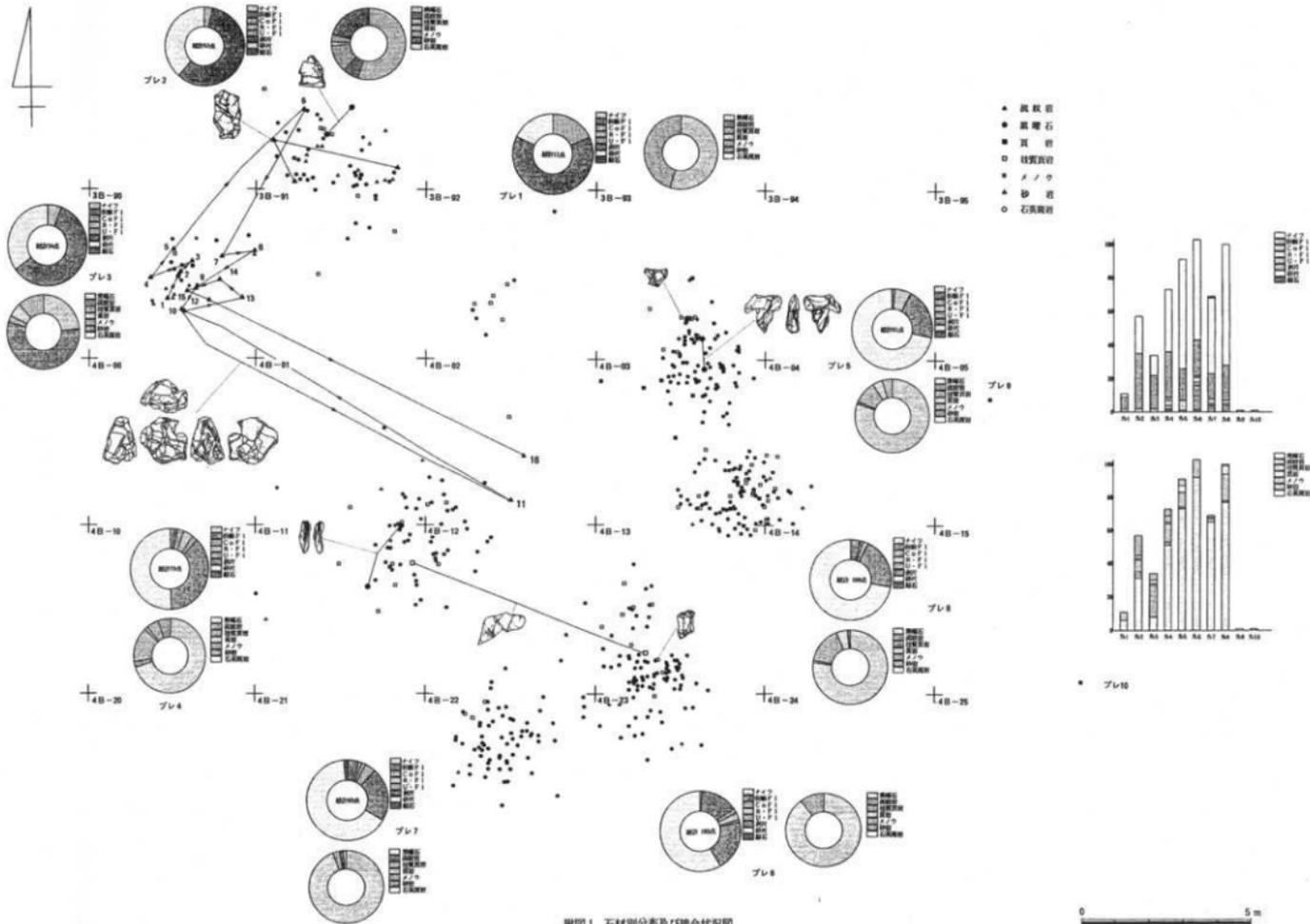


30

2. グリッド出土土器



グリッド出土鉄器



附図1 石材別分布及び接合状況図

0 5m

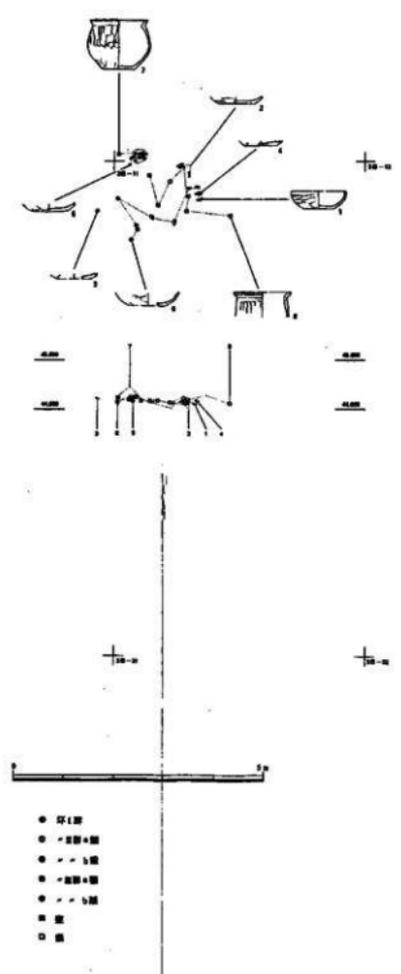
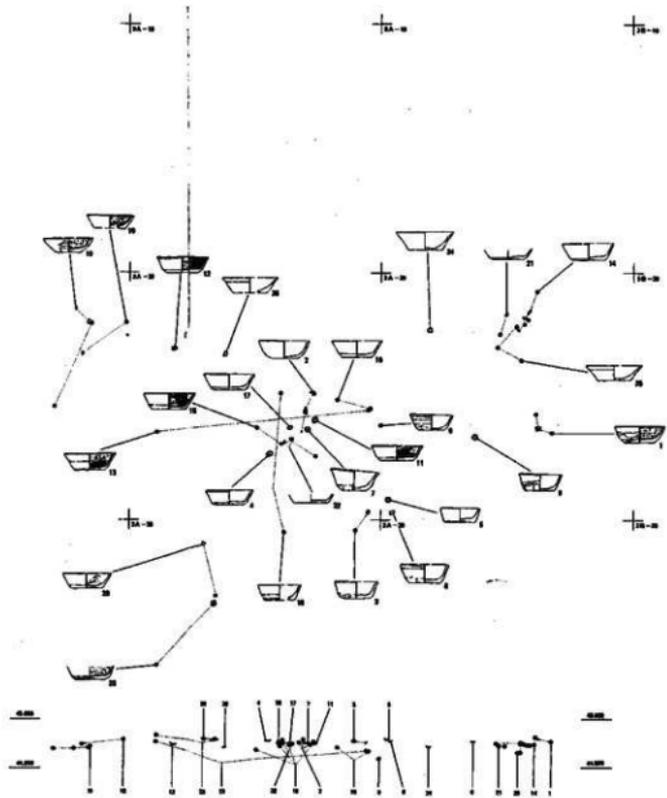
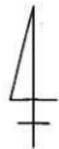


图 2 第 1 - 2 号船位图

千葉県文化財センター調査報告書第214集

山武郡芝山町宝永作遺跡

—芝山第2工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書—

平成4年3月 発行

発行 千葉県企業庁

千葉市長洲1-9-1

編集 財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡無香地

印刷 有限会社 ミリオン印刷

千葉市南町3-4-2
